どうせ人は空を飛べない

三端ジュン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どうせ人は空を飛べない

【Ｎコード】
Ｎ３２８９Ｗ

【作者名】
三端ジュン

【あらすじ】
赤い蝶々に引き合わされたセイと少年アゲハの物語。
そんな大したことはありませんがグロテスクな内容を含みます

#01：赤い蝶

冷房の効いた室内から外に出ると、全身が熱気に包まれ、むっとする。照りつける日差しのキツイ日のことだった。
セイは、今日自分がやるべき事を頭の中に思い描いてみた。特別どうといったこともないのだが。
取りあえずは数メートル先にある自販機で何か飲み物を買うことにした。赤い機体と同じ色をした、３５０ｍｌサイズの缶を汗ばむ額に押し当てる。
ひんやりと言うには少々強力な冷たさでぼうっとした頭がしゃんとするようだった。
カバンの中身は携帯電話と財布、あとは紙切れが一枚入っていた。それだけだった。目と鼻の先の距離にある建物の中に入っていれば、その役割を果たすことが出来た
紙切れは今、セイのカバンの中でただの落書きになってしまっている。
セイは悪戯にその紙切れを取り出すと、半分に折った。それをただ延々繰り返し、細長い棒状に変えたものをそっと空き缶の口に差し込み、くずかごの中に捨てた。
カバンの中身は、携帯と財布だけになった。それならばわざわざカバンを持ち出すこともなかったな、とセイは思った。今、ただの飾り物の一部にしか過ぎない。
再び歩き出してから、強すぎる日差しを浴びて目の前の景色がぐにゃりと歪んで見えはじめた。日頃外を出歩くことが殆どないセイにとっては、考えられないほどの
酷な環境に身を置いている。遠い昔、真っ黒になるまで表を駆け回り、虫を追いかけてはしゃいでいた事がまるで嘘のようだ。
長袖から突き出たセイの腕は生白く、血管の色が透けて見えた。
じわじわと頭の中を蝕みはじめた睡眠不足による眠気も相まって、

感じる疲労感は相当なものだった。傍らを通り過ぎていく車の撫でつける排気ガスの匂いがそれを増長させている。
今度は自販機で水でも買って、頭から被ってしまいたいと本気で考えた。服が濡れるのはどうということもないだろう。
もしかすると歩いている内に、すっかり乾ききってしまえるかもしれない。
　ふとセイは、自分がこの状況において初めて自らの生命を痛いほどに感じていることに気付いた。こんなにも苦しく、自分は今生きている。
何だか無性にそうしたくなって、セイは声に出して笑った。

　幸い次の目的地までそれほどの距離はなく、また自販機も見つからなかったので、セイは街中で水浴びをすることは無かった。
コンビニの中は冷房が効いていて、かいていた汗が少しずつ引いていった。
レジの近くに置かれた機体に、財布から抜き出した青いカードを挿入する。画面表示に従いタッチパネルを操作していくと、次々切り替わる画面の最後で
1センチ厚程度の紙の束が排出され、引き出しきれずに数百円の小銭が残った。セイはそれを封筒に入れると、カバンに仕舞い込んだ。
　コンビニではあと眠気覚ましの為のタブレットを購入した。
店を出てすぐの所で包装を破り、黒い粒を何個かまとめて口に入れる。苦みと舌を刺すような刺激が加わり、息をするたびにそれまでにはない冷気を喉の奥に感じた。
ふう、と大きく息を吐き出す。
不要なレシートを捨て、タブレットのボトルはカバンの中に放り込んだ。

　気のせいだ、とセイは呟く。道中感じていた体の不具合は、単純に体が暑さに不慣れなだけのことだ。

それとここ数日続いていた睡眠不足によるところが大きい。
眠ろうと目を閉じると、妙に鮮明になって、セイの頭の中を嫌な思い出が支配するのだ。暗くした部屋の中、薄く目を開いたままで横たわり、気が付けば朝になっている。
そんなことの繰り返しだった。体の疲労感は抜けずに溜まり続ける一方だった。倒れてしまえばいい、と思うことさえあるが、そこまで踏み切ることがどうしてもできない。
セイは頭の片隅で、ため込んだ錠剤を集めたボトルのことを思った。このまま家に辿りついたとき、もしどうしても楽になりたいのであれば頼るほかはあるまいとも思う。
あの、紙切れがセイにもたらすもの。
　紙切れが、セイの体を支配しているのだ。体というよりは、セイという人間それ自体をであった。
紙切れ一枚でセイは今暮らす部屋を手に入れ、仕事をして金を集め、人間としての生活を送り続けることができる。
その遥か以前に、セイはそれで自分の名前を手に入れた。それからはずっと、何をするにも紙に書き込まれた何かが一々顔を出すのである。
勿論それを無視する生き方も可能な筈だったが、それは紙切れに書かれた世界では認められることが出来ない行為なのである。
　紙切れは様々な呼び名で分類され、セイの生きる上でなくてはならないものだ。守られている、と言って差し支えはないだろう。
ただ、だからそれが時々堪らなくイヤになるのだった。こういった、自分が少し道を逸れているのだな、と感じる時は特に。
　コンビニを出てから、またあの熱気がセイを包み込んだ。セイは自分が今どんな顔をして歩いているかがわかる気がした。
それはおそらく生気のない、死人にも似た表情を浮かべていることだろう。
額を流れる汗とは別に、背中にイヤな汗をかいていた。じわじわと頭の中を支配している。倒れてみるべきなのは今かもしれない。

街路樹の作り出す僅かな影の下、セイは何かを見つけた。足が止まる。目の前に、一人の少年が立っていた。
近くの男子学生らしき服装をしていたのでそう言い切ったのだが、自分よりも低い位置にあるその顔を見たとき、セイは迷った。
おそらくは中学、いや高校生くらいなのだろうか。光を受けて細く、茶色に輝いて見える髪を長く肩まで垂らし、顔の左側面に赤い蝶の髪留めを付けたその顔は、
どちらかと言えば少女のように可憐で美しかった。
セイが見たものは、赤い蝶々だった。
「どうしたの？」
少年がそう問いかける。セイは自分がしばらくの間無言で見つめていたことに気付いた。
「いや、別に」
少年は手に溶けかかったアイスの棒を持っていた。熱気でまた表面が溶け出し、ぽたぽたと足元に小さなしみをいくつも拵えている。少年の手は甘い匂いを放つ液体でべたべたになっていた。
セイはまたぼんやりとそれを見ながら立ち止まったままでいる。少年は白いアイスの先を舐め、つう、と流れ落ちる滴を追って口に含んだ。そのどろどろした固まりが目の前に突き出されているのにセイは暫くたって気が付いた。
少年が溶けかかったアイスをセイに向けているのだ。
「ほんとにどうしたのさ。今にも死にそうだね」
セイはうまく働かない頭で考えたが、おそらく少年はセイにそのアイスを差し出しているのだ。すっと微笑んだ少年と目が合った。
「いらない？」
焦れたように言う。
セイは視線を白い固まりに向ける。その冷たさには覚えがあった。
「くれるの？」
「うん」
「君は、いらないのかい」

少年がくす、と笑った。
「君はおかしな人だね」
セイは少年が手に持ったままの、そのアイスを口に含んだ。ほとんどその硬さを失っていた固まりが口の端で崩れる。ぼたぼたと、少年の指に垂れ落ちている。
少し身を屈め、指を濡らした白い滴をセイは舐めた。少年がくすぐったそうな表情を浮かべた。
やがて棒だけになったものをセイは受け取った。
「ありがとう」
「いいって」
べとべとになった指をシャツの裾で拭いながら、少年は道路脇に座り込んだ。あまり人通りの激しくはない通りだ。少年はポケットから小さな箱を取り出すと、
一本の煙草に火を点けた。
ふう、と白く曇った息を吐き出す。
「アイスの事だったら、いいよ。買ったんだけど、別にいらないやって思ってたんだ。君、ほんとに顔色悪いなあ」
セイは喫煙を咎めるような目で見ていたが、少年は気にする風でもなかった。
何がいけないのか、知らないかのように自然な素振りだ。
セイはふっと笑って、少年に改めて心配の礼を告げた。ひらひらと、少年が手を振る。
喋りさえしなければ、少女のようにも見えた。その顔の端で、赤い蝶が艶やかな表面に光を受けて輝いている。
少年と別れて、セイは再び歩き始めた。先程までの疲労感は今は殆ど感じていない。少し日が傾き始めた所為もあるのだろう。
数メートル程進んでまた後方を振り返った。道路脇ではまだ少年が座り込んでいる。遠目に見ても、とても整った顔立ちをしているのがわかった。
生温いバニラアイスの味を思い出す。べたつく口内が喉の渇きを訴

え始め、セイはタブレットを口にした。
がりがり、と音を立てて砕けた味は、舌を刺すように苦かった。
最終目的地のスーパーに着いて、セイはカゴの中に目についた飲料水を適当に放り込んだ。アルコールを含んだものもいくつかあった。
それからセイはどろどろした瓶詰をカゴに入れ、会計を済ませた。スーパーを出た頃には、もう日が暮れかかっていた。

久し振りに街を歩いた体は酷く疲れ切り、この分なら今夜あたりは疲労で少しは眠ることができそうだ、と思う。
グラスに移し替えた薄く茶色の液体を、セイは口に含んだ。喉の奥が焼けるように熱い。
着ていた服を脱ぎ棄てると、ベッドに横になった。クーラーの冷気でひんやりしたシーツが肌に触れる。
灯りを消して、目を閉じた。いつものイヤな感じはしなかった。
かわりに喉の奥で微かに残る、粘ついたバニラの芳香がはっきりと甦った。
それと共に、夏の日差しに晒された、あの真紅の蝶。セイは何故だかわからなかったがふっと笑みを浮かべた。
口の端を持ち上げ、くっくっ、と声に出して笑う。しばらく横たわったまま、気付かぬうちにセイは眠っていた。
携帯の着信に気が付いたのは、それからもうずっと後のことだった。

#02：ミオ

「忘れてたわけじゃあないんでしょう？」
電話の声の主はそう言った。
「うん、いや……ごめん」
はあ、と受話器の向こうでため息が聞こえる。
「今から私がそっちに行くから、出かける用意はしておいてね。それじゃあ」
セイを目覚めさせたのは、携帯の着信音だった。履歴を見ると、昨夜から数回程掛けられた様子である。
休日ということもあってうっかりしていた。セイはまだぼうっとしたままの頭をがりがりと掻きむしった。
まだ時間の余裕がある。軽くシャワーを浴びると、さすがに目が覚めた。
それではまた別の問題が発生する。
髪を拭いたタオルを首に掛け、セイはふう、と息を吐いた。クーラーで冷やされた空気の中、冷たくなった水滴が滴り落ちる。
適当にシャツを選び出し、袖を通した。それなりにきちんと身なりを整える。
時刻はもう、１０時を過ぎていた。
セイはキッチンでグラスを手に取り、テーブルの上、薄い茶色をした液体を注ぎ込んだ。一気に飲み干すと、
まだ僅かに残っていたミントのタブレットを口に入れる。
鼻を抜ける刺激と、嫌な苦みが口の中に広がった。
外に出ると、少し強めの風が吹いていた。晴れていて、照りつける日差しは昨日と同じく目を眩ませる程に強い。
しばらくするとまた、携帯に着信があった。それは2～3回ですぐに切れた。前の道路に、赤い車体の車が停車する。

セイのマンションの入り口に車を止めると、中から一人の女性が降りてきた。彼女はセイの姿を見つけると、にっこりと微笑みかける。
「久し振り」
その女性、ミオは肩につく位に切り揃えられた髪を一つに纏めている。スーツ姿だった。
セイの近くに立つと、ミオが一瞬イヤそうな顔をした。彼女は女性にしては背が高く、ヒールを履くとセイとは殆ど差がなくなる。同じ高さの視線で、ミオがセイの顔を見つめた。
「アナタに運転を代わってもらおうと思ってたのよ。久し振りだから一緒にドライブに行きたかったの」
セイは困ったような表情を浮かべて笑った。
「乗って」
ミオがドアを開ける。セイは助手席に乗り込むと、ドアを閉めた。
車は市街地の中を走っていた。流れていく景色の中、セイは窓の外をただぼんやりと眺めている。
「どこに行きたい？この間行った所はあまり良くなかったみたい」
「どこでもいいよ、ミオが決めて」
「アナタってそればっかり」
信号待ちで停車したのをきっかけに、ミオはセイの方を見た。
「気分はどうなのかしら」
「まあ、随分いい方だよ。……こんな天気のいい日に美人とドライブが出来るなんて最高だよねえ」
ミオがふう、と息を吐き出す。
「そうじゃなくって、」
ミオはじっとセイの横顔を見つめていた。信号が青に変わり、車を再び発進させるまでの間ずっと。
「朝から随分飲んでるのね。アナタちょっとお酒臭い匂いがする。……私と一緒に居るの、間が持たない？」
「いや」
「アナタを余計イヤな気持ちにさせてるんだわ、私」

「そんなの」
セイはミオの方を向いた。ミオは少し悲しそうな表情を浮かべている。
「私の自己満足なら、それでもいいの。こうでもしなきゃ、アナタはちゃんとした食事なんかしないでしょ。ロクなもの食べてないって見ればわかるわよ」
セイは黙り込んだまま、また窓の方を向いた。ミントのタブレットは切らしてしまっている。
「ミオ、ちょっとそこのコンビニに寄ってもいいかな？」
「ええ」
ミオは頷くと、コンビニの前に車を停めた。セイはそれだけの買い物を済ませると車に戻る。
がりがり、と噛み砕いたタブレットからはまたあのイヤな刺激が広がった。本来眠気覚ましの為の商品だが、セイにはあまり効かなかった。
ミオは携帯で近辺の情報を探っている所だった。丁度、昼食を摂るような時間帯になっている。
「ミオ、ごめん。今、すごく気分が悪いんだ。吐きそう」
「どうしたの、クスリ買ってこようか？」
「いや、いい」
セイは手の平に出したタブレットを口に含んだ。
「それはクスリじゃないのよ」
セイは少し笑ってそれに答える。
「ほんとにアナタそれ好きね」
ミオは車を発進させた。行きついた先は、ドライブスルーのファーストフードだった。
ミオは茶色い紙袋をセイに押し付ける。
「私、お昼から仕事に出なくちゃいけないの。悪いんだけど、アナタを送ってから、すぐまた行かなくちゃ。時間取れなくてごめんね」
「いや、そんなの。ありがとう」

「それ、食べられそうなら食べて。好きだったでしょう？」
袋の中身は白身魚のフライが挟み込まれたハンバーガーだった。
「私、こういう時に手作りのお弁当とかって渡せないんだわ。料理、はっきり言って得意じゃないんだもの。だからダメなのよね」
「ミオは、そういう所がいいんだ。君はすごく優しいよ。僕にまで気を配ってくれるじゃない」
ミオは照れたようにはにかんで笑った。
「もう一つだけ、私のお願いを聞いてもらえる？……朝からお酒を飲むのは止めて、飲むなとまではいわないから」
「わかった」
再びセイのマンションの前に辿りつくと、車を停める。ミオは入口までついてきた。
「気になってたことがあるんだけど」
「何？」
「今日のアナタって、なんだか機嫌が良いみたい。最初酔っぱらってるんだと思ってたんだけど違う。ねえ、何かいいことでもあったの？」
「さあ、別に」
セイは思い当たることがあってふっと微笑むとミオを見た。
「ねえ、ミオはさ、運命ってあると信じてるかい？」
急にセイがそんなことを言い出したので、ミオは不思議そうな顔でセイを見つめた。
「さあ……アナタらしくもないわね、そんなことを言うなんて」
「まあね、そういう気分なんだ」
ミオは車に乗り込むと、セイに向かって手を振った。セイもそれに答える。彼女の車が遠ざかり、やがて見えなくなるまでセイはその場で佇んでいた。
紙袋からは、油の匂いがする。少しだけ本当に吐き気を催した。

ミオは月に2回ほど、強制的に、セイに食事させるためにやってくる。彼女はとても心配性なのだ。
連れまわした所で偏食が治る筈もなく、時にすっぽかすような態度をとられても、自己満足だとの名目を付けて彼の世話を焼いた。
それが全く恋愛感情を伴わないのが彼女らしかった。ミオは間違いなく美人の類に入る顔立ちをしているが、浮いた話の一つも上がらない。
仕事人間で、そういったことには疎いのだ。だからこそ後輩の年下男に対しても、それはただのお節介の域を超えなかった。
テーブルの上で紙袋が放置されている。
昔に一度だけ、セイの具合が良かったあの日。珍しくセイが食べたハンバーガーの事を未だにミオは覚えているのだ。
一体どんな事情でファーストフードを利用したかは全く思い出せないのだが。
セイはふっと笑うと、ミントのタブレットを口にした。

#03：雨

夕方になってから降り始めた雨がざあざあと音をたてている。外は随分と薄暗かった。暑さはだいぶ和らいではいるが、こんな天気の中出掛けるのは億劫だった。
だがしかし、食料品を切らしてしまっているのだから仕方がない。
セイは戸棚に目をやった。まだ幾つか残っている瓶詰は、そのいずれもがお気に召さないとのことなので、無いのと一緒だ。
セイは手元にある容器の中身を全て手の平の上に転がし、全部ひとまとめに口の中に入れた。

辿りついたスーパーでは、注意深くラベルを確認した。無難な選択肢を選び、カゴに放り込む。
帰るころになると少しだけ雨脚は弱まっていた。セイはずっしりと重いビニール袋を提げて、夜道を急いだ。
――何かいいことでもあったの？アナタ、なんだか機嫌が良いみたい。
昼間、ミオに言われた言葉を思い出す。セイには自分でわからなかったのだが、どこかそんな素振りでもしていたのだろうか。
思い当たる節ならあった。目を閉じるとそこに浮かび上がるのは、あの真っ赤なアゲハチョウだった。
自販機の横をセイが通り過ぎたとき、どすん、と何かがぶつかってきた。誰かよろけて倒れたところをセイが運悪く通りかかったのだ。
件の人物はそのままずしゃ、と濡れた地面に倒れ込んだ。
セイはびっくりして倒れた人物を注意深く見つめた。この先の路地は飲み屋が多く立ち並んでいる。羽目を外した酔っぱらいの若者だろうか？

セイは思わずああ、と声を上げた。しゃがみ込み、確認して見たその顔は、紛れもなくあの時の少年だったからだ。
そっと触れてみた。あの赤い蝶は、倒れた拍子に外れ、前方に転がっていた。セイはそれを拾い上げる。
少年は酷く酔っぱらっているらしかった。まだ未成年だというのに。セイは彼が煙草を吸うのを見たこともある。どうもそういった素行の悪い少年のようだ。
親はどうしているのだろうか。
まだ夜の8時だったが、こんな時間から酔い潰れているというのも酷い話だ。
セイは少年の傍らに座り、そっと抱き起した。さら、と髪が重力に従って流れ、セイは息を飲んだ。
露わになった顔の左側面には、引き攣れたような傷痕があった。セイは拾った髪留めを使い、髪の毛を一束まとめるとぱちん、と固定した。
「うう……、」
少年が小さく呻いた。どうやら気が付いたようだ。そろそろと目が開き、セイをぼんやりと見上げている。
「気が付いたのかい」
セイは声を掛けた。少年はそのままの体勢で呆けたように固まっている。やはりというか、随分と酒臭い匂いがした。
少年を見掛けてからまだ5分と経っていないが、傍を通りかかる者はいなかった。雨が降っているというのもあるが、この少年に連れ合いは一人もいないのだろうか。
「具合はどう？動けそうならどこか体を休められるところに移動しないか、せめて雨の当たらないところにでも」
セイがそう言うと、少年は起き上がろうとしてかセイの腕をぐっと掴んだ。あまり力が入らないようで、またそのままセイに体を預ける格好になる。
セイは荷物を脇に置くと、少年を抱き抱えた。

「う、」
体勢を変えた少年が頭を下げて、地面に向かって嘔吐を始めた。
ごほごほと苦しそうに急き込んでいる。ざあっと吐き出された紫色をした液体にセイは驚いたが
それはどうやら飲んでいた酒の色であるらしかった。上下する背中をセイはさすった。シャツ越しに触れた背中は骨の感触がはっきりと伝わる。
やがてがくん、とセイにその身を預けて、少年は再び気を失って倒れた。
セイはそうっと少年を抱いて立ち上がる。雨に濡れて、衣服が張り付いていた。セイの腕力でも易々と抱えられる程、少年の体は重さを感じなかった。

マンションに辿りつくと、セイは浴室の中で少年の体を横たえた。ボタンを外すと濡れたシャツを引きはがす。どろどろに汚れたズボンやシャツを洗濯機の中に投げ込んで、
自分も汚れた衣服を脱ぎ捨てた。
シャワーを使ってそっと汚れを洗い流す。セイは頭を抱え込んで、温いお湯を少年に当てた。
その目を閉じたままの顔を見ていると、少女のように見えて戸惑う。体は華奢な作りながら彼の性別が男性であるということを示していた。
日に焼けることもないまま、真っ白な肌をしている。
バスタブに湯を溜めてみたが、少年が目を覚まさないままだったのでシャワーのみで体を洗い終えた。セイは濡れた体をタオルで包み込む。
どうにかパジャマに着替えさせるとベッドに寝かせた。
少年は身一つで、何も身元の確認が取れるようなものを持っていなかった。ポケットの中に入っていた財布には、現金が少し。

さてどうしたものか、とセイは息を吐いた。
「ん……」
2、3度瞬きをして、少年が目を開いた。一瞬セイを見たが、すぐまた再び目が閉じられる。すうすう、と寝息が聞こえてきた。
セイは外し持っていた髪留めを持ち出した。赤い蝶がセイの手の中にある。セイはふっと笑った。
眠っている少年の傍らで、髪をそっと留めた。少年の髪に蝶が留められている。セイはその薄い体をそっと抱いた。どくどく、と心音が聞こえる。
「捕まえた、」
セイは声に出してそう、呟いた。
意識を外の世界に向ければ、またざあざあと酷い雨音が聞こえてくる。

少年が完全に目を覚ましたのはそれから何時間も後の事だった。
「……ここは、」
そう声に出した少年は、自分がベッドに寝かされていること、そして衣服を着替えさせられているということに戸惑った様子をしている。
セイは上半身を起こした少年ににっこりと笑いかけた。
「ああ、おはよう。よく眠れたかい」
「……」
少年は固まったまま、近づいてくる男を警戒した様子で見つめた。
セイが手にしていた紙袋を少年に手渡す。
「替えの下着。まだお店開いてなくてさ、コンビニで買ってきたんだ」
中身は男性用の下着が数点、特に選択の余地はなかったとみられる配色をしている。少年は自分の下半身に手をやった。パジャマの下には何もつけていないことに気付く。

そのタイミングでセイはごめんね、と呟いた。
「新しい下着の用意が無かったからさ。君が嫌だろうと思って」
少年は徐々にハッキリしてきた意識と共に、どうやら昨夜、酔い潰れていた自分が目の前の男によって助けられたのだと気が付いた。酷く雨が降っていた。着ていた衣服はおそらくずぶ濡れになっていただろう。
「あの……、ありがとう」
少年が呟く。
「気にしないで」
「でも、……あ、あの、貴方は一体、誰？ここは、」
「だから気にしなくてもいいって」
セイは少年を見、さっきまでとは違う種類の笑みを浮かべた。
「だって君は今日からここで暮らすんだから」

「え……？」
「仲よくしようね、」
黒い縁の眼鏡を中指で押し上げると、セイは笑った。

#04：アゲハ

その部屋の中が妙に薄暗いのは、きっちりと締め切られたカーテンの所為なのか、それとも今の時間によるものなのか、よくわからない。
思い瞼を持ち上げる。しん、と静まり返った部屋の中ではエアコンの作動音だけが響いていた。
セイに介抱され、この部屋に連れ込まれてきた少年、アゲハはゆっくりと腕を持ち上げ、暗がりでそっと手の平を翳した。
何度となく握ったり、開いてみたりを繰り返す。それ自体、特に意味のない動きをしてみた。
それは確かに、自分の意識だった。
アゲハは左のこめかみの辺りで留めてある、赤い蝶の髪留めを外すと、その艶のある表面を見つめていた。
それは指先に蝶が留まっているかのようだった。さら、と髪の束が冷え切ったシーツの上に流れる。

少年にアゲハという名前を与えたのは彼の母親だった。父親はおらず、その母親もアゲハが物心つく前にすでにこの世を去っていた。祖母と二人きり、少年は寂しさすら知らずに育った。同じ年頃の子どもたちが母親に連れられて帰るのを、何時も一人、ぽつんと不思議そうな目で見送っていた。
ある日のこと。迎えに来てくれた祖母の手を、アゲハはぎゅう、と掴んで言った。
「ねえ、ぼくにはみんなみたいにおかあさんがいないの、なんで？」
「アゲハにもお母さんはちゃんといるよ」
「うそだ、だってうちにはばあちゃんしかいないじゃないか」

「お空をみてごらん、アゲハ。お母さんはね、このお空の上にいるんだよ」
祖母はそういって青く澄んだ空を指差した。
「なんで？」
アゲハはどうして自分の母親だけが、そんな訳の分からない遠くにいるのかと、祖母に尋ねた。
子どもに上手く言い聞かせる術を持たない祖母は、ただ、そうだねえ、と言葉を濁らせるばかりだった。
その翌日。アゲハの通う園で、月に一度の誕生会が開かれた。同じ月に生まれた子どもたちが集められ、皆それぞれに自分の親にあてた手紙を書くことになっていた。
お父さんやお母さんへ、ありがとう。そういった内容の手紙を、アゲハも隣の子どもに倣って水色のクレヨンで書きこんだ。
連絡をうけた祖母が慌てて駆け付けたときにはもう、アゲハは病院のベッドの上で静かに横たえられていた。あの後一人居なくなったアゲハを保育士が見つけた時、
アゲハは地面にうつ伏せになって倒れていた。頭から血を流して、ぴくりともしなかった。
その傍らに、手紙が落ちていたらしい。
何人か、子どもが屋根から落ちるのを目撃した人間もいた。
やがて無事、意識を取り戻したアゲハは祖母に言った。空を飛ぼうと思ったのだ、と。
アゲハの命に別状はなかったものの、顔の左側面に出来た傷口を何針か縫う羽目になり、そこには引き攣れたような痕が残った。
それを上手く隠せるように、アゲハは長く伸ばした髪を留めるようにしていた。赤い羽根を広げた蝶を模した髪留めは、祖母がアゲハに与えたもので、
母親の形見の品でもあった。

暗闇に慣れた目で赤い蝶を見つめていると、急にぱちん、と音がして部屋に灯りが点けられた。アゲハは眩しさに顔をしかめる。アゲハの眠る傍に近寄ると、セイはふっと微笑みを浮かべた。
「なんだ、起きてたんだね」
アゲハは瞼を擦り、セイを見上げる。
少し青みがかった色の黒髪で、まるで作り物みたいに完全に整った青白い顔は、どこか冷たいような印象を与えた。黒いセルフレームの眼鏡を掛けており、それがさらに強調している。
腕を伸ばし、指先に赤い蝶を留まらせたアゲハの手をセイはそっと掴んだ。
セイが髪留めを指から外す。そこは白く跡が残っていた。アゲハが腕をベッドの上に放り出す。
その傍らにしゃがみ込むとセイは手を伸ばし、アゲハの顔をこちらへと向けさせた。顔に掛った髪を掻きわける。そこには例の傷痕があった。
「きれいだ」
セイが呟く。さら、と流れた髪の下、傷痕の晒された顔を両手を使って固定して、うっとりしたような両目で見つめながら。
対するアゲハはぶすっとした表情を浮かべたまま押し黙って、されるがままになっていた。
しばらくそのまま、アゲハが心の中、もういい加減にやめてくれないものかと思い始めた頃になってようやくセイはその手を放して解放した。
アゲハの髪を手で梳いて、束ねると赤い蝶をそこに留まらせた。
「ただいま、アゲハ」
アゲハは横たわったままでセイを見上げている。
「やだなあ、ちゃんとおかえり、って言ってよ」
「誰が」
「君がだよ。他に誰が居るの」
アゲハはそれでも体勢を変えることもせず、頭をがり、と掻きむ

しった。
「足、」
セイがアゲハのシャツの裾から覗かせている素足を見て言う。
「風邪引くよ」
足元でくしゃくしゃになっていたパジャマのズボンをセイは拾い上げた。
室内はエアコンの冷気で夏だというのが信じられない程冷え切っている。アゲハはそれを受け取ると、冷たくなった足に通した。
セイは着ていたシャツのボタンを一つ外して、ネクタイを緩めた。シャツの上には濃紺のベストを着込んでいて、下は黒いスーツのズボンを履いている。
仕事帰りのような格好だ。だとすれば今は一体何時なんだろうか。
アゲハはそんな割とどうでもいいようなことが気になった。この部屋には、今の時間を知るための術がどこにも見当たらないのだ。
「今、何時？」
アゲハの問いかけにセイはくす、と笑みを返す。
「ねえ、なんで君はそんなことが知りたいんだい？」
「だって、」
「そんなの何時だって構わないじゃないか。もし今が朝の7時だよって僕が言ったら、君は別に食べたくもない朝ごはんの支度をするのかい？」
セイは笑っていた。少し嫌味な類の笑い方だった。
「別にいい」
アゲハはベッドから降りて、セイの目の前に立った。
「あれちょうだい」
セイがそのにやけた顔に困ったような色を混ぜて、ポケットから取り出した紙の箱をアゲハに差し出す。透明のフィルムを剥ぎ取ると、
中には銀色の紙に包まれた紙巻き煙草が行儀よさそうに詰め込まれていた。

アゲハが煙を深く吸い込み、ふう、と吐き出す。白い煙が室内を彷徨うように流れた。
「煙草なんて吸ってるから元気が出ないんだよ」
セイが咎めるように言う。アゲハはまだ未成年ということもあり、煙草を欲しがるのにあまりいい顔はしなかった。
それでもその横顔が、先程までより随分と機嫌が良くなったように見えたので、それ以上のことは何も言わなかった。
セイはテーブルの上に置かれたタブレットのボトルを手に取った。キッチンに立つとカップにインスタントのコーヒーを入れ、ポットの湯を注いだ。
同じものをアゲハにも勧めたが、いらないと拒否された。
ミントの後味とはまるで合わない熱いコーヒーを一口、セイは飲み込んだ。
しばらくソファに体を凭せ掛け、機嫌よさそうに煙草を吸っていたアゲハは、吸殻を灰皿に押し付けた。
そして立ち上がると、元来た道をよたよたした足取りで辿り、ぼす、とベッドに倒れ込んだ。
アゲハはうつ伏せて目を見開いたまま、じっとしている。
セイの眼鏡の奥の目が、まるで愛しいものを見るかのように細められていた。口の端を僅かに歪ませた笑みを浮かべている。
再びアゲハに近づくと、そうっと伸ばされた手がアゲハの髪に触れた。
「ねえ」
アゲハが顔を上げ、セイの方を向いた。それはセイに呼びかける為に発せられた言葉だった。
「ねえったら」
セイが全く反応せずに髪を弄りまわしているので、アゲハは半身を起して、セイを睨んだ。
「君のことを呼んでるんだよ。耳詰まってんの」
「ああ、ゴメン」

「……いいや、もう。面倒くさい」
「僕の事だったら、何て呼んだって構わないよ。君と僕にだけ判れば十分だろう」
「君の名前は？」
「セイ」
「じゃあ、セイ」
アゲハははあ、とため息を吐いた。
目の前の、見た目だけはとても美しい青年を見つめる。何日か前に偶然、街で出会った。
アゲハが今居るのはこの青年の部屋であるらしい。それがどういういきさつだったのかは全く思い出せない。
酷く酔っぱらっていて、記憶が抜けているのだ。
「セイは、一体誰？」
その言葉はセイにとって意外な一言だったらしく、彼は目を丸くしてアゲハを見つめた。くす、と堪えきれずに笑い出す。
「君は、おかしなことを訊くんだね」
セイがむくれた顔に変化したアゲハの頭を撫でた。
「さっき言っただろう、僕の名前はセイっていうんだ」
「そんなのは、僕は人間ですって言ってるのと同じだよ」
セイはふうん、と声を上げた。
「僕の名前以上の情報が、今の君には必要なのかい？」
「どこの誰とも知らないような人間の部屋になんて居られるわけがないだろ！」
アゲハは髪を掻き上げて、それからがりがりと掻き毟った。
今までも何回か、外で記憶をなくすことはあったのだが、こんなことは初めてだった。
介抱してくれた事に対しては申し訳なく思うし、感謝の気持ちもある。しかし何故、アゲハを何時までもこの場に留まらせておこうとするのだろう。
アゲハは視線を足元に向けた。ベッドの支柱に繋がれた細い鎖の行

きつく先は、アゲハの首に嵌められている首輪だった。
「珍しい蝶々を見つけたから」
そう言うと、セイは立ち上がる。再びキッチンへ行き、取り出したグラスになみなみと薄茶色い液体を注ぎ込んだ。
テーブルの上の酒は、かなりキツそうなものに見える。からん、と氷の立てる涼しげな音が響いた。
じっとアゲハの見ている限り、セイはかなりの量の酒を飲んだ様子だった。その顔には全く現れず、まるで素面の状態と変わらないが。
「アゲハ、」
セイはおいで、と呼ぶような仕草をした。アゲハはぼうっとしたままそれを見ている。焦れたように何度もセイは繰り返した。
意識の方は、もうだいぶ酔いが廻っているらしい。
「こっちにおいで、アゲハ」
根負けしたアゲハが一歩ずつ、のろのろした足取りで歩き始めた。首から下げた細く、長い鎖は部屋の中を自由に動き回れる程度の長さがある。
玄関のドアにまでは近づけそうに無かったが、風呂やトイレには困らなかった。
ようやくセイの元に辿りつくと、アゲハはぎゅうと抱きすくめられた。セイからは、何か妙に甘ったるい匂いがする。
「セイ、」
アゲハの声に、セイは体を少し離した。
「セイは、どうして僕のことを捕まえてたいのさ。僕は君のこと全然知らないのに。君だってそうじゃないのか？」
「ねえ、アゲハ。運命ってさ、信じてる？」
「……よくわかんないよ」
「昔のことを思い出すんだ。蝉とか蝶々とか、よく追いかけまわしてたなあって。それは今でもやっぱりそう、楽しいことなんだよ。多分。僕はまだどこか大人になりきれてないのかもしれない」

「つまりそう、君は誰彼構わず目についた人間なら誘拐して、部屋に連れ込む変質者ってこと？」
「酷い言い草だ」
「真実じゃないか」
「君は蝶々だろう？」
　セイはアゲハの髪に留まった赤い蝶を見ている。
セイがアゲハの名前を知っているのが以外だった。ただ、アゲハ自身がそう答えたのかもわからなかったし、調べることは案外簡単な事かもしれない。
何をしている青年なのかは知らないが、セイの持つ雰囲気にはそう思わせるものがあった。
「アイスのお礼がまだだったよね」
　セイがぽつ、と呟く。
「どろどろのアイスなんか食べさせたから怒ってんの？」
「ううん。僕、甘いものが好きなんだ。久し振りに食べたんだけど、おいしかった。ありがとうね」
「……よくわかんないよ君って、やっぱり」
　アゲハは妙に機嫌よさそうに笑っているセイを呆れたような目で見つめていた。相手は酔っ払いで、質問の答えにはまるでなっていない。
知りたいことがなんだったのかさえわからなくなりそうだった。

#05：何事もなかったかのように

アゲハが目を覚ますと、灯りが消されていたため辺りは真っ暗だった。遮光カーテンが掛けられ、日の光が届くことのない室内は一日を通して何時でも薄暗いままだ。
セイに閉じ込めてから何日が過ぎたのかはアゲハにはわからなかった。ここには時計はもとより
テレビやラジオの類も置かれていなかったのだ。
　アゲハが暗闇の中上半身を起こすと、首から下げた鎖がじゃら、と音を立てた。その先端はベッドの支柱に繋がれている。間取りがどうなっているのかは知らないが、
アゲハの居る寝室の他にもまだ幾つかの部屋があるようだった。ベッドの上から伺えるダイニングキッチンと、風呂には自由に行き来が出来るのだが
それほど興味も関心も湧かなかったので、アゲハは無駄に家の中をうろつくことはしなかった。
　セイは出掛けているようだ。アゲハは部屋の隅にある蛍光灯のスイッチを入れた。暗いままでは息が詰まりそうだった。
カーテンの隙間から少しだけ外を伺ってみた。まだ暗い外は、これから朝になるのか、それとも夜になるのかはわからない。
「ただいま」
　玄関のドアが開く音がした。セイが帰ってきたようだ。アゲハはベッドサイドに置かれている煙草を、火を点けずに咥えたままでぼんやりとセイを見上げた。
セイは部屋を留守にしていることが多い。アゲハは自分より一回りは年上であろうと思われる男の顔を見ていた。
普通に考えて、仕事に行っているのだろう。何をしているのかは知らないが、間違っても肉体労働には従事していないだろう。

「……おかえり」
アゲハが気まぐれにそう言ってやると、セイは嬉しそうな顔をした。傍らに立ち、いい子いい子とでも言うようにアゲハの頭を撫でた。
セイは買い物に行っていたようだ。スーパーのビニール袋を手に提げている。
「いい子にしてたかい」
セイはそう言った。
「ねえ、この家ってなんもないの、ヒマで死にそうなんだけど」
「ああ」
セイはそれには答えずに、戸棚に食料品を整理し始めた。
「君の家ってテレビが置いてないんだね」
「まあ、昔は置いてたんだけど、映らなくなっちゃってさ。あんまり見てなかったし、邪魔だと思って」
「どうして、困ったりしないの？」
「まあ情弱だってことは認めるよ。でも知りたいことは大抵、検索すればわかるし。不必要な事まで一緒くたに垂れ流すテレビは僕は好きじゃない」
「君ってやっぱり変わってんね」
セイはふっと笑うと、またアゲハの居る部屋に戻ってきた。ベッドの上、隣に座る。セイはアゲハの髪留めを外して、さらさらした髪を梳くようにして撫でた。
セイはアゲハの髪に触れるのが何より好きで、アゲハはそれが気分悪くて仕方がなかった。
アゲハ自身人に見られたくない傷を隠していることもあり、とにかく髪に触られるのは苦手なのだ。古傷を見て、他人がアゲハを見る目つきを変えるのが気に障った。
別にどうでもよかったが、一々説明を求められるのが面倒くさい。触れないでほしい、そう思うだけだった。
セイは気が済むと、アゲハの髪をまとめる。そこに赤い蝶を留ま

らせるのも好きな様子である。
「テレビ点けたらさ、僕が誘拐されましたってニュースで言ってるかな？」
「見たい？」
「別にどうでもいい」
それはアゲハの本心だった。
「君も大概変わり者だね。怖くはないの？これまでずうっとテレビでそんな事件のニュースやなんか、見てきたんだろう？」
「……君が言うっての？それ」
「まあねえ」
セイは苦笑する。アゲハはセイが言うように、自分が監禁されて、ここに鎖で繋がれているという現実に対しての感覚が麻痺しているようだった。
セイはどういったわけかそれ以上の危害を加えることはなく、食事を与えないというわけでもない。性的な行為が目的というわけでもなさそうだった。
アゲハの顔を両手で固定して、見つめる位のことしかしない。それでも十分に嫌だったが、それくらいだった。
だからこそアゲハには訳がわからなくなるのだ。
「セイはさ、一体どうして僕をここに連れてきたんだ」
「君はまるで同じことを言う」
「お金が欲しいの？身代金とかさ、家は貧乏なんだけど。それとも何か、他に理由でもある？」
「お金はいいや」
セイはそう言うと、アゲハに伸し掛かり、ベッドの上に押さえつけた。アゲハの耳にくぐもった声が聞こえる。
「僕は君が欲しかったから」
「……ああ、そう」
アゲハは感情を込めない、冷たい答えを返した。
「君は逃げようとはしないんだね。カーテンを開ければ外は見える

よ。窓だって開くし」
　締め切られたカーテンはそれ自体どこにでもある普通のものだ。開け閉めは自由だが、何故か閉めたままになっている。
「面倒くさいんだ。僕は学校に行くのも、家で手伝いをするのも面倒くさい。今だったら全部君の所為に出来るだろ？僕は可哀想な子どもなんだ。
誘拐されて、部屋に閉じ込められて外に出してもらえないから、学校にだって行けないんだよ。そうだろ？」
　セイは声に出して笑った。
「面白いなあ、君は」
「それより重いからどいて」
　セイは薄いパジャマの布越しにアゲハをぎゅう、と抱きしめた。一日中つけっぱなしのエアコンで冷えた部屋の中、アゲハの体温をはっきりと感じた。
「僕はね、自分の目で見られる以上のことを知るのが好きじゃない。僕にとってはアメリカも月と同じで、行ったこともなければ行けるとも思ってない。
僕は、想像もつかないような遠い所で起きた事件やなんかでも、全て無関係だなんて言わせないつもりのあの冷たいテレビが大嫌いなんだ」
「セイ、」
　セイの体の下敷きになっていたアゲハが背中に回した腕をぎゅう、と締め付けかえした。
「何？」
「おなかすいた」
「ああ、ゴメン」
　そこでようやくセイはアゲハを解放した。アゲハがはあ、と大きく息を吐く。
セイはキッチンに戻ると、テーブルの上のビニール袋を提げてきた。中にはスーパーで買ってきたお握りや飲み物、ミントのタブレット

なんかが無造作に突っ込まれていた。
アゲハはその中の一つを選んで、包装のセロファンを剥がした。セイは割った板チョコの一片を口に入れると、ポットの湯でインスタントコーヒーを入れている。
コーヒーの匂いが、部屋の中に漂った。
アゲハはツナマヨネーズの入ったお握りを食べながら、そんなセイの様子をじっと伺っている。
「セイはお握りいらないの？」
ビニール袋の中にはまだ幾つかの、違う種類のお握りが入っていた。
「君が食べたい味がなんなのかわからなかったから適当に買ってきたんだ。僕は海苔の味が苦手だから」
「ふうん」
アゲハはペットボトルのお茶を一口飲んだ。全部食べられるはずもなく、残ったお握りの入ったビニール袋をセイに返した。
代わりに勧められた暖かいコーヒーを受け取ると、アゲハはベッドの端に座った。冷たい部屋で、コーヒーの暖かさが少し心地良い。
「セイは何が好きなの？」
アゲハはなんとなしに訊いてみた。
「僕は食べ物の好き嫌いが多くてさ、あんまり食事自体が好きじゃないんだ」
「何か食べなきゃ体壊すよ」
「ありがとう。でも大丈夫だよ」
セイはアゲハに微笑みかけた。
「良くないよ。セイお酒ばっか飲んでる」
「僕の体の心配をしてくれるのは君で2人目だなあ」
「死んじゃうよ」
「……うん、」
そこでセイはくすくす笑い出した。
「何だよ」

「いや、僕はさ、不思議に思ったんだ。なんで君は僕の心配なんかしてくれるのかなあって」
笑い続けるセイに、アゲハは顔を真っ赤にした。近くに置いてあったクッションを掴んで投げつける。それはセイにぼす、と命中した。
「なんだよ、人が心配してやってるのに！」
アゲハはベッドの上、頭からシーツを被って蹲った。クッションを抱えたセイが近づく。
「ゴメン」
アゲハは反応しない。セイはシーツの上からアゲハをそっと撫でた。
「本当に嬉しかったんだよ」
そう呟くと、セイは出て行った。セイの足音がしなくなってから、アゲハがシーツから顔を出す。クッションに顔を埋めて、アゲハは唸り声を上げた。
頭を振ると、首から垂れ下がった鎖がじゃらじゃらと文句を言うので、ようやく我に返った。
一体、あの変質者に、どうして自分は心配なんかしているのかと。

#06：玩具

「アゲハ」
セイの声が聞こえて、アゲハはベッドの上で寝そべっていた半身を起こした。
パジャマのズボンが膝下辺り迄ずり下がっているのを引っ張り上げる。セイは両手に大きな紙の包みを抱えていた。
その内の一つをソファに置いて、もう一つをアゲハに手渡した。
「何これ」
「プレゼントだよ」
アゲハはその言葉に眉を寄せる。セイがそういう時には大抵ロクな事が起きないからだ。アゲハの首元から垂れ下がっている冷たい鎖がじゃら、と鳴った。
渡された包みは大きさの割には重くない。一体何だろうと中を開けると、そこには真っ白な毛並みをしたクマのぬいぐるみが入っていた。
「何これ？」
アゲハがもう一度同じ言葉をセイに言った。アゲハがぬいぐるみを抱えているのを見ると、セイは慌てた様子でソファに置いた方の包みを取り上げる。
「ゴメン、間違えた」
セイはそう言いながらアゲハから受け取ったクマをソファに座らせる。代わりに渡された包みの中には青い服が入っていた。
拡げてみると、前開きで裾の長さが膝下程まであり、およそ腰の辺りまで脇にスリットが入れられていた。
「アゲハが着てるのは僕のパジャマで、君の服が無かったから」
アゲハがその服のセンスは如何なものか、といった視線をセイにくれてやる。

セイは気にも留めない風だ。サイズはアゲハの元々着ていた服から推測したのだろう。
「着替えてみてよ、きっとよく似合うよ」
セイは心底嬉しそうな顔をする。アゲハは仕方なしに着ていたパジャマを脱ぎ捨てた。
セイはやせ形の体型だが、身長のある分彼の服はアゲハには大きかった。パジャマなので気にはならなかったのだが。
「服を着替えても意味ないじゃん。それとも外に連れてってくれたりするわけ？」
「うん、もっと仲良くなったら考えなくはない」
アゲハは長い袖に腕を通した。少しだけ大きいような気もしたが、それほど気にはならないデザインだ。
「可愛い」
アゲハはため息を吐く。
「あのさあ、男がそう言われて喜ぶとでも思ってんの？」
セイはアゲハの髪を指で梳いて持ち上げた。そっと離すと肩くらいまで伸ばした髪がさら、と元の位置に収まる。
「アゲハはやっぱり、赤い方が似合うのかもしれない」
セイはアゲハの言っている事は全く聞いていないようだった。アゲハはイヤそうな顔をセイに向けているのだが一向に効果は見られない。
髪留めを外すと、ブラシで丁寧にアゲハの髪を解き解した。セイはアゲハの髪を弄るのが好きで堪らないのだ。
「そんなに髪に触りたいのなら、美容師になればいいじゃないか」
「やだなあ。僕が君以外にこんな風にしたいなんて思う？」
アゲハの古傷が露わになる。そこをセイが指先でそっと触れた。
「それ、あんまり見られたくないんだけど」
「ゴメン、気に障った？」
「別に。一々説明すんのが面倒くさいだけだよ」
アゲハはセイから髪留めを返してもらうと、慣れた手つきでぱち

ん、と元の位置に留めた。セイが黙り込んだままでアゲハをじっと見つめている。
「……空、飛べると思ったんだ。でも出来なくて地面に落ちた。バカみたいだろ？」
「バカじゃないよ」
セイは真面目な顔で答えた。
「どうしてアゲハは、空を飛ぼうと思ったんだい？」
アゲハがふっと自嘲した笑みを浮かべている。
「幼稚園の時にさ、皆で親宛の手紙を書いたんだ。僕はその頃にはもうお父さんもお母さんも死んで居なかったから、ばあちゃんと2人で暮らしてた。
ばあちゃんは、僕のお母さんはお空の上に居るんだよ、って言ってた。だから手紙を持って、お母さんに会いに行こうと思ったんだ。
……我ながらバカみたいだと思うけど。」
アゲハは手持無沙汰に赤い蝶の髪留めを弄りながら話した。
「僕はさ、顔も全然覚えてないんだけどお母さんの若い頃にそっくりなんだって。段々そっくりになっていくから、この傷が見えるとばあちゃんが悲しそうな顔をするんだ。
ばあちゃんの所為じゃないのにな。だからかなあ。ばあちゃんは僕が学校に行かなかったり、家で煙草を吸ってても何も言わないんだ。僕のやることに逆らったりしないからやりたい放題だよ。サイテーだろ？」
アゲハはセイから顔を背けている。それはちょうど赤い蝶がセイの正面にくるような形だった。
セイがアゲハの髪をそっと撫でる。
「アゲハはいい子だね」
「……人の話ちゃんと聞いてる？」
「他人の気持ちを考えるってのは、ほんとは案外難しいものなんだよ」
アゲハは煙草に手を伸ばしかけて止めた。セイは笑って、そんな

アゲハをぎゅう、と抱きしめた。
アゲハの視界に、ソファに座らされた白いクマのぬいぐるみがある。どういうわけか左耳に大きな赤いリボンを結び、ピンクのワンピースを着せられたそのクマの姿が今の自分と重なった。
自分はセイの玩具なのだ。少なくとも今は。
「あのクマ、一体何？」
「ああ」
セイはそれには答えようとしなかった。
「自分が何かをしたいと思うとき、一々こうこうだとか仕方がないからとか言い訳して正当化するっていうのが僕は嫌いなんだ。お腹がすいたから食べる、君の事が好きだから一緒に居たいだけなんだろう。
それだけじゃあダメなのかい？そういう純粋な欲求は好きだよ。人間なら誰だって持ってる本能だもの」
「何か理解したくない一文が入ってたんですけど」
「一番厄介なのは権利に取って代わった欲求だよ。紙切れで支配されてる世界じゃあよくあることでさ、あんまり美しくない。たとえばお金を払ったから、その分君を自由にしてもいいんだって考え方で僕は君に触れたくないなあ。お金じゃあ愛情は買えないって、すごくよくわかるよ。正確に言えば買いたくないだけど。」
アゲハは何だか自分の聞きたかったことがはぐらかされたように思った。セイはだいたい自分の言いたくなった事を話して、人の話をちゃんと聞かない所がある。

#07：生命の色

セイが「食べたいものはあるかい？」と言ったので、アゲハはうーんと唸るような声を上げた。見るとセイは何時ものように、すでに出掛ける体勢になっていた。
もしここでアゲハが何も答えなければ、何時ものように買ってきたお握りやなんやで済まされることだろう。お握りだとしたらそれは、ツナマヨネーズ味だ。
孫の好物をバカの一つ覚えに買い与える老人のように、セイは毎回同じものを買ってくる。アゲハ自身は、いい加減に飽きてしまっていた。
夏の暑さをこの部屋の中では感じることがなかったが、つけっぱなしのエアコンの所為で体が怠い。食欲もあまり湧かなかった。
「セイ、僕はカレーが食べたい」
「うん、わかった」
「セイが作ったの。ねえいいだろ、家で作ったカレーが食べたいんだ」
アゲハのリクエストにセイは困った顔になった。
「で、どうして僕が作ったのがいいのさ」
「だって、僕は料理なんか出来ないし。カレー位適当にやったってセイにでも作れるんじゃないの？」
「君の言ってることは矛盾しているじゃないか」
反論されて、アゲハはむっとむくれた表情に変わった。しばらく経って、わかった、と再び呟くと、セイは出掛けて行った。

買い物から帰宅したセイはいやに大荷物だった。ビニール袋の他に小型のダンボール箱も抱え込んでいる。
テーブルの上に並べると、重そうな音がした。

「……どうしたの、えらい大荷物じゃない」
「うん、僕も料理って出来ないししたことないからさ。家には鍋も包丁もなかったんだよね」
　セイが真新しい鍋を箱の中から取り出した。アゲハはまさかそんな事情があるとは知らず、驚いた顔でセイを見つめた。
「なんか、ゴメン。知らなかったんだ。そーいうのってどこの家にもあるもんだと思ってた」
「ううん、いい機会だと思う。今度から僕も自炊に挑戦してみようかなあ」
　ビニール袋の中には人参や玉ねぎなど、一通りカレーの材料が揃っていた。よくよく観察するとキッチンには炊飯器も見当たらなかった。
その為か、袋の底からはパック詰めのご飯も出てきた。
「ねえ、セイはさ、ほんっとに普段どんな食事をしてたんだ？」
　アゲハは呆れた声で言う。アゲハが見ていた限りでは、セイが口にしていたのはミントのタブレットが主で後は酒ぐらいだった。
「君が見てた限りで間違いないよ」
「つまりはそう。お菓子と酒で出来てるんだな君は」
「よくそのことで怒られるんだけど」
「僕は怒ってないよ。むしろ呆れてる」
「呆れられてるってのもあるかもしれない」
　アゲハはパックに詰められた肉の塊を何とはなしに見ていた。
セイは、今度からは料理をしてみることにしよう、と言った。そしてその為に必要な道具も最小限ながら集まったのだから、少しはまともな食生活になるかもしれない。
テーブルの上には一緒に買ってきたと見られる梱包された大皿もあった。元々の食器棚にはグラスの類しかなかった。
取りあえず生のものをしまっておこうとアゲハは冷蔵庫を開けた。中はすかすかで、ジュースの缶が行儀悪そうに転がっている。絵に描いたような独身男性のどうしようもなさを醸し出していた。

――私、この人とはやっていけない。アゲハは改めてそう思った。
首から下げた鎖の関係で、流しまでは行けないアゲハは作業中のセイをテーブルの辺りから伺っていた。
料理はしたことがない、と言っていたが、見ている限り包丁さばきに問題はなさそうだった。手先が器用なのだろう。
セイ自身もどこか楽しそうに見える。その内に鼻歌でも歌いだしそうだ。
「楽しそうだね」
アゲハが声を掛けた。
「ねえアゲハ。どうして野菜は切っても血が出ないのかな」
急にセイが訳の分からないことを言い出したのでアゲハは目を丸くした。
「命を扱ってるって気がしないんだ。だから僕は野菜が苦手なのかも。皮を剥いたら血がだらだら出てきたらわかり易いだろう、これは命を頂いてるんだってさ」
「僕、君のことが正直一番よくわからないよ」
切った野菜の形がいびつでも、炒めた際に肉が多少焦げついてしまっていても、煮込んでしまえばそれなりに普通のカレーが出来あがった。
キッチンでは食欲を刺激する匂いが漂っている。アゲハは温めなおしたご飯を皿の上によそった。皿は一枚きりでどう考えてもアゲハの分しかないのが気になる。
セイはカレーを盛った皿をアゲハの前に置いた。
「……おいしくないかもしれないけど」
「ありがとう。大丈夫だよ、カレーを失敗する人なんていないからさ」
セイはふっと笑った。カレーは市販の固形のものを使用しているので、アゲハの祖母が作ってくれるものと全く変わりないように思えた。
祖母のカレーには夏場はアゲハの苦手なトマトが入っていることが

多いので、シンプルな分セイのカレーの方が美味しいように感じる。
「おいしいよ、セイは食べないの？」
「僕は玉ねぎとじゃが芋と肉が食べられないんだ」
しれっとした顔でセイが言う。
「アレルギーでも持ってんの？」
「食べたくないんだ」
「面倒くさい人だな」
アゲハはスプーンで人参を掬うと、セイに突き出した。
「人参は言ってなかったよな」
スプーンの上には切り損ねの、親指大の大きな人参が乗っている。
「赤は、命を感じる色だから」
アゲハの言いたいことを察して、セイはその人参を口に入れた。
「もっと食べなよ」
「アゲハが食べさせてくれるんなら」
セイは笑って言う。
「玉ねぎもじゃが芋も肉も食べるっていうなら食べさせてあげてもいいよ」
アゲハは今度はスプーンで、肉の塊を掬ってセイに向けた。セイはややこしい顔をしていたが、それを口に入れた。
しばらく口の中で咀嚼しているようだったが、なかなか飲み下すまでには至らない様子だ。セイは立ち上がり、グラスに注ぎこんだ酒で肉を流し込んだ。
アゲハはセイを苛めすぎたかと少し後悔した。しかし、セイはアゲハに向かってありがとう、と呟いた。
それからもう一度、グラスに注ぎこんだ酒を飲み干した。
結局セイが口にしたのはそれだけだった。アゲハはカレーの残りを口に運んだ。少しだけ、悲しい味がする。

#08：片隅

する事が何もなく、というよりは出来ない状態で、ただセイのベッドの上でアゲハは寝転がっていた。不意に、犬になったらこんな感じなのだろうかとの思いが過ぎる。
今のアゲハは彼らと全く同じ境遇だった。ご主人様たるセイが帰ってきたとしても尻尾を振ってお出迎えなぞするつもりはないが。
退屈のあまりアゲハは読書がしたくなった。今なら難しい専門書を与えられても頑張ってみる気になれそうだ。
しかしそんなものは部屋中どこを探してみても見つからなかった。単純に本棚のある場所にアゲハが行けないだけなのか、セイがまたなにやらくどくどしい理由を持って本というものが嫌いなのかはわからない。
そうこうしているうちに、部屋の片隅で一冊のハードカバーを見つけた。濃い緑色の表紙に金色の箔押しの文字が書き込まれている。中を開いた。英語だ。アゲハには読める気がしなかった。ぱらぱらとページをただ捲っていると、中に一枚の紙切れが挟み込まれているのを見つけた。
「何だ？」
よく見ると、それは写真だった。古いものなのだろう、少し変色しかかっている。印字された日付が今より１０年程昔であると示していた。
裏返して見た。そこには気の強そうな顔をした、まだ幼い容貌の少女が笑っている。
何となく見てはいけないものを見てしまった気がして、アゲハは本を元通りの場所に戻した。
セイがいつ出掛けたのかは知らない。そもそもセイがどこで何をしているのかもアゲハは知らなかった。
帰ってくる時間も不規則だった。

「あーあ」
無意味に声に出して、アゲハはベッドに倒れ込んだ。冷たいシーツが体に纏わりついている。
ぼんやりとそうしている内にアゲハは再び眠ってしまっていた。
「アゲハ、」
セイの声が聞こえる。アゲハは目を開くと、そこにはどこか嬉しそうな顔をしているセイが居た。
「ねえ起きてよ。パン焼いたんだ」
セイがそう言うのでアゲハは体を起こした。一からこねくり回してパンを作ったみたいな言い方だったが、セイのは単純にトースターを使ったというだけのことだ。
それでもセイにしてみれば十分にスゴイ事で、それだけの為に彼は食パンとオーブントースターを買ってきたのだ。
セイが食事の用意をしているということは、今はそうするような時間帯なのだろう。アゲハはのろのろと歩き出すと、移動できる範囲のテーブルに辿りついた。
セイはビニール袋から取り出したイチゴジャムの封を切った。赤黒く、どろりとしたゼリー状の固まりを一匙掬うと、アゲハに突き出す。
「アゲハ、あーんして」
そう言われてアゲハが思わず仰け反る。対するセイは不思議そうな顔をしていた。
「どうしたの？ジャム嫌いだった？」
「セイ、それはそのまま食べるものじゃないよ」
「そうかな？」
セイは掬ったジャムを自分の口に入れた。
「美味しいよ、ほら、アゲハにも食べさせてあげる」
セイはそう言って、再びジャムを掬ったスプーンをアゲハに向けた。普通にパンに塗ってくれればいいものを、ゼリーか何かと勘違いしているのか、セイはそのまま食べさせようとしてくる。

不意にこの間の事をアゲハは思い出した。
「仕返しのつもりなの？大人げないよ」
「何のこと？」
セイは心当たりなど何もないような顔だ。どうやらカレーを無理に食べさせた事とは関係なく、本気でジャムの食べ方を間違って覚えてしまったのだろう。
セイは諦めた様子でそのままジャムを口にしていた。見ているアゲハの方が気分が悪くなりそうだった。
ジャムの中には形を留めている苺の果肉も混ざりこんでいた。全体的に赤黒く、セイに言わせればそれは生命を感じさせる色、と言ったところなのだろう。
「セイ」
堪りかねてアゲハは声を掛けた。ゆっくりとした動作でスプーンをジャムの瓶に突っ込み、テーブルの上に置いたセイがアゲハを見た。
ジャムは1／3程減っている。
「どうしたのさ」
「止めてよ、お願い」
アゲハはその様子が痛々しくて見ていられなくなったのだ。
「アゲハ、」
顔を上げたアゲハにセイはそっと口付けた。セイの中のジャムの甘さが直接伝わってくる。口唇を離すと、セイはどこか楽しそうな笑顔を浮かべた。
もう一度セイがジャムを食べさせようとしてきたのを、今度は抵抗することなくアゲハが受け入れる。
さっきよりも口の中が甘い匂いで満たされた。
アゲハが飲み下すのを確認すると、セイは嬉しそうにその動作を繰り返した。掻き回されて、どろどろになったジャムを掬い上げる。滴り落ちそうな程のジャムをスプーンに載せたものを頬張り、アゲハの口元は赤く汚れた。

与えられるがまま、アゲハはただただ甘いジャムを飲み込み続けた。頭がぼうっとしてくるのを感じる。ようやくジャムの瓶が空になり、スプーンの立てる軽い音が響いた。
テーブルの上のパンが冷えて固くなっている。
セイはインスタントのコーヒーを入れたカップを2つテーブルに置いた。
「どうしたの、アゲハ」
そう呼びかけたセイの声には動揺が含まれている。アゲハの顔色が見る間に真っ青に変わっていったからだ。
セイは慌ててアゲハに駆け寄った。アゲハは両手を使って口元を押さえると、床の上に蹲った。
「……う、うげ、」
アゲハは堪えきれずに床の上に食べたものをぶちまけた。そのまま、赤黒い液体がフローリングの上に溜まり始める。指の間から漏れた嘔吐物の臭いでまた吐き気が誘発され、
アゲハは胃の中が空っぽになった後も激しくえづき続けた。セイは傍らでアゲハの背中をさすっている。アゲハが顔を上げると、心配そうに見つめるセイと目が合った。
涙が後から後から溢れ出し、近くにいるセイの顔が滲んで見えた。
「ゴメン……」
アゲハが呟く。
セイはアゲハの首輪を外した。じゃら、と鎖が床に落ちる。セイはそっとアゲハを抱き上げると、にっこりと微笑みかけた。
「もう平気かい？汚れたままは気持ち悪いだろ、先にお風呂に入ろうか」
セイはアゲハを抱いたままバスルームへと移動した。
バスタブにお湯を張り、セイはアゲハの着ていたパジャマを洗濯機に放り込んだ。
アゲハは何か喋るのも怠かったので黙ってセイに身を預けていた。
アゲハの目は、ただセイのシャツの胸元に留められた赤い蝶の髪留

めを見つめている。
体をシャワーで洗い流して、セイはアゲハをお湯の中にそっと降ろした。少し温めの湯がアゲハの体を癒すように感じられた。
アゲハは湯船に浸かり、中で手足を伸ばした。
「寝たらダメだよ、溺れ死んじゃうよ」
セイはそう言い残すとアゲハを置いてバスルームを出て行った。
アゲハは急に恥ずかしさが込み上げてきて、お湯の中に潜った。
ざぶ、と顔を水面から上げると、少しだけ気が紛れたように思った。
バスルームを出ると、着替えが用意されていた。髪をタオルで拭きながら、アゲハは元の部屋に戻った。
何事もなかったかのようにテーブルの辺りは片付いていた。
「大丈夫かい？」
セイが心配そうに声を掛けてくる。テーブルの上には、酒の入ったグラスがあった。
「ゴメン、迷惑かけた」
「気にしないで、アゲハが悪いわけじゃないよ」
セイは少し酔っているように見えた。残っていた中身を一息に飲み干すと、セイは外していた首輪を再びアゲハに取り付けた。
「ご飯、食べられる？」
アゲハは首を横に振った。すっかり食欲はどこかに行ってしまった。セイは苦笑いを浮かべると、グラスに新しく注ぎ込んだ。
「僕にも飲ませて」
セイは怪訝そうな目をアゲハに向けた。
「君はまだ未成年だ」
「僕が酒を飲んでるってこと、セイは知ってるだろ」
何を今更、と言ったような顔でアゲハは言った。セイは渋々、もう一つ取り出したグラスに氷を入れると、その中に注ぎ込んだ。
アゲハは冷蔵庫に入っていたサイダーのボトルを取り出すと、グラスの中の液体に混ぜるようにして注いだ。
一口飲んで、少しだけ眉を寄せる。

「こんなキツイの、よく飲めるよね。僕はワインとか、日本酒の方がいいや。その位の度数のが丁度いいんだ、よく飲み過ぎるけど」
「子どもとするような会話じゃないな」
「セイがそんなまともなこと言うなんてびっくりだ」
残りを一気に飲み干すとアゲハはふう、と息を吐いた。セイは氷を入れただけの酒をあおっている。
何時みても思うが、それはどこか物悲しくアゲハの目に映った。
「セイは、一体どうしたんだい」
アゲハはセイの隣に立って、その髪を梳いた。酒で酔いが廻っていたのだ。何故そうしたのかはアゲハ自身にもわからなかった。
「楽になるのは難しいね。わかってはいるんだけどさ」
セイの声は自嘲するような響きだった。アゲハは何となくあの写真の事を思い出した。
セイは何かを忘れてしまいたいかのように、再び酒を一気に飲み干した。

#09：哀しい人形

アゲハが眠ろうとベッドに移動すると何故かセイも一緒についてきた。セイのベッドは少し大きめのセミダブルサイズなので2人でも眠れないことはないが、気分的には窮屈だ。

「ねえ、狭いんだけど」

アゲハは軽く睨んで言った。

「いいじゃないか、今日はベッドで眠りたい気分なんだ」

セイはそう言って無理やり体をねじ込んでくる。アゲハはここに連れ込まれてから、ずっとこの部屋のベッドの上で過ごしてきた。その間セイはどこで眠っていたのだろうと、今更のようにアゲハは思った。

「いつもはどこで寝てるのさ」

セイはリビングにあるソファを指差す。寝心地は悪そうだ。セイがアゲハの頭の下に腕を差し入れ、腕枕をして至近距離で見つめてくる。

アゲハはもう大体諦めた様子で大人しくしていた。

「僕はアゲハの顔を見てるのが好きなんだ」

「……僕はそういうのが嫌いなんだよ、気持ち悪い」

セイは腕枕をしていたのを、アゲハの頭を抱え込むようにして自分の傍に引き寄せた。

セイの腕の中、ぎゅうと締め付けられる。アゲハが苦しそうに身動ぎをした。

「そんなに緊張しなくたって大丈夫だよ、僕は君に手を出したりなんかしない。ただ見てるだけで幸せな気持ちになるんだ」

「変態、」

「もう知ってる」

セイのニヤニヤした顔がアゲハのすぐ近くにあった。セイからは、やはりどこか甘い匂いがする。

「大体僕相手にそんなのしようがないだろ？僕は男なんだしさ」
「うん、まあ、知識としては」
セイはアゲハのパジャマに手を掛けた。
「君が経験ないんなら僕が教えてあげてもいいよ？」
「いや、いいよ。僕はそういうのは何も知らずに大人になりたい」
アブノーマルなセックスのやり方には興味はないとアゲハは突っぱねた。
「心配しなくても大丈夫だよ？君と僕の間にはどう間違っても子どもなんか出来っこないんだし」
「それ以上触るんなら僕がベッドを辞退するよ」
セイはゴメン、と呟くと、アゲハの機嫌を取るようにその髪を撫でた。
「全く、君と居ると時々軽く死にたい気持ちになるんだけど」
「死にたいんなら、さっさと死ねばいいんだ。若い内の方が色々と楽でいいよ。何なら手伝ってあげよう」
「物騒なことを言うね」
アゲハのは軽口だが、セイは真面目な顔をして言った。
「アゲハが死んだらさ、剥製にして僕の部屋に飾るんだ。キレイだよねえ。きっと素敵だろう」
「やっぱ君って救いようがない変態だよ。よく今まで警察の世話にならずにすんだもんだ。それとも何か、実際にやらないってだけで君の仲間は案外大勢いたりするのかい？
脳内から出さない妄想は罪に問えないってか」
アゲハは大げさにため息を吐いた。
「残念なことに、君はその変態からはもう逃げられない運命なんだ」
そのセイの言葉は、アゲハに重くのしかかった。アゲハは今の自分の置かれている状況を思った。
「自由になりたければ、また今度生まれ変わってからにしておいで」
「生まれ変わるって、冗談じゃない。こんなクソつまらない人生なんて2度とゴメンだよ。全く面倒くさい」

「もっと楽しい人生になるかもしれないじゃないか」
「そんなの今と殆ど変らないよ。この僕の意識が何回生まれ直したって、今出来ないことは次だって出来っこないんだよ。バカバカしい」
アゲハが吐き捨てるようにして言った。
「僕は今だって楽になれるんならすぐにでも死にたいさ。でも痛いのも苦しいのもイヤだから生きてる」
「僕がアゲハだったら良かったのにね。多分一生鏡の前で暮らすんだろう」
「……幸せだなあ、セイは」
アゲハは疲れたので眠りたかったのだが、身の危険を感じて目を閉じることが出来なかった。それを察してかセイが言う。
「もう眠ったほうがいいんじゃない？」
「イヤだよ。何されるかわかったもんじゃない」
「だから何もしないって」
アゲハはセイの事が理解できずに、ただ目の前の男をじっと見つめ返した。
「じゃあ、なんで」
「人はさ、誰でもキレイなものが好きなんだよ。女の人は特にさ、部屋に花を飾ったりするだろ？僕だってそう。自分の部屋にキレイなモノを飾りたいだけなの」
「……あんまり理解したくないんですけど。それにさ、どうせなら女の子の方がキレイで可愛らしいだろ？セイはモテないの？」
「うーん、まあ」
アゲハは間近にある、黙ってさえいてくれれば作り物のように美しい顔をした青年を見つめた。
「見た目はまともなのに。セイは中身で避けられてるんだよ。君はよく理屈っぽいって言われたりしない？」
「そういうことを言われるほど人と関わったりしてない」
アゲハは相手にするのに疲れてきて、ふう、と息を吐いた。

「君がここに居てくれるだけでいいんだ。難しい話じゃないだろうに、どうしてわかってくれないのかな。君は僕がスーパーと家の往復だけを繰り返して終わる筈だった人生を、意味のあるものに変えてくれたんだよ」
「ああ、そう。だったら僕に感謝してもらいたいな」
セイがはは、と笑った。
アゲハはしばらくぼんやりと考えていた。セイ、という男が抱え込んでいるものは、実はとんでもなく孤独な心なのではないか。
――楽になるのは、難しいなあ。
ついさっき聞いたセイの言葉を思い出した。ハードカバーに挟み込まれた、写真の女の顔を思い出した。
「セイ、」
アゲハが呼びかけても、セイの返事はない。よくよく見てみると、どうやらセイは眠っているらしかった。
薄い背中が規則正しく上下していた。アゲハに掛けられた腕の力も抜けている。まだ抱きしめられたままの格好だが、抜け出すのは簡単そうだった。
ふと気が付いた。セイは何時もアゲハが眠っている間にどこかへ行ってしまうので、セイが眠っている所を見るのはこれが初めてだった。
目を閉じたセイは、一層人形じみて見えた。
アゲハは何故かそうしたくなって、セイの体に腕を回すと、ぎゅうと締め付けた。腕の中にある体は、思っていた以上に華奢だった。アゲハの目から涙が一筋流れて、シーツの上に落ちた。ただただ悲しくて、どうしようもなくなっていた。
拭うこともしなかったのでそのままぽたぽたと、後から溢れ出してくる涙を止めることは出来そうになかった。
「……セイのバカ」
アゲハは小さく声に出して呟く。
この日の記憶はそこで途切れた。次に目を覚ました時にはもう、

隣にセイは居なかった。
アゲハは熱を持ったように重く感じる瞼をそっと擦った。昨日の晩に流した涙の所為で赤くなっているだろう。セイは眠っていたので、見られなかったことは幸いだった。

#10：カガリ

セイはキッチンで何か作業をしているようだった。あれ以来本当に料理に関心を持ち始めたらしい。
それを自分の貧しい食生活の改善にまで生かしてくれればいいのに、とアゲハは思う。
辺りには甘酸っぱいような匂いがしていた。アゲハはベッドから降りると、セイの近くまで寄ってみた。
ざあざあと流しっぱなしの水道の下、白いプラスチックのボール一杯に赤く色付いた苺が入っている。
「苺は好きなの？」
アゲハはそう聞いてみた。ちょっと思い出すのは嫌だが、苺のジャムは好んで食べていたように見えたので。意外にもセイはううん、と首を振った。
「なんで、ジャムは食べてたじゃん。色だって赤いし」
「中が白いよ」
「ああ、そう」
どうせなら生の苺を食べればいいのに、とアゲハは思った。その方が幾らか体によさそうな気もする。
ガラスの器に取り分けて差し出された苺にはコンデンスミルクが掛けられていた。一つにフォークを突き刺して、アゲハはセイに言った。
「あのさあ、お願いがあるんだけど」
アゲハは首に嵌められた、鎖の垂れ下がっている革製の首輪に指を引っ掛ける。
「これ外して」
「ダメだよ」
「逃げたりしないからさ」
それは本心で、アゲハにはセイの部屋から出ていく気はなかった。

「だからダメだって。それ、僕の趣味なんだ。君の付けている首輪の革はね、丁度この苺と同じで真っ赤だよ。アゲハを見ているとその相乗効果でとても興奮する」
「ああそう」
アゲハは前言撤回して今すぐここから逃げ出したい衝動に駆られた。もちろんそれはそのいう首輪によって阻まれているのだが。
セイの前に置かれているガラスの器には、5粒の苺が入っていた。食べるつもりで置いているのだろうか、一向にその気配はない。
アゲハが食べ終わってから、セイは器を手に立ち上がった。
「どこ行くの？苺なんか持って」
セイはアゲハの首元から鎖を取り外した。
「うん、そろそろ紹介しようかな、って思ってさ」
「誰を？」
「まあついておいでよ」
セイは部屋を出ると、玄関からすぐの所にある洋室に入って行った。そこはアゲハにはどうしても行くことが出来ない距離にあった。ぼんやり見ていると、セイが再び声を掛けてきた。
思いもよらず自由の身になったアゲハは軽い放心状態にあったのだが、セイのいる部屋について入った。
部屋の中は真っ白で、窓には薄いピンク色のカーテンが掛けられている。窓は開いているのか、時折ふわりと広がって、すとんと収まった。
セイの部屋の様にエアコンで冷やされている訳ではないようで、夏らしい暑さを感じた。よく風が通るせいか不快な気分にはならない。
持っていたガラスの器をセイが床に置いたので、それを追ってアゲハの視線も床へと向いた。ふかふかのカーペットが敷いてある。その上に、数多くのクマやウサギのぬいぐるみが置いてあった。大きさは様々で、一番大きいものはアゲハが中に入れそうな程のサイズがある。色はこれもやはり白かピンクで、この部屋にあるものは大体がその2色で構成されていた。

必要最低限のものしか置かれていないセイの部屋とは大違いだ。
「この子はカガリっていうんだ」
セイはアゲハに向かってにっこりと微笑んで言った。
「カガリ？」
アゲハは部屋の中を見回してみた。白とピンクの部屋の中にはぬいぐるみと、あとは誰も眠っていないピンクのシーツが掛かったベッドしかない。
セイはくす、と笑うと床を指差した。もう一度アゲハはぬいぐるみの山を見た。もそ、とその中の一つが動いたように見えた。
よく見ると、クマのぬいぐるみを抱え込んだ女の子がアゲハの足元で寝転がっている。
「え、」
その女の子が、ぱっちりとその目を開いた。薄茶色の大きな目が、ぼんやりとアゲハを見つめている。セイは女の子の傍らにしゃがみ込んで、その体を抱き起こした。
「ほら、カガリ、起きて。君に紹介したい人がいるんだ」
ふっと我に返ったアゲハはセイを見た。
「セイ、これはさすがに犯罪だろ」
「何のこと？」
セイは不思議そうな顔をしている。しばらくしてアゲハの言葉を理解してか、セイは笑った。
「やだなあ。この子は僕の娘なんだ。本当だよ」
アゲハには俄かに信じがたいものがあった。自分自身のこともあり、目の前の男の言葉は受け入れがたく感じている。
「セイに親権があるようには思えないんだけど」
はは、とセイは笑った。その間、きょとんとした顔の女の子が体を起こし、座る体勢に変わっていた。どうもまだオムツを履いているらしく、下半身がかさ張って見える。
さらさらの長い髪は腰くらいまでの長さがあった。目に入りそうになっていた前髪を、セイがゴムで一つにゆわえる。プラスチックで

出来た赤い苺の付いた髪飾りだ。
「キュ、キュッキュウー、」
アゲハの耳に、何か機械の立てるような高音が聞こえてきた。何の音だと思っていたら、それはどうもその女の子が発した声のようだ。
セイがカガリ、と呼んだ女の子が怯えたようにセイの服を掴んでいる。
「うん、大丈夫だよ。この人はアゲハっていうんだ。アゲハお兄ちゃんはカガリのこと苛めたりなんかしないよ」
「アゲハお兄ちゃん、って……」
カガリがそうっとアゲハを見上げてきた。
セイの娘、というのはまだ信じられそうにないが、カガリはとても可愛らしい顔立ちをしていた。白いふわふわしたワンピースを着ているから、天使なんじゃないかと思えたほどだ。
アゲハもしゃがんで、カガリと目を合わせた。
「はじめまして。カガリ、っていうの、素敵な名前だね」
間近で見たカガリはまるで可愛らしく作られたお人形のように見えた。カガリは見知らぬ相手に警戒した風ではあったが、アゲハが微笑み掛けるとそれにつられて笑顔になった。
にっこり笑ったカガリを見た瞬間、アゲハは思わず抱きしめたい衝動に駆られた。
「ピー、ピー、キュウウウウ、」
カガリが何事かを訴えているようだ。先程から奇妙な言葉ともつかない音しか発していない。
「うんうん、カガリはアゲハのことを気に入ってくれたんだね。良かった」
セイとカガリの間では通じているのかと、アゲハは何か絶望的な気分になった。セイは抱き上げたカガリをアゲハに突き出す。
「ちょっと、抱っこしててくれるかな？」
アゲハは壊れ物を受け取るように、緊張して抱き取った。子ども

の体温と、しっとり、ぷにぷにした肌の感触が伝わる。見た目に反してずしりと重かった。
カガリは頭を上げてアゲハをじっと見つめている。セイは床に置いていたガラスの器を持ち上げた。
「カガリ、ご飯食べよう。ほら、あーんして」
セイがスプーンに乗せた苺を向けると、カガリはぷい、とそっぽを向いた。セイが苺を器に戻し、スプーンで軽く押し潰す。辺りには苺の甘酸っぱい匂いが漂った。
再度スプーンで掬った苺を向けると、眉間にしわを寄せたカガリがギーギーと鳴いた。セイははあ、と肩を落とす。
「仕方ないなあ、アゲハ、ちょっと見ててね」
セイはそう言ってカガリの居る部屋を出て行った。
「カガリ」
アゲハが声を掛ける。再びカガリが上を向いた。その瞬間、ぱあっと一気に笑顔になる。それを見て思わずアゲハも笑った。
そのぷにぷにした指をきゅ、と軽く握ってみた。無条件で愛しいものの存在に、アゲハの心の中が満たされるような感覚があった。
カガリはアゲハの髪留めが気になるらしく、手を伸ばしてくる。
「これはダメだよ。触ると怪我するかもしれないから」
蝶の髪留めには尖った部分もあるので、カガリの柔らかい指を傷つける心配があった。
しばらくして、セイが戻ってきた。手には何かしらの瓶詰を持っている。カガリがセイの方を向いた。
「カガリ、今日はグラタンにしたよ。食べられるかい？」
中身は白っぽいどろどろしたもので、ところどころに細かく刻まれた野菜の色が散らばっていた。スプーンで少しだけ掬い取ったものをカガリの口元に持っていく。
カガリはすんすん、と匂いを嗅いで、それを口に入れた。セイがほっとした顔をしている。
「よかった。この前のは食べてくれなかったんだもん。カガリはお

魚は絶対食べたくないんだね、好き嫌いはよくないよ」
「……それ、思いっきり君に言ってあげたいなあ」
アゲハが言うと、セイは気まずそうな表情をしていた。
小ぶりなジャム程の大きさの瓶詰を食べさせ終わるのには思った以上に時間が掛かった。途中、何度か食べることに飽きてきたカガリの気を引くのには骨が折れた。
カガリの口の周りはべたべたになっていた。セイがウエットティッシュでそっと口元を拭ってやる。
「今日は、よく食べたね」
食事を終えて、お腹が一杯になったらしいカガリはうとうとし始めた。アゲハの腕の中で、今にも眠ってしまいそうになっている。
「この子、いっつもあんなのばっか食べてんの？」
「うん、カガリはね、僕と同じでとんでもない偏食なんだ。お気に入りのベビーフード以外は食べない。生のものは絶対ダメで、無理に食べさせようとしたら食器をひっくり返してこっちを見ようともしなくなるよ」
「そんなところだけ似なくたっていいのに……やっぱおかしいよ、君ら親子」
「自覚してる」
アゲハはカガリが苦しくない程度にぎゅう、と抱きしめた。カガリが眠たそうな目を向ける。この子はとても幸せそうで、アゲハはそれが悲しくて泣きたくなった。
「君も案外泣き虫なんだね」
セイがそう言って笑う。アゲハは昨日のことは知られていたのかと、顔を真っ赤にした。誤魔化すようにカガリの髪に顔を埋める。
「キュキュ、プープー」
カガリがまた何事か訴えていたが、アゲハにはわからなかった。
「アゲハお兄ちゃんが泣きそうだから、慰めてあげてるんだね」
アゲハの腕の中には暖かい重さがあった。はっきりとした生命の存在を主張してくるものだ。

うとうとしていたカガリだったが、やがてすうすうと軽い寝息が聞こえてきた。ベッドを整えていたセイがアゲハからカガリを抱き取る。
ベッドに寝かせると、目を閉じたカガリは愈々お人形のように見えた。シーツが呼吸で僅かに上下しなければ、作り物だと間違えそうだ。
「可愛い？」
セイがアゲハに言った。アゲハは頷く。
「そうだよね、眠ってるところをみたら、ほんとに可愛らしいんだけど。やっぱそれだけじゃないし、色々手が掛かるし、正直言ってもういらないって思うことだってあるよ」
「カガリは、本当にセイの子どもなの？」
セイはうん、と言って頷いた。
「僕に似てない？」
「食事してるのを見たら、好き嫌いが激しいところだけはすっごいよく似てるよ」
セイが苦笑する。
「顔は母親に似たのかな」
「そう、セイにはそういった相手がいたってことなんだよな、カガリがいるってことはさ」
「えっち、」
「ばーか」
ふう、と息を吐いてから、セイが真面目な表情を浮かべた。
「事情があってカガリにはお母さんがいないんだ。僕が掛けている愛情が、ちゃんとカガリに届いてるかどうかはよくわからないな」
アゲハがセイを見つめている。
「僕はお父さんのこともお母さんのことも全然覚えてない。だから、カガリがちょっとだけ羨ましいな。セイが居なくなったら泣くと思う」
「ありがとう」

「だからあの苺は、セイがちゃんと責任もって食べるんだよ」
セイが意外な言葉に反応して顔を上げた。
「それとこれがいったいどうして繋がるんだい」
「あの子がちゃんと大人になるまでセイは生きてなきゃダメなんだよ。君はもう聞き分けのない子どもじゃないんだから、ちゃんと体に良さそうなものも食べなさい」
アゲハは潰した苺の入った器を掴んで、セイに向けた。
「わかったよ。これは後でちゃんとジャムにして食べるよ」
「ジャムはパンに塗って食べるんだよ」
「厳しいなあ」
「つーか当たり前のことを言ってるんだけど」
アゲハにはセイの嗜好が本気で理解出来そうになかった。
ぱたん、と静かにドアを閉める。出ていく前に見た、カガリは幸せそうな顔で眠っていた。
セイの部屋に戻ると、再びアゲハの首輪に鎖が取り付けられた。懐かしくさえ感じる重さが加わる。
やっぱり鎖のある方がそそられるとかなんとかセイが呟いているのが聞こえてきたような気もするが、アゲハは何も聞かなかったことにした。
「ジャムは作ったこと……あるわけないよね」
セイはこの間買ったばかりの真新しい鍋を取り出した。作り方は、携帯で検索しているようである。
材料が色々と足りないことに気付いて、セイは買い物に行くと言った。
「何か欲しいものはない？」
セイがアゲハに尋ねた。
「煙草買ってきてよ。後3本で終わりなんだ」
セイはそれにはやはりいい顔をしなかった。
「煙草の臭いがしたら、カガリは嫌がると思うよ」
痛い所を突かれて、アゲハは押し黙る。したり顔をしたセイに言

った。
「じゃあ、臭い消しのスプレーにガムも一緒に買ってきてよ。それならいいだろ」
「はいはい」
むくれた顔のアゲハをみて、セイは笑った。今日、カガリが食べたベビーフードの買い足しもしよう、と言って、外に出かけて行った。

#11：玩具箱に閉じ込められた少女

アゲハは自分の居る部屋の、開かれたドアの外。行くことは出来ないカガリの部屋のドアを見つめていた。
「どうしたんだい」
エアコンの冷気が逃げるので、セイがドアを閉めるよと言う。セイは暑がりなので自分の居る空間は寒いくらいに冷やしているのだそうだ。
「僕、やっぱりあの女の子のことが気になるんだ。今はどうしてるんだろう」
「カガリだったら、多分寝てるんじゃない？」
「ねえ、君が出かけて行った後は、あの子はいつもほったらかしなの？」
セイが困ったような顔をして頷いた。
「まあ言葉は悪いけど。カガリは寝てるか、床でぬいぐるみと寝てるかのどっちかだなあ」
アゲハは今の今まで存在すら知らなかった女の子のことを思った。
「僕、あの子の面倒がみたい。あんな小さい子がひとりぼっちでいるなんてあんまりだよ」
セイはアゲハの申し出にうーん、と考え込むような声を出した。
「いいけど。その前にホームセンターに行ってこなきゃ」
セイは鎖の長さ的にアゲハがあの部屋に入れないのでそう言った。
「あの子をここに連れて来ればいいじゃないか」
「カガリはあの部屋から出たがらないんだ。お気に入りの空間みたいでね、たとえ一歩だって外には出ようとしない。だから未だにオムツ穿いてるし、お風呂だってバスタブ持っていくんだ」
セイは事もなげにそう言うが、オムツなど、カガリはそんなものはとっくの昔に卒業していて然るべきものだ。ありえないとアゲハは思った。

「うそ、そんなの考えられないよ。だってカガリだって熱出したりとかするだろ？病院とかも行ったことないの？」
「知り合いの医者に来て貰ってる。カガリは滅多に風邪すら引かない、健康な子だってさ」
「でも」
　アゲハは何となしに、それは虐待に当たるのではないかと思った。そんな知識などは持ち合わせていないが。
「一つ言っておきたいのは、それはみんなあの子の意思だってことだよ。僕はカガリが嫌がるようなことはしたくないし、あの子が幸せになれればいいと思ってる」
「でもさ、僕はこのままカガリが大きくなって、セイの女の子バージョンみたいな偏屈に育つところなんて見たくないんだけど」
　セイは、その言葉を聞いて思わず噴き出した。
「そうだね。それはちょっと嫌かもなあ。でも、カガリが外に出たがらないっていうのは紛れもない事実なんだ。信じられないなら試してみてもいいけど、
近所迷惑になりかねないくらいの大声で泣き叫ぶから、出来たら止めといて貰いたいな」
「わかった」
　セイは丁度カガリを風呂に入れようと思っていた所らしく、前回の様にアゲハの首輪に取り付けていた鎖を外した。
「僕はお風呂の用意をしてるから、先にカガリのところに行ってて」
「うん、わかったよ」
「そんなに緊張しなくてもいいよ、アゲハ。多分君にすることは何もないと思うから」
　少し気になる言葉を吐いて、セイはバスルームへと消えた。アゲハはカガリの部屋のドアをそっと開ける。ベッドの中は空で、カガリはふかふかのカーペットの上でぬいぐるみに紛れ込んでいた。
アゲハは声を掛けずに、息を殺してそっと傍らにしゃがみ込んだ。
カガリは眠っているわけではないようで、その大きな両目はぼんや

りと正面のぬいぐるみを見つめていた。
そのさらさらした髪を撫でると、カガリが頭を上げた。眠たそうに伏せられた目が今度はアゲハを見ている。
やがて力尽きた様子で頭をぼす、とぬいぐるみに埋めた。
アゲハは自分から面倒を見たいなどと言い出したのだが、実際幼い子どもを前にして、なにをしたらいいのかわからなかった。したらいけないこともわからなかった。
セイの言った通り、アゲハには何もすることがなかった。わかっているのは、カガリをここから出してはいけないのだということだけだ。
今日のカガリは薄いピンク色をしたワンピースを着せられていた。丁度抱きついた格好の、白いクマのぬいぐるみと同じものだ。髪の毛を纏めているリボンもお揃いだった。
セイがそうしているのだ。カガリをとても大事にしているというのがよくわかった。
「キュー、キュキュッ、キュウウ」
時折、思い出したようにカガリが何事か呟くのが聞こえる。壊れた機械のような高音だった。不意に、この子は作り物なんじゃないかとの思いが過ぎった。
アゲハは白く、ぷにぷにした腕に触れてみる。子どもらしく体温が高い。なにか映画でみたような、この柔らかい皮膚の下は機械の骨組みなんじゃないか。セイは本物そっくりに作られた、少女型のアンドロイドを愛でているだけなのだ。人としてどうかと思うが、その方が多分幾らかマシだ。
思い立って、アゲハはカガリの背中を軽く揺さぶった。これから風呂に入れるのであれば、この子を起こしておいた方がいい。
カガリはぼんやりしたまま揺さぶられていたが、頭を持ち上げ、その眠たそうな顔をアゲハに向けた。
「ウウウウ」
アゲハに、はっきりと不快を訴えている。それはよくわかった。

カガリは言葉を喋らない。不機嫌そうに眉を寄せ、なにやら機械が立てるような音を出した。
「ごめん。セイがお風呂に入れてくれるって」
お風呂、という単語にカガリが反応を示した。あまり好ましくはない類のものだ。おそらく好きではないのだろう。
そうこうしているうちに、小型のバスタブを抱えたセイが部屋に入ってきた。
「おまたせ。ほら、カガリ。お風呂に入ろう」
セイはカーペットの上にビニールシートを敷き、その上にバスタブを置いた。カガリがアゲハにしがみ付いている。セイが引きはがそうとすると、子どもとは思えないほどの力で抵抗した。
「ほらカガリ、アヒルちゃんが一緒がいいっていってるよ」
湯を張ったバスタブの中に、一羽のアヒルの玩具が浮かんでいる。それを見たカガリはアゲハから腕を離すと、自分からバスタブの縁にしがみ付いた。
「お洋服が濡れちゃうよ」
セイがカガリのワンピースを脱がしにかかったところで、アゲハは2人から目を逸らした。セイがそれに気が付く。
「どうしたの？」
言いにくそうにアゲハは口を開いた。
「だって、カガリは女の子だからさ。セイはいいよ、でも僕は関係のない人間じゃないか」
カガリに気を使っているのだと知れた。セイがくす、と笑う。
「ねえ、そんなこと言わないで、手伝ってよ」
「今までは一人でやってたんだろ？」
セイはうーん、と考えながら、はやくアヒルを捕まえたくてうずうずしているカガリの服を脱がせた。その下のオムツも外す。
カガリをバスタブの中にそっと入れるとセイはその隣に用意してあったぬるま湯を溜めた洗面器を使って、カガリの顔を洗い始めた。
「じゃあ、アゲハがカガリのママになってよ。それならいいだろ？」

しばらく考え込んだ末の答がそれなのかと、アゲハがため息を吐いた。
「それ本気で言ってる？」
「うん、割と本気」
「よくそんな下らないこと考えてるヒマあるね」
アゲハはセイの様子を見た。濡れないように、ひじの辺りまで袖を捲り上げている。セイの露出した腕は、ぎょっとする位細くて色が白かった。片手で掴めるんじゃないかと思う程だ。
髪の毛を泡だらけにしたカガリがアヒルの玩具で、ご機嫌で遊んでいる。アゲハはなにか出来ることがあるなら手伝おうと、替えのお湯をバスルームから汲んできた。
セイがカガリを洗い終えるのを、バスタオルを持って待つ。長い髪の毛は別のタオルで包んで水分を吸い取らせた。
入浴を嫌がっていたカガリだったが、ドライヤーで髪を乾かすと、気持ちよさそうにしている。終わったころにはカガリはうとうとし始めていた、
新しいワンピースに着替えさせると、セイはカガリをベッドに寝かせた。
「はい、おしまい」
誰に言うでもなくセイが呟く。ビニールシートを巻き、バスタブを部屋から運び出した。
「セイ、いっつもこんなことやってたんだ」
アゲハは感心してそう言った。
「うん」
「ねえ、一つ聞いていい？」
「何だい？」
「セイは何の仕事をしてるのさ」
男手1つで子どもの世話をしながらの生活に、そんな時間が取れるのか疑問に思ったからだ。セイはしばらく黙り込んでから秘密、とだけ返した。

「もっと仲良くなったら教えてあげるよ」
「君ってそればっかり」
セイはふっと笑った。打って変った明るい調子で言う。
「じゃあ、今度は僕たちもお風呂に入ろうか。ねえアゲハ、一緒に入ろう」
「……冗談だろ、」
セイの家のバスルームは狭い。2人でも入れないことはないだろうが、多分相当キツイ。あんまり考えたくはない状況だ。
「イヤだよ」
アゲハが嫌悪感をむき出しにそう答える。
「うん、じゃあ、アゲハが先に入っていいよ」
珍しくセイが素直に引き下がったので、アゲハが逆にびっくりした。
「どうしたの？返って気味が悪いんだけど」
「うん、僕は貧相な体つきだから、君に見られるのが恥ずかしいんだ」
「何だよそれ、だったら初めから言うなよ」
「いや、でも一緒には入りたいなあ。そうだ、僕がアゲハの事お風呂に入れてあげる。僕髪の毛洗うの得意なんだよ」
「ああそう。だから美容師を目指せばいいって言ったんじゃん」
「君専用の美容師を目指すよ」
アゲハは呆れたように大きなため息を吐いた。
「今更何を恥ずかしがってるんだい？僕はこれまでに2回、君の裸は見てるから。もう慣れっこだろ？」
セイがこう言い出すとシツコイ性質だとわかり切っているので、アゲハは自分から折れてやることにした。
バスタブに溜めたお湯に浸かりながら、アゲハが上半身を縁の外に乗り出す。セイは先ほどカガリにそうしたように、泡立てたシャンプーを使ってアゲハの髪を丁寧に洗った。
他人に髪を洗われるというのは不思議な感覚だった。セイは自分で

言うように、実際髪を洗うのが上手かった。
アゲハは日頃自分がどれだけ雑な洗い方をしていたのかを痛感した。耳の後ろにまで丁寧に指が入る。
　セイはやはり袖口をひじの近くまで捲り上げていた。病的に痩せたその腕が、今度はアゲハの間近にあった。骨と皮だけで出来ているみたいだった。
「セイの腕、なんかじいちゃんの腕みたいだな」
　アゲハが言った。近所に住んでいるガリガリの老人の細さによく似ていた。
「失礼なことを言うなあ。気にしてるのに」
「セイは一体幾つなのさ」
「明日で、２８」
「明日？」
　セイは頷いた。
「誕生日なんだ」
　シャワーで髪を流し終え、ご丁寧にトリートメントまでして貰ってから、アゲハは体は自分で洗うからと言って断った。満足したのか、セイは素直に出ていく。
バスルームを出ると、着替えが用意されていた。
　濡れた髪を拭きながら部屋に戻ると、セイは酒を飲んでいた。酔っぱらって風呂に行くのは危なそうだ。しかしカガリと同じく、アゲハが知る以前からセイがそうしていたのなら、慣れているのかもしれないが。
「明日が誕生日って、本当？」
　セイはうん、と頷いた。
「おとめ座なんだ。可愛いだろ？」
「自分で言うなって」
「ねえ、お祝いしてくれる？」
　甘えたような声でセイが言った。酒の力もあるのだろう。
「僕は、何も君にプレゼントなんかしてあげられないよ。お金だっ

て持ってないし」
アゲハがそう呟くと、セイはううん、と首を振る。
「別にそんな、欲しいものがあるわけじゃないんだ」
そう言って、バスルームへと入って行った。

#12：フェア

それが本当のことだとしたら、２８年前の今日生まれたという男に、アゲハはおめでとう、と言った。
「ありがとう」
セイがはにかんだような顔をして笑う。アゲハはセイに一枚の紙切れを渡した。
「何？」
「それ、買ってきて欲しいものが書いてあるんだ。そんなに沢山は要らないから、ちょっとずつの小売りの分でいいよ」
見ると、なにやら食材の名前が並べたてられている。
「どれだけの分量が必要なのか書いてないからよくわからないよ」
セイが困った顔をする。
「そんなの適当。２人分の料理が出来そうな感じでさ」
「アゲハ？」
「誕生日プレゼントの代わりに、僕がセイに御馳走してあげる」
プレゼント、と聞いてセイが嬉しそうな顔になった。しかしまたすぐに今度は首を傾げる。
「ありがとう。うーん、でもアゲハ、料理したことないって言ってなかった？」
「ばあちゃんが居ない時は自分で作ってたんだ、滅多にないけど」
アゲハは言いにくそうに、少しだけ顔を赤くして言った。
「この間、セイがカレー作ってくれた時、僕はすごい嬉しかったんだ。なんていうかさ、僕の為にやってくれてるってのが。だから僕もセイの為になんかしたいって思ったんだよ。
押し付けがましい？」
「いいや」
セイは首を振った。
「ところで、この材料でアゲハは何を作ってくれるんだい」

「うーん、スパゲティ、かな。多分」
「多分って」
「大丈夫だよ、食べれない程マズイもんでもないから」
セイは指定された材料の中に、トマトが入っているのを見つけた。
「トマトソースのかな」
「うん、」
「だったら嬉しいな、僕トマトは大好きなんだ」
「多分そうだと思ったから、トマトソースにしたんだ」
セイは上機嫌な様子で出て行った。アゲハはふう、と息を吐き出す。祖母が不在の場合、アゲハが偶に作っていたスパゲティは、レトルトパウチのミートソース味だ。
トマトは勿論扱ったことはない。そもそもアゲハの苦手な食材の一つだからだ。
スーパーから戻ってきたセイは、アゲハにビニール袋を渡した。
「ありがとう。セイは座っててよ。すぐ出来るから」
「うん」
アゲハの首から下げられた鎖は、今はキッチンの流し台まで移動が出来るようになっていた。
慣れない手付きでアゲハが材料を切り揃えている。
なにやら唸るような声を上げているアゲハに、セイは声を掛けてみた。アゲハが振り返って答えを返す。
「大丈夫だよ。カレーとスパゲティはちょっとくらい失敗しても食べられないことはないからさ」
「うーん、なんかドキドキするけど、君に任せるよ」
セイはいつものグラスに買ってきたコーラを注いだ。酒を飲むのは控えている。アゲハに気を使っているのだ。
見た目では繊細な印象を与えるアゲハだが、中身は以外と大雑把で、そして面倒くさがりだ。出てきた料理にはそれがよく表れていた。
ソースと共に煮込まれたスパゲティからは、それなりにいい匂いは

している。アゲハは取り出した大皿に、セイの分も取り分けて盛りつけた。
「残してもいいけど、ちょっとは食べてくれないと泣くよ」
アゲハが冗談めかして脅しを掛ける。
「ありがとう」
セイはそう言って、にっこりと笑った。
「そういえばさ、カガリの誕生日はいつなの？」
ふと思い立ってアゲハは訊いた。
「あの子は7月生まれだから、ついこの間。でもあの通りだから、ケーキは食べてくれなかったな」
「そっか」
「カガリが抱っこしてたおっきなピンクのウサギが居ただろう？あれをプレゼントしたら喜んでくれてさ。今一番のお気に入りなんだ」
カガリのことになると、セイは本当に心から嬉しそうな顔をして話した。可愛くて仕方がないといった風だ。
セイは話しながら、フォークに巻き付けたスパゲティをほんの少しだけ口にした。傍目には食が進まない様に見えるだろうが、彼にしてみれば逆である。
アゲハはセイが一口も食べてくれないのではないかとも思っていたので、その様子にほっと胸を撫で下ろした。
「僕は君が食べたくないものだらけだってことを知ってるから、トマトを使ってみたんだ。僕はトマトが嫌いだからね。君ばっかり我慢するのはフェアじゃないだろ？だから嫌いでもちゃんと食べて欲しいんだ」
スパゲティに使われている食材の中で、アゲハはトマトが、セイはハムとピーマンとマッシュルームと玉ねぎが苦手だった。セイにとっては食べられるのはトマトとパスタくらいだ。
「僕の方が分が悪いよ」
「それは仕方ないだろ」
「アゲハが食べさせてくれるんだったらなんだって食べるよ」

セイが甘えたことを言う。アゲハは黙ってフォークにスパゲティを絡ませると、その上にハムをぶす、と突き刺した。
ハムを頂点にしたフォークをセイに突き出す。肉類の苦手なセイにとっては明らかな嫌がらせだった。
「アゲハのいじわる」
「冷めたらもっとマズくなるよ」
セイは笑って、フォークを咥えた。随分長い時間をかけて、皿の上のものを食べ尽くした。
「アゲハは料理が上手だね。美味しかったよ、ありがとう」
セイがそう、アゲハに言った。皿の上には何も残してはいなかったが、元々セイの為に取り分けた量は幼児の食事並みに少量だった。アゲハは彼の心理的負担を軽くしようと、初めから少なくしておいたのだ。それでもセイにとってはとんでもないことだったかもしれない。
セイがどれだけ無理をしていたかはアゲハにはちゃんとわかっていた。アゲハ自身、微妙だと感じる仕上がりだったからだ。トマトソースを作ったことがなかったので、味付けの加減がわからず少々しょっぱかった。それを時間を掛けて食べたものだから伸びきったスパゲティが美味しいわけがない。
「ありがとう、セイ」
アゲハはセイに近づくと、頭を乱暴に撫でた。鼻がつんとするのを感じた。また泣き虫だとからかわれそうで、必死で堪える。
「セイ、お酒飲んでいいよ。口直ししよう」
「そうだ、ケーキ買ってきてるんだ。アゲハも食べるよね？」
アゲハはうん、と頷いた。2人分なのでさすがにホールではなく、カットされた普通サイズのショートケーキだった。スタンダードな頂点に苺が乗っけられているものだ。
「お誕生日おめでとう、って書いてもらえばよかったのに」
アゲハがからかって言う。やめてくれよ、とセイが照れたように笑った。

まだ昼を少し過ぎた時間帯だったが、セイはグラスに酒を注ぎ込んだ。そうして、口に入れた苺を流し込むようにして食べた。
「カガリのご飯、今日はどれがいいかなあ」
その時、セイの携帯が鳴った。表示された相手はミオだ。
「ああ、セイ。覚えてないかもしれないけど、今日はアナタの誕生日でしょう」
「覚えてるよ。僕だって自分の生まれた日にくらいは関心があるさ」
「それはごめんね。おめでとう。……もう喜ぶような年でもないかしら？それでよかったら、どこか外に食事にでも行かない？」
「うん……でも今日は、予定があるから……また今度にしよう」
「そう、残念だわ。私、アナタに渡したいものがあるの。時間はとらせないから、出てきてくれると嬉しいわ」
ミオは誕生日のプレゼントを用意してきたのだと言う。わかった、と言って、セイは通話を終えた携帯をポケットに仕舞い込んだ。

#13：写真

セイがアゲハに渡したものは、柔らかく煮込まれたチキンライスのベビーフードだった。カガリの一番のお気に入りらしい。
「カガリがお腹空かせてるから、君が食べさせてあげてて」
「わかった。でも、」
「大丈夫だよ、カガリは君のこと大好きだし、これだったら本当に喜んで食べるから。もし何かあったら呼んで。ミオに呼ばれててさ、すぐ戻ってくるつもりだけど」
「ミオ？」
「ああ、僕の知り合い。誕生日だから会いに来てくれたんだ」
「女の人、」
「そうだよ」
セイはその作り物みたいな顔に嫌味な類の笑顔を浮かべる。
「妬いてるの」
「……誰が」
軽口にむくれた顔のアゲハをセイは宥めるように、頭を撫でながら言った。
「安心して、僕が愛してるのは君だけだから」
「って誰が！ばか、早く行って来いよ、もう！」
アゲハの罵声を背中に受けながらセイは玄関を出て行った。
「もう……」
アゲハは何だか一気に疲れが出て、その場にへたり込んだ。
カガリの部屋のドアを開けると、ぬいぐるみを抱き抱えたカガリが部屋の真ん中で座り込んでいた。アゲハを追うように視線を動かしている。やがてアゲハがベビーフードの瓶詰を持っているのに気付くと、キュウキュウとなにやら訴えかけるような声を出し始めた。
「カガリ、ご飯だよ」
アゲハが瓶詰の封を切ると、その目をキラキラ輝かせたカガリが

すり寄ってきた。口元が涎で光っていた。傍に置いてある濡れたティッシュで拭ってやってから、アゲハはチキンライスをスプーンで掬った。
「あーんして、」
言われるままに大きく口を開いたカガリがスプーンを咥えた。美味しそうにチキンライスを頬張るカガリを見ていると、アゲハも自然に笑顔になった。
カガリは本当に天使なんじゃないかと思う程愛らしかった。

エントランスに出ると、赤い車の脇にミオが立っていた。ミオはセイを見つけるとにっこりと微笑んだ。
「久し振り。誕生日おめでとう」
「うん、ありがとう」
ミオは持っていた小さな包みをセイに差し出した。
「アナタ甘いものは好きだったでしょう？ああ、安心して。手作りじゃないから」
中身は小さなクッキーが詰め込まれた小瓶だった。
「ありがとう、ミオ」
「でも、お菓子ばっかり食べてちゃダメよ。ちゃんと食事もとらなきゃ」
「うん、心配ないよ」
ミオは不思議そうな顔をした。
「やっぱりアナタ、どこか前とは違ってるわ。なんだか楽しそうに見えるの」
セイはくすっと笑った。
「ミオ僕ね、恋人が出来たんだ」
「あら、そうだったの」
ミオはもう一度、今度は違う意味でおめでとう、と言った。
「毎日研究室と家の往復で、出会いがないってぼやいてたのに」

「この間、ちょっと遠回りして帰ったんだ。そしたらいつもと違う通りで珍しい蝶々を見掛けた。すごくきれいな、真っ赤なアゲハチョウなんだよ」
「アナタってそういうロマンチストなところもあるのね」
「本当だよ？」
「それがアナタの言っていた、運命ってことなのかしら？」
「うん、そうだね」
８月も終わりに差し掛かったところだったが、まだ昼間の日差しは十分にきつい。ミオはセイの居る、マンションの作り出す日陰の方に移動した。風もなかったので、じわじわと暑さが蝕んでくるように感じた。
「私のお節介ももう必要ないのね。なんだか寂しい気もする」
「ミオは、僕の友達だよ」
「そうね、私もそうだわ」
そこで、ふっとミオの表情が曇った。さっきまでよりも暗く、沈んだような顔をしている。
「その人に、アナタはちゃんと話したの？」
「……ううん、まだ」
セイは言い淀んで、言葉を詰まらせた。
「いずれはね。でも今はまだ僕自身がそのことを考えたくない。自覚もないし、特に不自由もなく暮らせてるからね。テツも気にならないなら、あまり考えない方がいいって言ってたし」
「そう、」
ミオは顔に掛る髪を掻き上げた。
「それよりさ、ミオ、家に上がっていかない？時間はあるよね」
「ええ。でもいいのかしら？」
「せっかく来て貰ってるのに悪いじゃない。あんまり大したおもてなしは出来ないけどね。コーヒーだってインスタントだし」
「じゃあ、少し休ませて」
２人はエレベーターに乗り込み、セイは１０Ｆのボタンを押した。

「ミオは、わかってくれるよね、」
「え、何」
セイの呟きを聞き取れなかったミオが訊き返した。
「ううん、なんでもない」

カガリは半分ほどでチキンライスに飽きてしまったようだ。アゲハがスプーンに掬ったものを口元に持っていっても食べようとしない。目の前に転がっている真っ白なクマのぬいぐるみを掴むとぎゅうと抱きしめた。カガリのケチャップでべとべとになった口元が押し付けられて、白い毛並みにオレンジ色のシミが付いた。
「カガリ」
アゲハは濡れたティッシュでカガリの口元を拭ってやった。瓶をそっと床に置き、くまのぬいぐるみを見た。
「洗ったらキレイになるかな」
「キュウウ」
カガリは上機嫌でクマに話しかけている。アゲハはその様子を見つめていた。
その内に、足元に置いた瓶のことをうっかり忘れていたアゲハは、瓶を倒してしまった。カラン、とスプーンが床の上を転がり落ちた。どろどろした中身がカーペットの上に散乱している。スプーンの音に反応したカガリが、大好きなチキンライスがカーペットの上にこぼれてしまったのを見つけた。
「ウウウ」
カガリが不調を訴える機械のような声を上げた。ぐちゃぐちゃになったカーペットの上のチキンライスを素手で掴んで、口に入れようとする。
「ごめん、ほら止めて。ご飯はまた新しいの持ってくるから」
カガリは聞き分けずにぽろぽろ涙を零しはじめた。カガリの指も、カーペットの上もどろどろに汚れている。目元を擦ったカガリの顔

もべとべとになっていた。
　その時、がちゃん、と玄関のドアの開く音がした。セイが戻ってきたのだ。アゲハはまだカーペットの上の食べ物に執着しているカガリを制するよう抱き抱えたまま、部屋の外まで出てしまった。
「セイ、大変なんだ」
　アゲハはセイと一緒にいる見知らぬ女性に気が付いた。ミオはセイを大慌てで出迎えた、幼い子どもを抱えた少年を見て言葉を失う。ミオがセイに何かを言いかけた瞬間だった。
「キィヤアアアアアア！」
　カガリが、まるで超音波のような叫び声を上げた。カガリを抱えていたアゲハは耳をふさぐことが出来ずに、カガリを床の上に降ろして膝をついた。
　廊下に寝かされたカガリは、一体どこからこれほどの声が、と言う程の大音量で泣き叫び、手足をばたつかせている。耳をふさいだアゲハは、今更のようにしまった、と気が付いた。その内に玄関から上がりこんだセイがカガリを抱き上げると、部屋の中に連れ込んだ。
「カガリ、大丈夫だよ。もう大丈夫」
　セイは何度もそう言い聞かせながら、カガリの背中を優しく撫でた。セイの声がようやく届いたのか、カガリの声が止んだ。
　カガリは何度も瞬きを繰り返し、部屋の中を見回した。そこが元の白とピンクに囲まれた自分の部屋だと確認してから、また少し小さめの声で泣き始めた。セイがハンカチで濡れた顔をそっと拭った。しばらくすると、泣き疲れたのかカガリは眠ってしまった。
「もう大丈夫だよ」
　セイは今度はアゲハに向かって言った。抱き上げたカガリをベッドに寝かせる。
「あの、ごめん。僕、」
　セイは床の惨状を見て、大体の事を悟ったようだった。
「仕方ないよ。君が悪いわけじゃない」

セイはカーペットに零れたチキンライスをティッシュを使って片づけた。
「忘れてたんだ、ごめん。まさかあんなに泣くなんて思わなかった」
「うん、カガリはね、絶対にこの部屋から出たくないみたいなんだ。嘘じゃないって信じてくれたかい？後で隣の人に謝りにいかなきゃなあ」
「……ごめん」
セイはアゲハに、気にしないで、と言って頭を軽くぽんと叩いた。
「一体何の騒ぎなの？」
玄関で一人佇んでいたミオは、カガリの鳴き声が収まったのを機に部屋へと上がりこんできた。
「ああ、ごめんミオ」
「そうじゃなくって」
ミオは放って置かれたことはどうでもよく、目の前に居るアゲハの事を言っているのだ。アゲハは首輪を嵌めて鎖で繋がれ、だぶだぶのパジャマ姿だった。客を出迎えるにしては少々前衛的過ぎる出で立ちだ。
「この子、いったいどうしたのよ。アナタには歳の離れた兄弟は居なかったわよね？」
ミオは混乱した頭の中を整理しているようだ。その表情に表れている。
「うん、」
「話してもらえる？」
アゲハは話に口をはさめず、促されるまま2人についてリビングに行った。
セイがミオに話したのは、アゲハがここに居る理由だった。あの日、酔っぱらっていたアゲハを介抱してから、今までにあったこと。
アゲハはセイの言っていることが彼の脳内で妄想により書き換えられているようならば訂正しようと思っていたが、セイは本当のことだけを話した。

ミオは話の内容を理解したが、だからこそセイのことがよくわからなくなった。ちら、とアゲハを見る。
成程、赤いアゲハチョウだ、とミオは思った。アゲハの髪には美しい蝶を模した髪留めがあった。
セイは見た目だけはとても美しい青年だったが、彼と並んでも見劣りすることが無いほど、アゲハには年齢に不相応な色気があった。時折所在なさ気に髪留めを弄る姿は可愛らしくもあった。セイがアゲハに執着するのも頷けるとミオは思った。いや、セイでなくても、アゲハを囲いたいと思う輩はそれこそ大勢いるのではないか。
セイがあらかた話し終えると、ミオは差し出されたコーヒーを一口飲んだ。
「セイ、アナタは自分のしていることが良くわかっていないみたい。言いたいことはよくわかるわ。でも、誘拐は犯罪なのよ」
「僕は自分の気持ちに正直なだけさ。それが認められないのならこの世は僕の居るべきところじゃあないね」
「そう、だったら警察のお世話になることね。案外アナタは今よりも健康になれるんじゃない？我儘言ったって通らなければ、まともな生活を取り戻せる筈よ」
ミオは嫌味を込めてそう言った。セイを見て、悲しげな表情を浮かべている。
「……近所の人にでも通報されてたら、本当にそうなるところだったのよ。アナタ、自分の立場を全然わかってない」
ミオは声を荒げたいところを、押し殺したように感情を抑え込んでいた。話が隣近所に聞かれることを避けるためだった。またそうすることで、自分の気持ちを静めているようにも見える。
アゲハはミオがまともな思考回路の人間であると判断して、訊いてみることにした。
「ねえ、お姉さん。今日って何月何日？」
アゲハの急な問いかけに一瞬ミオは固まったが、直ぐに答えた。
「27日よ、8月の」

「え、じゃあ2週間か、最高記録更新だな」
背もたれに体を預け、アゲハはあーあ、と声に出した。
「何のこと？」
「うん、今日で丁度１４日。僕の家出の最長記録だよ。こりゃばあちゃんもさすがに心配してるだろうな」
「家出って、アナタ」
「僕はあんまりいい子じゃないの。酒は飲むし煙草だって吸うししょっちゅう無断で何日も帰らないしで、ばあちゃんは僕が居なくなったって、ああまたかって思うくらいだよ。そろそろ警察の人にでも相談するかもしれないけどさ。で、それだけのことなんだ」
アゲハはそこで言葉を区切り、セイの顔をまじまじと見つめた。
「僕はセイに倒れてるところを拾ってもらったんだ。気が付くまでの間自分のベッドを使わせてくれた。あんまり居心地が良かったんで、帰ろうとしなかったのは僕の方なんだ、ねえ？」
アゲハはセイに強引に同意を求める。セイはアゲハの意図が読めずに首を傾げた。
「まあ、この首輪とかはセイの趣味。最悪だとは思うけど、僕は何にもされてないよ。むしろ世話になってる。セイは何でも買ってくれるし、僕の事を大事に扱ってくれるしね。
だから、セイの事警察とかには言わないでほしいんだ」
「妙な事をいう子ね、アナタは被害者なのよ？」
「うん、だから別にどうでもいいんだ。警察と関わるの面倒くさい。僕の所為でカガリがひとりぼっちになるのはイヤだよ。あの子にはセイが必要なんだ」
カガリ、という少女の名前を出した時、3人の脳内でさっきの超音波のような鳴き声が再生された。ミオが訳がわからないといった顔付きをしている。
「アナタがそれでいいとかいう問題じゃあないの」
「ねえ、セイ。僕帰りたい。いいよね？」

アゲハはセイをじっと見つめた。セイを犯罪者にしたくなかった。セイとカガリが引き離されるのが嫌だったのだ。長い長い沈黙の後、うん、とセイは一言呟いた。立ち上がって、アゲハの首輪をセイは外した。テーブルの上に置かれたそれは、鮮やかな赤い色をしていた。

「ありがとう」

アゲハが言った。セイはそのまま、アゲハをそっと抱きしめた。その体勢でセイの顔は見えなかったが、なんとなしに彼が泣いているのがわかって、アゲハは身動きできなかった。

ミオがごめんなさい、と言った。それが何に対してなのかはっきりとはわからなかった。

「ううん。ありがとう、ミオ」

アゲハは久し振りに履いた靴の感触が不思議な感じがした。それだけの期間、自分がここに閉じ込められていたことに気が付く。

「アナタの家はどこなの？」

ミオが訊いた。アゲハが答えると、随分遠くなのねえ、とミオは言った。

カガリの様子を伺っていたセイが戻ってきた。アゲハを見送るセイの目は、どこか悲しげな色をしていた。腕時計を確認してミオが言う。

「来たときはお昼過ぎだったのに、もうこんな時間。ねえ、セイ。私お昼から何も食べてないの。これから一緒にどう？3人で、どこか食事にでも行きましょう」

意外なミオの提案にセイがはっと顔を上げた。アゲハをぎゅうとミオが抱きしめる。

「今日でこの子とはお別れなのよ。もう少し、何かいい思い出を作っておいてもいいんじゃない？私いいお店知ってるの。アナタ誕生日なんだし、どうかしら？」

「うん、そうだね」

セイは笑って言った。

ミオが案内したのは夜景を一つの売りにした高層にあるレストランで、落ち着いた雰囲気の漂う場所だった。料理の選択をミオに一任したセイは、珍しく出されたものを半分くらいまでは食べていた。例によってアルコールで流し込むようにしていたが。ミオも咎めるようなことは言わなかった。

セイのマンションに戻ると、アゲハがもう一度だけ、と頼み込んで部屋の中に上がりこんだ。カガリに会いたかったのだ。目を覚ましたカガリは床の上に転がっていた。アゲハはカガリをぬいぐるみごと抱きしめた。ふわ、と良い匂いがした。

「ねえ、セイ。この子と写真は撮ったことある？」

ふと思いついてミオが言った。

「ううん」

「僕、写真って苦手だ」

アゲハがそうイヤそうに言った。それはアゲハの持つ古傷にも関係している。

セイは写真については撮ることを思いつかなかっただけのようだった。リビングに戻ると、古めかしいカメラを一台持ってきた。アゲハはセイがあんまり寂しそうにしているものだから、自分から折れた。

「カガリと一緒にだったらいいよ」

「それなら、3人で写せばいいわ。私がシャッター切ってあげる」

ミオがそう言って、写真にはセイと、カガリを抱き抱えたアゲハとで撮ることになった。きょとんとした顔のカガリを抱いて、アゲハがぎこちない笑顔を浮かべている。

「さよなら、アゲハ」

赤い車はマンションを後にした。完全に見えなくなっても、セイはその方向をじっと見つめていた。

#14：日常は音もなく崩壊する

アゲハにまた以前と同じ日常が戻ってきた。感想は一言でいえばただ「暑い」だった。もう夏の終わりに差し掛かっているが、セイの部屋と違ってエアコンをつけていない家の中はまだ蒸し暑かった。

「おかえり、アゲハ」

祖母はそうとだけ言って、アゲハを抱きしめた。物心ついてからもう何度目かわからない家出を、心配はしていたのだろうが祖母は叱りつけることはなく、また泣き出すようなこともなかった。今までどうしていたのかさえ訊かなかった。アゲハの性格をよくわかっている祖母は、彼がそういった質問攻めにされると途端に不機嫌になることをよくわかっているのだ。

畳の上を歩くと、家に帰って来たのだという実感が湧いた。けして広いとは言えない平屋建てだが、アゲハの居ない間祖母がここで一人きり、どんな気持ちで過ごしていたのだろう。そう思うと、少しだけ胸が痛んだ。

「あ、」

アゲハは放り出したままだった学生鞄の中身を畳の上にぶちまけた。自慢ではないが一度も開いたことが無く、折り癖すらついていない教科書が出てくる。

一応のたしなみとして鞄に入れてあるのだ。しわの寄ったプリントと、数冊の真新しいノートもあった。夏休みの課題という名の代物だ。勿論中はまだ真っ白で、名前すら記入していなかった。

アゲハはくしゃくしゃに丸めたお知らせのプリントをごみ箱に突っ込んで、テキスト類をまとめて鞄の中に戻した。一向にやる気が起きなかったのだ。

代わりにポケットの中から煙草の箱を取り出した。一本を咥えて火を点けた。セイがアゲハに与えたものだった。中身は後残り2本を数えるようになっている。ため息と共に白い煙を吐き出した。

やろうと思ったことならあるが、アゲハには夏休みの課題をきちんと仕上げたことなど覚えている限りでこれまでに一度もなかった。9月に提出が求められるが、忘れたと言って初日はやり過ごす。それから教師に何度となく課題について言われても、うやむやな返事を返すだけだ。そうして相手が諦めてしまうのを待つというのが常だった。

授業自体は真面目に受けているので、アゲハは勉強がまるっきり出来ないというわけでもない。ただ酷く面倒くさがりな性分がそうさせるのだった。

アゲハには自分の部屋というものが与えられていなかったので、6畳間の一角に机を置いている。煙草を吸っているところは、祖母の居る場所からも丸わかりだった。例によって何か言われたことはなかったが。

アゲハは貴重な夏休みを最高に無駄な過ごし方をしてしまったと思った。あと4日、どこか気晴らしにでも行きたかったが、行けなかった。アゲハは貼り付けた湿布越しに右側の頬を押さえた。隣に住む昔気質の老人は、祖母の義兄に当たる男だった。アゲハが家に帰って来たと知った彼は、見るなりアゲハを殴りつけた。そのガリガリの腕からとは思えない力だった。もちろんそれは彼の心配の深さでもある。

拳骨一発と暫くの間外出禁止。それがアゲハに与えられた罰だった。

急に祖母が笑い出したので何事かと思って振り返ると、祖母はテレビを見ていた。意識していなかったが、そういえばテレビがついている。騒々しい音声が聞こえてきた。

――僕はテレビが大嫌い。そう言っていた、セイの家にはなかったものだ。あの家では、エアコンの作動音以外聞こえてこなかった。

不意に、昨日の晩アゲハをミオが車で家まで送り届けてくれた時のことを思い出した。

助手席で見た横顔は、すっきりとした美人だった。

「男の子だったのね」
ミオはアゲハにそう言った。
「全くどういうつもりなのかしら」
「セイって、……そういう趣味なんじゃなかったの？」
「違うと思うわよ」
アゲハはそういえば、とカガリの存在を思い出した。
「そうとも言い切れないかしら？あの人ってちょっと変わってるでしょう」
「ちょっとじゃないよ、ヘンタイだよ。まあ本当に、僕はなんにもされてないけど。それがかえって気持ち悪い」
ミオはくすくす、と笑った。
「お姉さん、」
「ミオ、よ」
「ミオ。ミオはさ、セイの知り合い？友達なの？」
「ええ。昔の仕事仲間よ。セイの事が気がかりだから、時々様子見がてらに食事に誘ってるの。あの人ろくなもの食べてなかったでしょう？」
「うん。よくあれで生きてんなあって思うよ。好き嫌いが多過ぎ。まあでも、今日はちゃんとご飯食べさせたけどね」
その言葉にミオが驚いた顔をした。
「うそ、信じられない」
「本当だよ。セイは僕の言うことだったらなんだってきくんだ。ハムもピーマンも玉ねぎも入ってたけどちゃんと食べてたよ。量は少なかったけど」
「……そうだったの」
信号待ちで停車すると、ミオはアゲハを見た。それからふっと微笑んだ。
「そうね、丁度アナタと一緒にいるようになってから、セイは変わ

ったわ。相変わらず病気みたいに痩せてるけど。あんな幸せそうな顔今まで見たことないの」
アゲハはミオの言葉に、セイの事を思い浮かべた。最後の最後になって見せた、セイの笑顔はどこか泣き出しそうな程哀しげでもあった。
「ごめんなさいね、変なこと言って」
「ううん」
それからしばらくの間沈黙があった。アゲハは赤い蝶の髪留めをそっと外した。指先に留まる蝶のようにして、ぼんやりと見つめた。
「きれいね」
ミオが言った。
「ありがとう」
アゲハはまた視線を蝶に戻した。赤い、艶のある光沢をしたアゲハチョウを模したものだ。アゲハを、セイと引き合わせた蝶々だった。
ほどなくして、車はアゲハの家に辿りついた。
「セイのこと、アナタには本当にすまないことをしたと思ってるわ。こんなことを言うのは間違いだってわかってるけど、あの人は悪気があったわけじゃあないと思うの。だから、あんまり恨まないであげて」
アゲハはミオを見て、うん、と頷いた。
「僕は別にセイの事恨んでないよ。ミオ、セイに今度会ったらさ、世話になった、ありがとうって代わりに言っといてくれない？」
「わかったわ」
ミオは再び車に乗り込んだ。
「セイは、アナタに何も言わなかったのね」
「何のこと？」
「ううん、なんでもないの。気にしないで。それじゃあ」
「うん、バイバイ。気を付けてね、ありがとう」
ミオの赤い車が遠ざかる。アゲハは大きく伸びをした。息を深く

吸い込む。
唐突に、アゲハに自由が戻ってきた。しかし、アゲハはそれに対して、逆に間違ったホームシックのようなものを感じているのに気付いた。

#15：マナ

再び始まった学校生活の初日からあいにくの天気で、アゲハは本気でサボってしまおうかと考えていた。しかし家を出る際、隣の老人が庭を弄っているのが見えた。反射的に右の頬に手を当てる。もうすっかり腫れは引いていた。

再びあの拳骨をくらうのはゴメンだった。小雨の降る中、アゲハは急いだ。

アゲハの顔の左側面には赤い蝶の形を模した髪留めがある。学校では、髪を纏めるものは黒または茶色のゴムか、髪留めはあまり華美でないものを使用すること、となっている。アゲハの物は思いっきり校則違反だが、そんなことは物ともしないアゲハは堂々と付けて行った。教師は注意するものの、アゲハの持つ事情を知る者はあまりキツイことは言わなかった。因みに校則による男子の髪の長さ的にも勿論認められてはいない。

進学校ではないが、比較的真面目な生徒が多かった。派手な見た目の生徒も居るが、少数派だった。そんな中でアゲハは浮いた存在だった。クラスには仲の良い生徒は一人も居ない。どうにか遅刻寸前に教室に入り、アゲハは自分の席に着いた。誰一人として声をかけず挨拶すら交わすことはなかった。

始業のチャイムが鳴り、騒いでいた生徒たちも銘銘の席に戻る。暫くたって現れたのは、アゲハのクラスの担任ではなかった。

これがアゲハにとっての一大事件の始まりだった。

担任が交通事故にあい、約一か月の入院を余儀なくされることになったのだ。代わりにやってきた教師がそう端的に告げた。問題はその後である。その間クラスを受け持つことになったのは、定年を間近に控えた学校一厳格なことで有名な教師だった。

アゲハの夏休みの課題は今もまだ真っ白なままだったので、勿論提出することは出来なかった。

「一週間の猶予を与えるかわり、必ず最後まで仕上げて提出すること。わかったね」
教師はそう言うと、アゲハの背中をぽん、と叩いた。引き延ばし作戦は通用しそうになかった。
そのシャツの裾から伸びた、しわしわの腕はよく日に焼けて、力強く見えた。アゲハは自分と老人はきわめて相性が悪いと思った。
昼休みになった。アゲハは一人、屋上で煙草を吸っていた。時々見回りにくる教師の目を盗んで、白い煙を吐き出す。雨はもう上がっていた。
「アゲハ！」
誰かに呼びかけられて、アゲハが思わずびく、として振り返る。そこには大きなビニール袋を下げた生徒が立っていた。夏服ではなく、長袖のシャツを着て、背丈はアゲハと同じくらいの少年だった。
「マナ」
マナはアゲハに、にいっと歯を見せて笑った。
彼はこの学校で唯一ともいえるアゲハの友人で、隣のクラスに在籍していた。アゲハは吸っていた煙草をコンクリートに押し付けて消した。
「サイテー」
マナがからかうような声で言う。
午前中は雨が降っていたこともあり、昼休みを屋上で過ごそうと考える者は他には居ないようだった。
アゲハは祖母に持たされた弁当の包みを屋上まで持ってきていたが、食欲がなく正直持て余し気味になっていた。外の空気を吸えばまた違うかと思ったのだが逆効果だった。雨上がりの臭いが食欲を完全に消し去ったうえ、吐き気すら催してきた。
祖母の作る弁当の中身は老人の好みに傾いていて、アゲハはあまり好きではなかった。忙しいなか持たせてくれたことを思うと申し訳ない気持ちになるので、残して帰ったことはない。それにはマナが一役買っていた。

「やっぱりここに居た。アゲハ、一緒に弁当食べよう！」
マナの提げているのは総菜パンの入ったビニール袋だった。マナはアゲハを捜して屋上へとやってきたらしい。
陽に当たり、乾いているコンクリートの上に2人は並んで座り込んだ。マナがビニール袋の中をごそごそと探り、アゲハにイチゴ牛乳を一つ差し出した。
「あげる」
「ありがとう」
マナが袋を地面に置いて、中からメロンパンを取り出した。ビスケット生地の中にチョコチップが混ぜ込まれたタイプのものだ。包装を破くと、一口齧った。
アゲハは貰い物のイチゴ牛乳にストローを突き刺した。甘い匂いがしてきて、アゲハの弁当には合わなそうに思えた。
マナはパンを頬張りながら、それこそ満面の笑みを浮かべていた。マナはパンが大好きだ。特に好きなのがチョコチップの入ったメロンパンだった。
アゲハはマナが半分くらい食べた頃になってようやく包みを開いた。ご飯の上には、梅干しが一つ。だし巻き卵や里芋の煮付け、金平牛蒡、甘く煮付けた煮豆。メインのおかずは焼き鮭だった。アゲハは卵焼きを一つ箸でつまむと、その半分を口に入れた。やや甘い味付けがしてあった。
アゲハはもう半分をつまんで、マナに向けて差し出した。パンを齧っていたマナが卵焼きを口に入れた。
「おいしい」
マナはまたにっこりと笑った。
メロンパンを半分残しておき、マナは今度は袋の中から焼きそばパンを取り出した。アゲハは里芋を箸で突き刺すとマナに食べさせた。マナはパンを食べる合間にアゲハの差し出す弁当のおかずを口にした。そのお礼代わりにアゲハはツナサラダのサンドイッチをわけてもらった。

甘い煮豆をマナが口に入れる。
「アゲハのばあちゃんの味付け、俺すきだよ」
マナはそういって笑った。彼は少々すきっ歯の、愛嬌のある顔立ちをしていた。笑うことで周りを幸せな気分にさせるような、そんな雰囲気があった。
アゲハは殆ど梅干しだけで白米部分を平らげた。カガリ程ではないものの、アゲハも魚が苦手だった。喉の奥にしつこく残るあの生臭さが嫌いなのだ。孫の食育に、祖母は例え嫌いな食べ物だとわかっていても弁当のおかずに詰め込んだ。マナに処理させていることなど思いもしない祖母は、弁当箱に詰めれば気分が変わってアゲハが食べてくれるのだと信じ込んでいる。
味付け自体はごく普通でけしてマズイわけではなかった。アゲハはイチゴ牛乳でサンドイッチを飲み込んだ。隣ではマナが本日2本目となる500mlの牛乳パックにストローを突き刺していた。
「アゲハ、夏休みの間行方不明になってたって本当？」
マナがそう訊いてきた。アゲハの家出のことは、隣のクラスの間でも噂に上っていたらしい。流石に本人のいるクラスでは誰も話題にしていなかったが。
アゲハはうん、と頷いた。
「アゲハ、何か隠してるよね」
カレーパンを齧りながらマナが言う。アゲハはため息を吐いた。マナが真剣な目を向けている。
「うん、正確に言えば、誘拐されてた」
「え！」
マナは意外な言葉に驚いた声を上げた。
「え、え、誘拐ってマジ？アゲハ大丈夫だったの？」
「大丈夫じゃなかったらここにはいないよ」
「そんなの全然ニュースにもなってなかったよ？どうやって逃げてこれたのさ」
「まあ、なんだか妙な人でさ、普通の誘拐犯とかとはちょっと違っ

てたんだ。よくわかんないけどヘンタイで、僕に首輪を嵌めて鎖で繋いでたんだけど別に何もしてこなかったな。その人の知り合いの人が僕を見つけて解放してくれたんだ。じゃなかったら案外今でもそこに閉じ込められてたかもね」

マナは食べ終わったあとのゴミをまとめてビニール袋に押し込むと、アゲハに向き直った。

「ねえ、何があったか教えてよ、すっごい興味ある。そのヘンタイって男？それとも女？」

マナの目は好奇心でキラキラ輝いて見えた。アゲハはふう、と息を吐いた。ただ誰にも話すことが出来なかったので、どこか誰かに打ち明けたい気持ちは持っていた。何から話せばいいのやらとアゲハは思った。

マナとの付き合いは今年に入って、彼が転校してきてからだったのでまだ日は浅いのだが、アゲハはマナを十分信頼していたしそれはマナも同じだった。２人の間には秘密などなにもなかった。２人とも、お互いより他に友人が居ない。

マナは幾度となく転校を繰り返してきた所為で上っ面だけの付き合い方を覚え込んでしまっているのだ。その人懐っこい笑顔でもってアゲハと違い周りの人間に溶け込むことは出来るようだったが。彼が本心を見せるのはアゲハに対してだけだった。そしてそれは、誰も知らないマナの持つ秘密を、アゲハが偶然知ったことによる。

それで、マナはアゲハが酒を飲んでいることも、煙草を吸うことも知っていた。咎めるようなことは言わなかったし、勿論教師に言いつけるようなこともしない。悪事を共有する、という一種の秘密めいたことが単純に少年の心を掴んでいた。

マナはポケットから出した飴玉を一つアゲハに渡して、自分も口に入れた。アゲハの手の中に緑色の包装で両端を捩じった飴玉が転がった。口に入れると、メロンの味と匂いがした。

「……４丁目で僕が、いつものおっちゃんの店で飲んでたんだ。そこじゃ子どもにでも酒を飲ませるってんでよく問題にされてんだけ

ど。その日はばあちゃんとちょっと言い合いになってたから、もともと家に帰るつもりもなくてしばらくどっかぶらぶらしてこうと思ってさ。おっちゃんはパチンコで大儲けしたとか言っててご機嫌だった。

僕はもういらないって言ってんのに飲ますもんだから気分悪くなってさ、店を出てからの記憶が抜けてる。んで、次に目を覚ました時にはどっか知らない人の家で寝かされてた」

「その知らない人がヘンタイさんだったの？」

マナはイチゴ味のポッキーを進めてきたが、アゲハはまだメロンの飴玉が口に入っているので断った。マナは自分のイチゴの飴玉は、口に入れるなり噛み砕いた様子だった。

「そう」

「でも何にもされなかったの？」

「うん。その人、僕のこと見てるのが好きなんだって。なんで連れてきたのさって言ったら、部屋に花を飾る代わりに僕を置いておきたいんだとさ」

「……なんか、残念な人だね、すごく」

アゲハはセイの事を思い浮かべてくす、と笑った。

「性格はちょっと理屈っぽいけど、なんか男の人にしては美人っていうかさ、作り物みたいな顔してた。動く人形と暮らしてるみたいだったよ。ご飯とか全然食べないでお酒ばっかり飲んでたな。だからもう腕なんか掴めそうなくらいガリガリなの」

ご飯、という単語にマナが反応した。その目が少し動揺している。アゲハはそれには気付かなかった。アゲハはセイの事を話すのが楽しくなってきていた。セイの持つ強烈なキャラクターは、今思い出す過去になってからはほとんどエンターテイナーに近いものがある。

「その人、子どもが居てさ、その子がすっごい可愛いんだ。僕あの子欲しいな、一緒に暮らせたらきっと人生楽しいだろうなあ」

「アゲハ、子ども好きじゃなかったよね？」

マナが不思議そうに言った。

「あの子は別だよ」
「アゲハ、その人と結婚しちゃえばいいんじゃない？」
マナの言葉にアゲハはびっくりして、危うく飴玉を吹き出すところだった。勢い余って噎せこんだ。
「マナ、それマジで言ってる？」
「うん、わりと本気。だってそしたらアゲハはその子と暮らせるんだし、アゲハは子ども産まなくたっていんだし、丁度いいんじゃん」
「止めて下さる？そういう冗談」
「えーいいと思うんだけどなあ」
「だったら今度会ったらマナを紹介してあげるよ」
昼休みの終了を告げるチャイムが、会話を一時中断させた。まだ話し足りない2人は午後の授業をサボることに決めた。アゲハは数学、マナは英語だった。お互いそうでなくても受けたくはない教科だった。マナは、自分はまだ日本語すら不自由ですから！という持論を持っていた。
アゲハはぼんやりと青く晴れた空を眺めていた。少しの沈黙の後、ふと見たマナの顔色が、真っ青になっているのにアゲハは気付いた。
「マナ、」
マナがアゲハを見つめている。涙目になっていた。
「1人で大丈夫？」
マナが頷いた。
屋上を降りて、誰も居ない空き教室の棟を歩いた。その端にあるトイレは、滅多に人が通らない。
アゲハはマナに肩を貸し、近くまで一緒に歩いた。個室の中で、マナが嘔吐する音が聞こえてくる。苦しそうな声が時折混じり込んだ。その声を紛らせる為にアゲハは水道の蛇口を思い切り捻った。水が勢いよく放たれ、ざあざあと響いた。
マナはまるで何かに取りつかれたかのように食べ物を口にする。アゲハはマナの昼食が、セイの何日、いや何か月分に当たるのだろうかと頭のどこかで考えていた。マナは食べ過ぎが元で吐き気を誘

発し、結局は詰め込んだ食べ物を全て吐き出してしまう。胃の中はからっぽで、それでまた何かを欲しがるという悪循環だ。
セイに負けず劣らず、マナの体も折れそうなくらいにガリガリだった。それが長袖を一年中着用している理由の一つだった。

#16：空を飛ぶ夢

マナの用事が済んでから、まだ青白い顔をしていた。アゲハはマナが顔を洗い終えるのを待ってから言った。水道の蛇口がキュッと閉められる。

「保健室に行く？」

マナは首を振った。

「あのおっちゃん嫌い。アゲハの方がいい」

マナは保健室にいる養護教諭のことがあまり好きではなかった。調子が悪いなんてのは甘えだ、と頭ごなしに決めつけて、余計に具合を悪くするのが常だからだ。

２人は再び屋上へと戻ることにした。もう雨は降らないようだ。雲の間に少し青い空が見えている。日陰に腰を下ろして、アゲハはマナにひざまくらをしていた。マナが眠たいと言い出したからだ。アゲハのすぐ下で目を閉じているマナは、愛玩動物のように可愛らしい寝顔をしていた。ほっぺたがふっくらとしていて、ほそっこい体つきとはアンバランスに見えた。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。マナは本格的な寝息を立てていたのでアゲハは起こすことはしなかった。が、屋上では教室にいるよりも大きな音が響いたので、マナがうっすらと瞼を開いた。

「マナ、大丈夫？」

アゲハは言った。マナの顔色はいくらかマシになってきたように見える。

「ゆっくりしていこうよ。掃除なんて他のみんなでやればいいんだ」

アゲハは無責任な事を口にした。自分がそう言って悪者になっていれば一緒に居るマナの気持ちが安らぐからだ。

「いつもありがとうね、アゲハ。……アゲハには俺がついてるから、大丈夫だよ」

アゲハはマナの言っていることの意味がわからなかった。アゲハはうん、と返事をとりあえず返した。体を起こして、マナがアゲハと向き合う。
「アゲハはいつも一人で居るの、寂しくならない？」
マナの目は真剣だ。アゲハはうーん、と唸るような声を上げた。
「一人で居る方が気が楽だよ」
マナはその答えにうーん、と呟いた。それから立ち上がった。
「帰ろう」
マナが差し出した手をアゲハは握り返した。
「さっきの、マナのことをうっとうしいって意味じゃないから」
アゲハが慌てて付け加える。マナはそれを聞いて声を上げて笑い出した。２人は教室には戻らず、校門を出た。アゲハは課題を持ち帰るのを忘れたことに気付いたが、どうでもいいやとそのまま家に帰った。
祖母は買い物にでも出掛けているようだった。家の中はしーんと静まり返っている。テーブルの上にメモがあった。アゲハは冷蔵庫から麦茶の入ったボトルを取り出し、コップに注いだ。冷蔵庫の中には他に惣菜の残りや、調味料の類が入っていた。冷凍庫を開けるとアイスクリームが入っていた。アゲハはセイの事を思い浮かべた。セイの家にある冷蔵庫には、あの日使いきれなかった分の食材が入れてある。
あれからセイは自分の為になにか料理を作っただろうか。いいや、とアゲハは首を振った。あるわけがない。アゲハは冷蔵庫の中で、食べ物がしなびて、腐り果てていく様を思い浮かべた。せめてそうならないうちに捨てておいてくれればいい、と思った。
学校から帰って、今は夕方の時間帯だ。セイはもう酒を飲んでいるだろうか。セイの家では正確な時間はわからなかったが、彼の飲酒が夜に限ったことでないのはわかっていた。セイがごく一般的な生活を送っている人間だとは思えないから別に構わないが。
テーブルの上にはせんべいの入った缶が置いてあった。アゲハは

一枚取り出すと、包装を開いた。せんべいを咥えて包装紙を弄り回し、一結びしてテーブルに置いた。

何だって、自分はセイのことばかり考えているのだろうとアゲハは思った。多分ヒマで退屈で死にそうだからだと思って、テレビのスイッチを入れた。アイドルが何かを喋っていた。チャンネルを変えた。小奇麗な顔をしたニュースキャスターがどこか遠くの地方で起きた土砂災害のニュースを読み上げていた。さっきのアイドルが歌を歌っていた。バラエティ番組で、スタジオ内が大笑いする様が映し出された。なにか美味しそうな食べ物が映し出された。次のニュースが読み上げられた。

辺りはもう暗くなりかかっていた。アゲハはテレビの中だけが騒がしくて、自分の周りはしん、としているのに気が付いた。孤独な自分の姿が浮き彫りにされる気がして、テレビを消した。無性に腹が減ってきた。アゲハの持っていた弁当は殆どマナが平らげたので。また缶を開けて、海苔の張り付いたしょうゆ味のせんべいを齧った。

いい加減せんべいに飽きたアゲハは冷蔵庫の奥から冷えたビールを取り出した。その足で暗くなっていた部屋の明かりをつけた。祖母はいつ帰ってくるのだろう。時計を見るともう6時を過ぎていた。ビールを飲み干すと空き缶を捨てて、代わりを補充しておいた。

がちゃん、とドアの開く音がして、祖母が家の中に入ってきた。両手にビニール袋を提げている。アゲハの顔を見て、祖母はどこかほっとしたような表情を浮かべた。

「ばあちゃん、おかえり」

「ただいま。アゲハ、もう帰ってたんかい。ごめんねえ、すぐご飯にするからね」

祖母はテーブルの上にあるせんべい袋の残骸を見て少し笑った。お菓子で空腹を凌いでいたらしい孫の姿に気が付いたのだ。

「お腹が空いとったんやね。ごめんねえ、隣のじいさんと話こんどったから、こんな遅うなって」

祖母はビールの事には気が付いていない様子で、買ってきたもの

の整理を始めた。いつもの習慣で、帰ってくるなり祖母はテレビのスイッチを入れた。再び騒々しい音声が流れる。アゲハは頬杖をついて画面をぼうっと見ていた。祖母はテレビをただつけるだけで、何か見たい番組があるというわけではない。アゲハはチャンネルを適当に変えてみて、何か面白いのを探してみた。

特になにもなく、結局は野球中継に収まった。贔屓のチームはなかったが、内容的には一番安定しているからだ。

晩御飯はすぐに用意されてテーブルに並んだ。しかしあまり食欲はなかった。さっき食べたせんべいと、ビールの炭酸が胃袋を膨らませているのだ。

「ごちそうさま」

アゲハは半分くらいで箸をおいた。

「アゲハ、弁当箱出しといてな」

「あ、ごめん。学校に忘れてきた」

「しゃあないなあ、明日は別のん使うから、ちゃんと持って帰ってな。家には3つはないよ」

「わかった」

アゲハは窓を開けると、煙草に火を点けた。ふう、と煙を吐き出す。

「お風呂沸かしたから、アゲハ先に入りーな」

祖母の声が聞こえてきた。

アゲハはエアコンにすっかり慣れてしまっていたので、家の中が蒸し暑くて仕方がなかった。もう寝てしまおうと布団に潜り込んだ。畳の匂いがする。暗闇の中、髪留めを外すと枕元に置いた。アゲハはすぐに眠りに落ちていった。

どこなのかはわからない、高い場所にアゲハは一人で立っていた。強い風が吹いている。何かの建物の屋上にいるらしかった。手すりの向こう側だ。

足場部分の面積は少なく、風にあおられて今にも落ちてしまいそうだった。アゲハは髪留めをつけた方の髪に触れてみた。そこに蝶は無く、ぬるっとした感触があった。手の平に血がべったりと付着していた。生温かい。痛みは感じなかった。血は止まることなく滴り落ちて、アゲハの足元を赤く濡らした。

ひゅう、とひときわ大きく風が吹き付けて、アゲハはバランスを崩した。落ちそうになったアゲハの腕を誰かが掴んだ。振り返ると、それはマナだった。マナの細い腕がアゲハの体を引っ張り上げようとしていた。

――アゲハには俺がついてるから、大丈夫だよ。

それは今ではなく、アゲハの記憶の中の声だった。マナが顔をしかめている。辛そうに見えた。マナの手が離れた。アゲハはどこかわからない屋上から落ちていった。

『ああ、嫌だなあ』

アゲハは地面に叩きつけられる衝撃に耐えるようにぐっと目を瞑った。しかし何時までたっても落ち続けるばかりで、その瞬間は訪れなかった。

不思議に思ったアゲハはそっと目を開いた。アゲハの体の周りに、無数の赤い蝶々の群れがひらひらと舞っているのが見えた。アゲハの体は宙に浮かんで、足元の闇に落ちていくことはなかった。何が起きているのかアゲハにもわからなかった。見上げてもマナの居る屋上は見えなかった。

すぐ目の前の側面から、窓が開いた。そこから浮かんでいるアゲハに向かって手が差し出される。赤い蝶がその指に留まった。

アゲハが顔を上げた。そこにはセイが、手の先にアゲハチョウを留まらせて笑っていた。

暗闇の中でアゲハは目を覚ました。イヤな夢を見たのだということに気付いた。背中に汗をぐっしょりとかいていた。

#17：マナの家

あれからもう一度寝直して、アゲハが目を覚ますと7時を過ぎていた。
「アゲハ、早よう起きんと遅れるよ」
祖母の声が聞こえる。頭をがりがり掻きながら、アゲハは洗面所に向かった。朝ごはんと弁当の用意がしてあった。家を出なければ間に合わない時間になっていたが、アゲハは開き直って朝ごはんを食べ始めた。朝の情報番組の最後で星占いのコーナーがあった。興味はなかったが、最下位がおとめ座だと知ってアゲハは思わず噴き出した。セイはテレビを見ないからそんなことは知らないだろう。パンを食べ終えると、弁当だけ持って家を出た。
遅刻を注意され、昨日の午後からサボったことも上乗せして教師に叱られたので朝からアゲハの機嫌は悪かった。気晴らしに昼休みを屋上で過ごすことに決めた。丁度マナが迎えにやってきたので、連れだって歩いた。マナはまたずっしりと重そうなビニール袋を提げている。
「アゲハ、今度の土曜日ウチに遊びに来ない？新しいゲーム買ってもらったから一緒にやろう、なんなら泊まってってよ」
アゲハはうーん、と声を上げる。
「どしたんさ？」
「いや、僕当分の間外泊禁止。まあしょーがないけど」
「厳しいなあ」
マナは諦めきれず、どうにかアゲハを誘い出す術を考えている。
「大人しく週末まで過ごしたら大目に見てもらえんじゃない？」
「まあ、そういや期限、来週の月曜だし。大人しく課題でもやってるよ」
「そーだ、アゲハ、課題一緒にやるからって言えよ。そしたらばあ

ちゃんも許してくれるんじゃね？」
マナは良いことを思いついたと、目をキラキラさせて喋った。アゲハは考えとく、と言って箸で摘まんだ人参の煮付けをマナに食べさせた。
祖母は、行先がちゃんとわかっているならいいと言ったので、アゲハは電話してそう伝えた。受話器越しにでもマナがどれだけ喜んでいるかがわかった。アゲハはカバンにまだまっさらのノートを放り込んだ。アゲハはマナの家に遊びに行ったことが無いので彼の両親に会うのはこれが初めての事だ。どんな人たちだかは知らない。息子が付き合う友人が、あまり素行が宜しくないとわかると嫌な思いをさせてしまうので、アゲハは煙草の箱をカバンから取り出し、引き出しに仕舞い込んだ。蝶々の髪留めについては、しばらく考えた後、そのまま付けて行くことにした。

スーパーで待ち合わせて、アゲハはマナと買い物をした。マナはお菓子の守備範囲が広く、甘いものも塩辛いものも一緒くたにカゴに入れていた。大勢の集まりか、一ヶ月分のまとめ買いのように傍目には見えただろうが、アゲハはこの週末にマナと2人で消費するだけのものであることを知っていた。ともすれば追加の買い出しもあるかもしれない。
マナの家は父親の仕事柄引っ越すことが多いとかで、今は小ぢんまりしたマンションの一室に3人家族で暮らしていた。中に案内される。両親共に今は仕事で留守らしかった。家の中は明るく、綺麗に片付いていた。花瓶に活けられた生花を見た時、アゲハには複雑な思いが過ぎった。
マナには自分の部屋が与えられていた。その中には自分専用のテレビと、それに繋げられたゲーム機が置いてあった。一応のたしなみとして課題のノートを開く。マナがそれを一度裏返しにした。
「アゲハ。とりあえず先に名前くらいは書いときなよ」
根性で数ページを殴り書きで埋め、ギブアップしたアゲハとマナ

はテレビのスイッチを入れた。マナがポテトチップスの袋を取り出し、うす塩とコンソメ、のり塩の3種類一気に包装を開けた。
「そーいや、アゲハん家の猫可愛いよな。ここ、動物はダメなんだ。母さんも残念がってるけど」
「アイツは飼ってるんじゃないよ。ノラ猫。ばあちゃんが餌付けしてんの。バレたら怒られるんだろうけど」
アゲハの家には白い猫が一匹、夕食時分になるとフラリと寄ってくる。野良なのに間違いないが、どう見ても真ん丸に肥っていた。餌を与える人間は祖母だけではないと考えられる。
「夕ごはんが焼き魚の時はさ、ミー助にあげるんだっていって残すんだ。居ると便利なんだよアイツ」
「ハハ、なんか俺みてーだな」
テレビにはまだ幼い顔をした少女が映っていた。アゲハは特に興味はなかったが、数人でグループを組んだ少女達が歌っているのを見ていた。アゲハに彼女たちの見分けは付きそうになかった。
「アゲハはこの中じゃ誰が好き？」
課題から目を逸らしテレビを見つめているアゲハにマナが言った。傍目には好んで見ているように映るらしい。マナがさっきから食べ散らかしているポテトチップスを摘まみながら、一番端っこ、とアゲハは言った。
「どっちの？」
「うーん、右」
「あの髪の長い子？」
「うんまあその子でいい」
「なんだよそれ！」
アゲハはコンソメ味のポテトチップスを摘まんで口に入れた。
「いいじゃん、マナはじゃあどの子がいいのさ」
「……俺もあんまし興味ない」
そう言って、空になったうす塩味の包装をごみ箱に捨てる。マナはまだ、女の子よりもお菓子の方に興味を魅かれるようだ。アゲハ

と同い年で１６才にしては子どもっぽい思考の持ち主だ。口が塩辛くなったと言いながら、甘そうなチョコレートの包装を開けている。ビニール袋の中身は、早くも１／３位消費されていた。ふと気になってアゲハはマナに訊いた。

「マナの母さんって料理上手いの？」

うん、とマナは頷いた。

「すっごいウマイよ。食べたいもの言えば何でも作ってくれるし」

「そっか、いいなあ。マナっていっつも購買のパン食べてるからさ、弁当作ってもらってないんだと思ってた」

マナはジュースを一口啜り、気まずそうな顔をした。

「弁当は、お昼が来る前に食べちゃうんだ。足りないからパン買ってんだよ、うちの母さんには内緒だよ？」

「……ああ、そう」

アゲハは呆れた顔でそう言った。

マナは食べるのが大好きだ。マナと付き合い始めて、思い返せばいつでもマナは何かしら食べているような気がする。それがとても幸せそうで、アゲハは何も言えなかった。マナの両親は、そのことを知っているのだろうか。息子に与えている小遣いは、おそらくその全てが食べることに使われているのだということを、知っていないはずはないだろうとアゲハは思った。

マナには少し食べ物に対して執着心が強すぎるところがあった。アゲハは時々、マナが何かに憑りつかれているんじゃないかと思うことがある。あまりにも沢山詰め込み過ぎて、胃袋の許容量を超えてしまうとその全てを結局はトイレに行って吐き出すのだ。マナは吐いたものと涙と涎塗れでぐちゃぐちゃで、辛そうに見えた。

それはアゲハだけが知っているマナの秘密で、マナはアゲハが屋上で煙草を吸うことを知っていた。お互いが握り合っている秘密だ。それはあの屋上で偶然に出くわしたことによるものだ。アゲハは咎めるようなことは何も言わない。マナはただ、お腹が空いて仕方がないだけだ。そう思ったからだった。

「マナは食べるのが好きなんだね」
アゲハは言ってみる。マナは少し寂しそうに見えた。うん、と頷くと、ふっと微笑んだ。
しばらくして、ドアの開く音が聞こえた。マナの母親が帰宅したようだ。時計を見ると、5時を過ぎていた。
「ただいま。マナ、帰ってたの？あらお友達？」
マナの母親は、息子とよく似た愛嬌のある顔立ちをしていた。肩くらいまでの髪が柔らかくウエーブを描いた、まだ見た目の若々しい母親である。彼女はアゲハを見てにっこりと微笑んだ。
「あらあら、随分美人のお友達なのねえ」
「こんにちわ」
アゲハは軽く頭を下げた。
「母さん、アゲハはこう見えても男だからね。勘違いしないでよ」
「ええ！男の子だったの？それはごめんなさい、でも本当、アゲハちゃん美人だから見間違えちゃったわ。うちのマナがちんちくりんのおへちゃに見えちゃう」
「もー、母さん！」
マナの母親は息子が友達を連れてきたことに一人ではしゃいでいる。アゲハは見た目だけでなく中身も親子共そっくりだと思った。
「アゲハちゃん、よかったらウチで夕ご飯食べていかない？」
「母さん、アゲハ今日俺の部屋て泊まってくことにしたんだ、いいよね？」
「あらそうだったの。アゲハちゃんのお家の人には言ってあるの？だったらいいわよ。狭くて散らかってるけど、ゆっくりしていってね。それじゃあマナ、母さんご飯の支度してくるから。お腹が空いたら冷蔵庫の中におやつ入れてあるからね」
やたらとテンションの高い母親だ。マナをぎゅう、と抱きしめてから背中を軽くぽんぽん叩いた。マナは構われ過ぎるのに少々うんざりした様子だった。マナは冷蔵庫から冷えたプリンを取り出すとアゲハを連れて自室へと戻った。

マナの（お腹が空いたら）食べるはずのプリンは、母親の手作りのものだった。店で買ってきたもののように美味しかった。入れ物が家庭で使われているガラス製でなければ気付かなかっただろう。
「どしたの？」
マナが言った。アゲハは自分がぼうっとしていたことに気付いた。掬ったままのプリンを落としそうになった。ついいつもの癖でマナにスプーンを突き出し、マナはそれを食べた。
「ううん。母さんが帰ってくるっていうのがさ、不思議な気分だったんだ。僕にはばあちゃんしか居ないからさ」
「アゲハ、寂しくない？」
マナはまた同じことを呟いた。暗い顔をしている。
「うん、もう慣れた」
ドアをノックする音がした。
「マナ、開けていい？」
「うん」
ドアが開く。現れたマナの母親は、エプロン姿でその手に包丁を握りしめていた。
「うわ！」
マナがびっくりして声を上げた。母親も自分で気が付いて、慌てて包丁を落としそうになった。
「ごめんなさいっ！私ったら慌てて来たもんだから！そうだアゲハちゃん、食べられないものってない？私訊くの忘れてたって料理してる途中で思い出したの」
「母さん慌て過ぎ。もうちょっと落ち着いたら」
母親はしょげて、もう一度ごめんね、と言った。
「うん、僕ならなんでも大丈夫だよ」
アゲハはにっこり笑って言った。顔を上げた母親も笑顔になった。マナと同じで愛嬌たっぷりの笑顔だ。
「ありがとう！ほんと、よかった。じゃあもうちょっと待っててね！」

ドアを閉めると、パタパタと廊下を走り去るスリッパの音が聞こえた。
「ウチの母さん、慌て者なんだよ」
マナが呆れた声で呟いた。
夕食が出来たとの声が掛かり、2人はキッチンへと移動した。母親が料理をテーブルに並べている。
「お父さんは仕事で遅くなるからね、先に頂きましょう」
テーブルの上にはハンバーグとサラダ、ミートソースのスパゲティ、器に盛られたチキンライス。エビフライとから揚げとポテトフライが山盛りになっている。春巻きや餃子や麻婆豆腐などの中華や、和風の野菜の煮付けもあった。それに味噌汁とコーンスープ。デザートにガラスの器に入れられたフルーツのシロップ漬けがあった。それらがテーブルの上一杯に所狭しと並べられていた。和洋折衷、壮絶な取り合わせだ。
「アゲハちゃんが食べられないものはないってわかったんだけど、好きなものを訊くのを忘れちゃって。私って慌て者よねえ。だからマナの好きなものいっぱい作ってみたの」
「はは……」
アゲハは笑うしかなかった。父親を含めて4人分の夕食の量にはとても思えなかったからだ。いや、父親の席であろうスペースの前には、冷奴と焼き魚、お浸しなどの惣菜が別に用意されている。
「マナ、誕生日みたいだね」
「いつもこんなんだよ？」
マナはにっこり笑うと、さらっと答えた。
出された料理は皆とても美味しかった。一品だけ様子の違う和風の煮物は、おそらくマナに野菜を食べさせるために盛り込まれたおかずなのだろう。スパゲティを見ると、アゲハはセイの事を思い出した。ミートソースのかかったスパゲティは、店で食べるものみたいに美味しかった。改めてアゲハは自分がセイに食べさせたものの事を思った。あれをスパゲティと呼ぶのは大分おこがましい。

アゲハの隣でマナが空になった器にチキンライスをお代わりして貰っていた。リクエストによりそれはオムライスへと進化を遂げる。とろとろしたタマゴの上に、母親がケチャップで花を描いた。
「美味しいかな？」
アゲハに母親がそう尋ねた。アゲハはうん、と頷いて答える。
「良かった！アゲハちゃんも遠慮なんかしないでいっぱい食べてね！」
アゲハはもう一度うん、と大きく頷いた。マナほどではないが、料理はどれも美味しかったのでアゲハの食も進んだ。少々、おやつのポテトチップスとプリンが胃の中で主張している気もするが。しばらくして、マナの父親も帰って来た。
「ただいま。どうしたんだい、マナのお客様？」
父親は背の低い、人のよさそうな顔をした小太りの男だった。
「お邪魔してます」
アゲハは父親に挨拶した。父親はアゲハに微笑みかけた。
「マナのお友達かい。仲良くしてやってね」
父親は自分の席に着くと、マナの頭を撫でた。マナがケチャップに塗れた顔を上げた。
「マナ、いいお友達ができてよかったなあ。父さん、マナにお土産買ってきたんだ。丁度良かった。後で食べよう」
父親はそう言って、ケーキの箱を母親に渡した。母親はそれを冷蔵庫に仕舞うと、代わりに冷えたビールを取り出す。アゲハは内心そのビールが羨ましかったが、黙っていることにした。マナの両親とも、マナが美味しそうに食べるのを見て幸せそうに微笑んでいた。アゲハの隣でマナが美味しそうにから揚げを頬張っていた。
食卓でテレビは点いておらず、一家の穏やかな会話だけがしている。アゲハにはマナの両親が、どれだけ息子を大事に思っているかが傍から見ていてもよくわかった。2人ともマナに美味しいものを食べさせるのが好きな様子だった。アゲハはマナがあまりにもよく食べるので、少しだけ心配になった。また具合を悪くしやしないか

と不安になった。
幸せそのものの夕食風景に、アゲハはどこか違和感を感じ始めていた。

#18：もう一人の自分

マナの母親が調理場に戻ってなにやら準備している。夕食が終わり本格的な晩酌モードに切り替わったようだ。マナはアゲハに部屋に戻るように言った。

「後でお茶持って行ったげるからね。でもアゲハちゃん、マナの部屋で寝られる？狭くないかなあ」

「大丈夫だよ」

マナが答えた。

「そうそう、明日はお父さんの用事で朝早くから出掛けなくちゃならないの。日曜日だし、ゆっくりしてって。朝ごはんは用意しておくからね」

「うん、わかった」

マナの部屋の隅には異様なものが一つだけある。蓋の着いた青いポリバケツだ。アゲハはそれが何のためにあるものなのかを知っていた。マナの両親は知っているのか、知らないでいるのかはわからない。薄々は感づいているのかもしれない。随分と食べさせ甲斐のない息子だと思っているだけかも知れなかったが。アゲハはマナの背中をさすってやりながら、ネジが一本外れたような能天気な母親のことを思い出していた。

マナは何かの病気なのには違いなかった。アゲハが酔った勢いで嘔吐するのとは全然別のものだ。こんなに苦しい思いをするまでどうしてマナは食べ過ぎるのだろう。アゲハは思った。マナは食べるのが好きなだけなのだ。アゲハはマナが、何か食べる時に本当に幸せそうな顔をする、その顔を見るのが好きだった。そんなに好きなら、メロンパンは一つにしておけばいいじゃないかと思った。マナもセイも、どうして食べ物とまともに付き合えないのだろう。

アゲハはマナが落ち着くまでの間、何時ものようにひざまくらを

して背中をさすってやっていた。マナの目から、また涙が一筋流れてぽた、と落ちた。
「アゲハ」
マナが呼びかけてくる。その声が掠れていた。
「どしたの」
「アゲハは俺のこと意地汚いって軽蔑する？」
「僕はそんなんでマナのこと嫌いになったりしないよ」
マナが目をごしごしと擦った。そして、にっこりと笑った顔を上げた。
「ありがとう」
「ほら、顔洗ってきなよ」
「うん、」
よたよたした足取りでマナが部屋を出て行く。見送りながら、タオルを濡らして持ってきてやったら良かったか、とアゲハは思った。しばらくして戻ってきたマナは、すっかり元の調子に戻っていた。
2人ともシャツ一枚になってマナのベッドに潜り込んだ。
「やっぱちょっと狭苦しいな」
「へーきだって。マナ、そんなに気使わなくったっていいよ」
マナは部屋の灯りを落とし、小さなライトを点灯した。オレンジ色の灯りで部屋の中がぼんやりと照らし出された。
「そういやさ、昨日夢にマナが出て来たよ」
「へえ、どんなの？」
「それがさ、やな夢だった。僕が屋上から落っこちそうになったのをマナが助けようとしてくれたんだけど、ダメでさ。そのまま高い所から落ちたんだ」
「ええー」
幼い頃の経験が影響しているのか、アゲハは高所から落ちる夢を見ることが多かった。夢の中では赤い色の印象が強くて、その他の物は白黒の映像に見えた。べち、と地面に叩きつけられた瞬間は、痛みを感じていたような気がする。目を覚ました瞬間に忘れるので

はっきりとはわからない。朝は決まってイヤな汗をぐっしょりとかいていた。
マナがアゲハにぎゅうと抱きついてきた。
「アゲハが落っこちないように、今日は俺がしがみついててあげるよ」
「……気持ちだけで十分だよ。暑いし」
マナは笑って、エアコンの他に扇風機のスイッチを入れた。
「ああ、昨日はなんでか知らないけどさ、地面までは落ちなかったんだ。空飛んでるみたいに浮かんでさ、足が付かなくて変な気分だったよ。そしたら目の前の窓が開いて、そこにセイがいた」
「セイ？」
「ああ、僕のこと誘拐してた人」
「そのセイって人が助けてくれたの？」
アゲハは首を振った。
「何か知らないけど笑ってるだけだったよ。久し振りに見たよセイの顔」
「なあアゲハ。アゲハはやっぱりその人のこと愛しちゃってるんじゃないの？」
「冗談でもやめてくれよ、気色悪い」
「じゃあ、明日は何して遊ぼっか」
マナはそう言って話題を変えた。マナの中ではもうすっかりアゲハが泊まりに来た理由を忘れてしまっているようだ。アゲハもそんなことはどうでもよかった。叱られるのは慣れっこなのだ。
気が付くとマナはもう眠ってしまったようだった。アゲハも髪留めを外して、目を閉じた。マナと居ればイヤな夢を見ないような気がする。部屋の中は人工的な花の匂いで満たされている。消臭効果を含むその匂いは強力に嫌な臭いを誤魔化していた。
朝はゆっくりしていていいと言われていたが、ふと時計を見るともう9時を過ぎていた。
マナはまだ軽く寝息を立てていたが、アゲハが体を起こした振動で

目を覚ました。マナはまだ眠そうに瞼を擦りながら言った。
「お腹すいた……」
アゲハは朝の第一声がそれで、随分マナらしいと思った。
「アゲハ、俺も変な夢見るよ」
「変なのって？」
「うーん、ご飯食べてからにする。昔っからよく見るんだ」
テーブルの上には和食と洋食の2種類の朝食が並べられていた。マナの母親はそれが2人分のつもりで作ったのだろうかという量である。昼食を兼ねたものだとも考えたが、おそらくそれはないだろう。アゲハは昨夜、昼ごはんは何がいいかとの質問を受けたことを思い出した。
『ごめんねアゲハちゃん、朝はパンが良かった？それともご飯がいいのかしら？私ったら聞くのを忘れてたから、どっちも用意しておいたの。マナの好きなもの、いっぱい作っといたからね！』
アゲハはマナの母親があの能天気な声でもって、そう言うのが難なく再生できた。堪えきれずに吹き出す。マナが不思議そうな顔をしてアゲハを見ていた。
「マナは本当に食べるのが好きだね」
アゲハは向かい合って座ったマナが、朝から例によって大量にパンを食べるのを見つめていた。アゲハはトースト一枚を食べたきりだが、見ているだけでお腹が一杯になりそうだった。なんだかテレビでこんなタレントを見たことがある気がする。マナは少しバツが悪そうな顔をした。
「いいんだよ、マナは。ちょっと控えめにすればいいかなとは思うけど」
マナは食パンにハムとチーズを挟んだものを一口齧った。
「お腹がすいてたら、何か自分が消えてなくなっちゃいそうな気がするんだ。アゲハはそんなことない？」
アゲハはうーん、と唸り、首を振った。
「俺さ、変な夢見たって言った。けどあれは、夢じゃない気がする

んだ。上手く言えないんだけど。……俺、自分が産まれる前の記憶があるんだ」
「それって、赤ちゃんだったころ？」
「そのもっとまえ。教科書とかに載ってるだろ」
アゲハは頭でっかちの、人間の胎児を思い浮かべた。
「……どんなの？」
マナが残りのサンドイッチを口の中に入れた。
「俺、なんだかあったかい所にいてさ、うとうとしてたんだ。居心地が良くってずっとここに居たいなあって思ってたんだ。ぼんやりしてたらどっかから声が聞こえてきた。目は見えないけど頭の中に映像が浮かんできた。今思えばそれ、多分今ぐらいの年の俺。そいつが浮かんでる俺に向かってこう言うの。『お前、産まれてきてもなんもないよ』って。そんだけなんだけど」
アゲハは想像出来ずにマナの顔をただじっと見つめた。心なしかその目が潤んでいるような気がする。
「俺さ、幼稚園の頃とか全然覚えてないけど、そのことだけは今でもはっきり覚えてるんだ。今朝見たのは俺が一人で列車に乗ってんの。がらがらで他に誰も乗ってなくて、真っ赤な座席に俺一人。そしたら向こうから俺が来てさ、やっぱりこう言うの。産まれてきてもなんもないよって。それどういう意味か聞こうと思っても笑ってすぐどっか行っちゃうんだ」
マナは少し冷えかかったコーンスープを飲んで、もう一枚パンを齧った。アゲハはテーブルに置いてある苺のジャムを見た。赤黒くどろりとしている。結局はなにもつけずにそのままのパンを齧った。
マナがトーストしていないままのパンに、ハムやチーズを挟んだものを作っている。自分で好きにサンドイッチを作れるようにと用意がされていた。マナに野菜を食べさせようとスライスしたトマトやキュウリも置いてあった。パンの袋が空になった。たしか6枚切りの食パンが2袋ほどあった気がするのだが。息子の好物を母親はちゃんと知っているのだろう、テーブルの上にはその他にメロンパ

ンが3つ置いてあった。アゲハはぼんやりしていたが、ふと気が付いた。
　メロンパンを頬張りながらマナが泣いていたのだ。アゲハは食べすぎて苦しくなったのかと思って見ていたが、マナはまだメロンパンを齧っている。
「吐きそう？」
　アゲハが訊いた。マナは首を振った。涙がテーブルの上に散った。一つ目のメロンパンを食べ終えると、マナはもう一つの包装を開いた。
「最近、意味がわかってきた気がする」
　静かな声でマナが言った。
「どういう意味なの？」
「……わかんない」
　マナの言葉は矛盾ではないように思った。
　突然マナが顔を上げてアゲハに言った。
「なあ、アゲハ。俺死にそうなんだ。お腹が減った。何か食べないと俺はこのまま消えちゃう気がするんだ。そうだろ？アゲハ、お腹がすいたよ」
　マナはそう言って、ぼろぼろ泣き出した。泣きながらまたパンを齧った。マナはお腹がすいて死にそうなんだとアゲハに訴えたが、マナはすでにありえない量の食べ物を口にしていた。腹が減るどころか、もう何も食べられないんじゃないかと思う程だ。マナは一体何と戦っているのだろう。漠然とした恐怖心から逃れるために、大量に食べて腹を満たそうとするんだろうか。
　苦しい位に詰め込んで、そして結局は全て吐き出すのだ。最後には何も残っていなくて、空っぽで、マナの体はガリガリだった。アゲハはそれが単純に食べ物を無駄にする行為だとはどうしても思えずにいた。結果的には作ってくれた人たちに対して申し訳ないことをしていると思う。ただマナは、どうしても欲しかっただけ。お腹いっぱいになりたかっただけなのだ。それだけのことだ。お腹いっ

ぱいになりすぎて吐いてしまうのだ。アゲハにはマナ自身もそれに罪悪感を感じているのがわかった。
アゲハはいつものようにマナの背中をさすってやりながら、自分にはこの他に出来ることがないものかと考えていた。青い容器の縁を掴んだマナの腕の、骨ばった手首を見ていた。
アゲハはもう一人、同じような腕の持ち主のことを知っている。

いつだったか、セイがアゲハに言った。
「ねえアゲハ。どうして完全に、この世界から僕は消えてなくならないのかな？」
アゲハはまたセイが下らないことを言っているなと思った。
「どうしたの？セイは消えてなくなりたいの？」
セイがうーんと唸るような声を出す。自分の手首を触りながら。気味が悪い位に細かった。
「セイはこのまま何も食べなければ望みどおりになるよ。燃やされて灰になっておしまいだよ」
「だってさ、骨は残るじゃない」
アゲハはまた生々しいことを、とセイを睨みつける。
「ねえアゲハ。僕たちは本来、とても小さな細胞の一つだったはずだろう。ほとんど何もないくらいにさ。それがどうしてこんなに大きくなったんだろう。どうして、この世界に骨を残して体は消えていくのかな。それが何故なのか、考えたことはある？」
アゲハは首を振った。
「いつも思うんだけど。君の考えることはたいがい気持ち悪いね」
セイは笑った。
「無意味なものを残していくのが気がかりなだけだよ」
「じゃあ、セイは理科室にある骨格標本に使って貰えばいいよ。有意義だろ」
セイはそうだね、と言ってまた少し笑みを浮かべていた。

#19：形あるものはいつか壊れる

アゲハはまだ半分以上真っ白なままのノートを手に大きなため息を吐いた。あれからまたマナの具合が良くなったので結局はゲームをしたりして過ごし、課題には手を付けずじまいに終わった。家に帰ってからアゲハは自力で数ページを埋めた。時計を見て、早々に諦める。一晩で仕上げられるとは思えなかったからだ。再び鞄に仕舞い込むと部屋の灯りを消した。

翌朝、顔を見るなり課題の提出を求めてきた教師に、アゲハはそのノートを出して見せた。意外なことに教師は少しでもやろうという姿勢を見せたアゲハを褒めた。

「何時まででも待つから、必ず最後までやりなさい」

教師はそう言ってノートを返してきた。長い闘いになりそうだ、とアゲハは思った。

アゲハは今日も昼休みの間中屋上で過ごした。マナはやってこなかった。約束をしたわけではないが、来なかったことは今まで一度もなかったので不思議に思った。風邪でも引いて休んでいるのだろうか。

帰り際、隣のクラスを覗いてみた。アゲハを見て、生徒たちが少し怯えたような顔をした。アゲハはケンカ等、乱暴をするような不良ではない。ただ派手な髪留めを付けて、皆に打ち解けず愛想が悪いだけだ。夏休みの件でどんな噂が流れているのか知らないが、全く失礼な話だ。

アゲハに一人の女の子が近寄ってきた。目が大きくて人懐っこそうな顔をしている。

「マナは今日お休みだよ」

「そう、ありがとう」

彼女はアゲハがよくマナと一緒にいる所を見ていて、そう察した

のだろう。アゲハは礼を言うと自分のクラスに戻った。
帰りにマナの見舞いに行こうとアゲハは思った。途中にあるコンビニで、マナの好きそうなものを物色する。食べ物ならどんなものでもマナは喜んでくれそうだが、具合が悪いことを考えて日持ちのしなさそうなものは避けた。目についたスナック菓子を適当にカゴに入れた。
マナの家の前まで来て、アゲハはインターホンを鳴らした。応答がない。部屋で寝ているのか、もしくは病院にでも行っているのか。寝ているのならあまりうるさくしたら邪魔だろうと、アゲハは引き返すことにした。お菓子はまた明日にでも渡せるだろう。アゲハは階段を降りた。
その途中、知っている顔とすれ違った。相手もアゲハに気付いた様子だった。
「アゲハちゃん、」
マナの母親だった。とても彼女の声とは思えない程弱々しい声で言った。目には涙が僅かに滲んでいる。
「マナの母さん、どうしたの？マナ、今日休んでるって聞いたからお見舞いに来たんだ」
母親はありがとう、と呟いた。明らかに様子がおかしい。
「マナ、どうかしたの？」
アゲハはなんだかイヤな予感がした。
「アゲハちゃん、時間ある？ちょっと上がっていかない？」
アゲハがうん、と頷くと母親は少しだけ笑顔になった。
「マナは、寝てるの？」
「ええ、」
アゲハは母親について家に入った。母親はアゲハに紅茶を入れて、手作りらしいクッキーをガラスの大皿に乗せたものを勧めた。
「お茶にしましょう」
アゲハは持っていたコンビニのビニール袋を差し出した。
「これ、マナに持ってきたんだ。具合が悪くて食べられないかもし

れないけど、マナがいっつも食べてるの選んだんだ」
「ありがとう」
母親はその袋を大事そうに受け取り、膝に抱え込んだ。涙が一筋流れて、テーブルの上に落ちた。
「どうかしたの？」
「ううん、ごめんね。でもアゲハちゃん、マナはもうお菓子を食べられなくなっちゃったの」
母親がそう言った。
「え？」
アゲハは驚いて母親を見た。
「どういうこと？マナどっか病気？」
「マナ、入院してるの……昨日の晩、急に具合が悪くなって。さっきまで普通にご飯食べてると思ってたのに、ふっと見た時には顔が真っ青になってて。なにか喉に詰まらせたのかと慌てたけどそうじゃなかった。救急車で病院に連れて行ってからそのまま、まだ意識が戻ってないの」
アゲハは背筋が寒くなった。昨日一緒に遊んでいたマナが、今日は病院のベッドの上だ。信じられなかった。何かの間違いだと思った。
「そんな、……でも、きっとすぐ良くなるよ、大丈夫だよ」
「……アゲハちゃん、マナはね、産まれて来た時からお医者様に言われていたの。この子は長いことは生きられないんだって。成人するまで生きられたらいい方だって」
マナの母親は静かな声で言った。アゲハは驚いて目を見開いている。信じられない、といった風だ。母親は続けて言った。
「原因はわからないけど、マナには生まれつき異常があるの。それを聞いたとき、私たちは目の前が真っ暗になったわ」
「そんな、マナはそのこと知ってるの？」
母親は首を振った。
「何かの間違いだって思いたかったの。マナは普通に生活出来てた

し、だから他の子と同じでちゃんと長生き出来るんだって、今までずっと自分に言い聞かせてきたんだもの。そうじゃないと可哀想で見てられなかった」

アゲハはマナが話した夢のことを思い出した。少年の姿で現れた未来のマナは、自分が長くは生きられないことを知っていたのだ。

「マナがいつ居なくなっても後悔しないように、私たちはマナに出来る限りの愛情を掛けてきたつもりだったの。あの子は食べるのが大好きだったから、なんでも欲しいだけ食べさせてた。アゲハちゃん知ってる？あの子、どこかおかしかったでしょう」

アゲハははっとした。そうして実は知っていて黙っていたことを告げた。母親はそれを聞いて、アゲハにごめんなさいね、と呟いた。

「アゲハちゃんにも辛い思いをさせてしまっていたのね。……私たちにはどうしたらいいかわからなかった。何がどうなってこんなことになってしまったのかわからないの。でも、本当は、マナを苦しめていたのは結局は私だったの。マナがご飯のときにあんまり幸せそうな顔をするから、それが悪いことだなんて言えなかった。あの子は長生きが出来ないんだもの」

マナはもう丸一日、病院のベッドに寝かされている。点滴だけで命をつないでいた。アゲハはマナがどんなにかお腹を空かせていることだろうと思った。

――アゲハ、お腹がすいたんだ。何か食べないと俺は消えてなくなっちゃうよ。アゲハ、お腹がすいたよ。

マナの声をはっきりとアゲハは思い出していた。

「お医者様はマナはもうダメだって。もうなにも美味しいものを食べさせてあげられないの。ねえアゲハちゃん、こんなのって信じられる？あのマナがもう何にも食べられないの。ねえアゲハちゃん、もうすぐご飯の時間なのにどうしてマナはここに居ないの？」

母親はそう言いながら泣き崩れてしまった。アゲハも目の前が真っ暗になったように思った。

暫くたって落ち着きを取り戻した母親は目元をそっと擦った。

「ごめんなさいね、みっともないところ見せちゃって」
そう言って少し微笑んだ。アゲハは何を言っていいかわからなかった。
「マナの母さん、元気出して。きっとマナは帰ってくるよ。そしたら大変だよ。お腹すいたって言って大暴れするよ。だから一杯美味しいもの作って、おやつ用意して待っててあげなきゃダメだよ」
「そうね、」
アゲハは言いながら、自分でもそれはありえないことに気付いてどうしようもなくなっていた。気が付くと自分も泣いていた。
「アゲハちゃんも、元気出してね」
返ってマナの母親に慰められる始末だった。
「僕、マナに会いたい。病院にお見舞いに行ってもいい？」
母親は頷いた。
「アゲハちゃんが来てくれたらマナはきっと喜ぶわ」
母親があ、と声を上げた。
「いけない、私色々必要な物を取りに戻ったところだったんだわ。今からでよかったら、アゲハちゃんも一緒に行く？」
「うん」
アゲハは頷いた。母親は冷え切った紅茶を一息に飲み干した。紙袋を提げた母親について、アゲハは病室に入った。サイドテーブルには花と、お菓子の入ったカゴがあった。
『そんなんじゃダメだよ、マナの母さん。全然足りないよ』
アゲハは心の中で呟いた。そんなものマナにしてみれば食べた気にすらならない量だ。実際には手付かずのままで減ることはなかったが。目を閉じたマナはただ眠っているだけのように見えた。ぽた、と定期的に落ちてくる滴だけで過ごしているマナの顔はたった一日だけで随分とやつれて見えた。寝たきりの老人のようにも見えた。痛々しい程に痩せている。
マナは寝たふりをして、アゲハを驚かそうと企んでいるのだと思った。アゲハがびっくりするようにタイミングを計っているのだ。

計りそこねて、起きられなくなっているのだ。
　アゲハは袋の中からメロンパンを取り出した。
「マナ、お腹がすいてるだろ、早く起きないと僕が食べちゃうよ？」
　アゲハは空しくなってきてパンを袋の中に戻した。そっと、管の通っていない方の手を掴んだ。
自分の熱で、マナの指先が冷たく感じる。アゲハはぎゅっと掴んだ指を温めるように何度も握り返した。もう帰る時間がくるまで、アゲハはマナに話しかけていた。何度か問いかけるようなことも言ったが、返事は一度も返ってはこなかった。
　結局メロンパンを持ってアゲハは家に帰った。もう真っ暗になっていた。出迎えた祖母が心配して声を掛けてきた。
「アゲハ、こんな遅うまでどこ行っとったんで」
「ごめんばあちゃん。友達が病気なの、お見舞いに行ってたんだ」
「うん、心配するで、電話でもしてな」
「うん」
「ご飯にしよか」
「ごめん、……あんまり欲しくない」
　アゲハは自分の机のある場所に移動した。袋の中から取り出したパンを見つめた。アゲハは甘いパンを食べないので、メロンパンを食べたことがなかった。包装を開くと、チョコレートの匂いがした。一口齧ってみた。口の中一杯に甘い味が広がる。アゲハはマナのようにあんな笑顔を浮かべることがどうしても出来なかった。それになんだか、やけにしょっぱい味がするのだ。おかしいなあ、と首を傾げながらアゲハはもう一口齧った。
　いつからか流していた涙がぽたぽたと机の上に落ちた。

#20：差し伸べる手

マナはそのまま、もう戻ってはこなかった。アゲハにはそれが現実の事だとは思えなかった。病院の屋上に上がり、手すりに凭れるようにして地上を見下ろした。少し足が竦む高さだった。ポケットから煙草を出して火を点けた。もう、吹き付ける風が冷たくさえ感じられる。正午を告げる鐘の音がどこかから響いてきた。

「アーゲハ、」

名前を呼ぶ声が聞こえた気がして、アゲハは振り返った。空耳だ。そこには誰も居なかった。

アゲハは握りしめていた煙草の箱を手すりの向こう側へと放り投げた。しばらくたって、軽い音が聞こえた。コンクリートの地面の上にゴミに紛れて落ちている。

どうして、人は飛べないのだろう。アゲハはなんだか空しくなった。自分の中で、涙はもう品切れになっているらしい。家に帰っても何もする気が起こらずに、アゲハは自分の机の置いてあるスペースでぼんやりしていた。そのまま夜になった。眠れずにただ布団の上で横になった。気が付いたときには朝が来ていた。学校に行く時間になっても、動く気にもなれなかった。結局行かなかった。祖母はなにも言わなかった。

その次の日も、アゲハは一日中布団の上で寝転がったままだった。学校には行きたくなかった。マナがもう居ないことをはっきり認めたくなかったからだ。昼ごはんの支度を整えた祖母が見かねて声を掛けてきた。

「何か食べんと、アゲハも死んでまうよ」

アゲハは空腹を感じてはいたが、何も食べたくなかった。

「……僕はこのまま消えちゃうのかな？」

祖母はアゲハの分の昼食にラップを掛けると、冷蔵庫に仕舞い込

んだ。
「アゲハが居らんようなったら、ばあちゃんも辛いよ」
祖母はそう呟いた。
ポケットを探り、そういえばとアゲハは煙草の箱を捨てたことを思い出した。まだ買ったばかりだった。惜しいことをしたと今更のように思った。夕方になって、祖母が言った。
「アゲハ、外に出てみい。気分がちょっとはようなるで。買いもんに行ってきいな、アゲハが自分で食べたいと思うもん買うてきい」
祖母はそう言ってアゲハに財布を渡した。気のりはしなかったが、アゲハは出掛けることにした。スーパーに向かう途中で、赤い車とすれ違った。アゲハはどこかで見たことがあるような気がした。その車はスーパーの駐車場で停車した。降りてきた女性には見覚えがある。
「久し振り」
「ミオ」
ミオはアゲハを見て、どこか悲しそうな顔をして微笑んだ。
「買い物かしら？」
「うん、ばあちゃんに言われてさ。ミオも何か買いに来たの？」
いいえ、と首を振り、ミオは何か考え込むように黙り込んでいた。しばらくたって顔を上げた。
「ごめんなさい、アナタの邪魔をするつもりじゃなかったんだわ」
「いいよ。自分の好きなもの買って来いって言われてるだけだから。ミオは僕に用があるんだよね？」
ミオはくす、と笑った。
「そうね。アナタの用事が終わったら、少し付き合って貰える？」
アゲハはうん、と頷いた。
「ミオも一緒に行かない？」
アゲハはミオと連れだって店内に入った。食欲がないのに食べたいものを、と言われても全く思いつかなかった。夕ご飯の材料を買ってこいと言われてはいないので、アゲハは出来合いの物を色々と

見て回った。パンの並んでいる棚を見た。一々マナのことを思い出すコーナーだ。メロンパンを手に取ってみた。しばらくうーんと考えて棚に戻した。アゲハはお握りとペットボトルのお茶をカゴに入れた。ミオに近寄ってみると、彼女はお菓子の棚の前にいた。そこは飴やガムなどが並んでいる場所だった。ミオが手にしているのはミントタブレットのボトルだった。それを見て、アゲハはセイの事を思い出した。

「そういえばさ、セイは元気でやってるの？」

ミオはびく、と体を強張らせた。ええ、と言葉を濁らせて答えた。

2人は会計を済ませてスーパーを出た。

「乗って、」

ミオが助手席側のドアを開ける。

「少しアナタに話したいことがあるの。いいかしら？」

アゲハは頷いた。

「気分転換して来いって言われてるから」

「……何かあったの？アナタ、ちょっと様子がおかしいわ」

アゲハは少し考えこんだ。それから、顔を上げてミオを見た。

「友達が死んじゃったんだ」

「……ごめんなさい、私、そういうデリカシーがないの、やっぱり治らないんだわ」

アゲハは構わない、と言うようにううん、と首を振った。

「ねえミオ。ミオもさ、ちょっと変だよ。セイに何かあったの？」

2人とも、微妙な空気のままだった。暗くなり始めた街を車は走っている。どこへ行くでもなく辺りをぐるぐると廻っていた。

「セイは、アナタと別れてから元気がないの。私何回かセイと連絡を取ってみたんだけど……。あの人、口だけは変わらずに達者なんだけどほんとはボロボロになってるのがわかる。アナタが居たころはね、セイは別人みたいだったわ。幸せそうで、だから」

「セイは、あれからちゃんと食事してる？」

ミオは首を振った。

「私は、セイを犯罪者にしたくはなかった。でもそれが正しいことだったかなんて今更自信がないの。勿論人を誘拐や監禁することはいけないことだわ。でも私は、自分の思った通りになれば、正しいと思うとおりにすれば、皆幸せになれると思い込んでただけ。私余計なことばっかりして結局はセイを苦しめてるの」
「ミオは、セイの為を思ってるんだよね。ご飯食べさせようってしてるのも、それがセイの為になるから」
ミオは頷く。
「そうはなっていないけどね。自己満足なのよ」
「僕の友達。マナも、セイと同じでまともにご飯が食べられなかったんだ。マナのこと、僕にはどうしたらいいかわからなかった。何をしてあげられるんだろうって考えてるうちにマナは居なくなった。僕は結局マナの為になんにも出来なかったんだよ」
ミオはアゲハの言葉を黙って聞いていた。どこかコンビニの駐車場を見つけて、車を停めた。
「ねえミオ。ミオがやってること僕は間違ってないと思うよ。僕はなにもやらなかったことを後悔してる。誰かの為にはさ、思ってるだけじゃあダメなんだよ。ちゃんと喋ったり、手を差し出したりしなきゃあ、伝わんないよ」
アゲハはスーパーのビニール袋をぎゅう、と掴んだ。ミオが何か思いつめたような顔をしていた。
「私は、まだやっぱり自分のしたいようにしてるだけかもしれないけど」
ミオはそこで一旦言葉を区切った。ミオはアゲハの顔を見つめた。
「ねえ、アゲハ。アナタはセイに会いたい？」
ミオは真剣な目でじっとアゲハを見つめている。
「私は、セイにはアナタが必要だってわかったの。だから、もしアゲハさえよければ、セイに会ってあげてほしいの」
アゲハはしばらく考え込んだ後、ミオに言った。
「ミオ、携帯使わせてくれる？ばあちゃんに電話しなきゃまた心配

かけちゃうからさ」
　ミオは笑って頷いた。
「ありがとう、アゲハ」
　セイのマンションに向かう途中、ミオはテイクアウトのスープとパンを買ってきた。カップの中身はミネストローネだ。車の中に良い匂いが充満した。アゲハはさっきまで忘れていた空腹を思い出した。
ミオがアゲハにも温かいスープを差し出す。
「お腹が空いてるんじゃない？車を停めるわ」
　アゲハはツナマヨネーズのお握りを頬張った。口の中に好きな味が広がると、自然に笑顔になった。まだまだマナには敵いそうになかったが。
「アナタって、どこかシーナに似てるのね」
　ミオが思わずそう口に出した。
「シーナ？」
「ううん、なんでもないの」
　ミオのくれた温かいスープは、アゲハの体を癒すように感じられた。
　あれから何日か振りにアゲハはセイのマンションを訪れた。エレベーターに乗り、１０Ｆのボタンを押す。やがてセイの部屋の前に着いた。ミオがインターホンを鳴らした。
「セイ、私。なにか食事でもと思って持ってきたのよ」
　しばらくしてカチ、と鍵の開く音がした。そしてゆっくりとドアが開いた。
「ミオ、わざわざごめんね、でも」
「セイ、私アナタに会わせたい人が居るの」
　アゲハはミオに手を引かれて、玄関の中へ入った。セイの部屋の匂いだ、とアゲハは思った。顔を上げた。そこにはセイが立っていた。驚いて目を見開いている。
「……アゲハ？」

セイはあんまりびっくりしすぎて死んでしまうんじゃないかとアゲハは思った。もともと異様に痩せていた体がさらにやつれて見えた。

「……骸骨が痩せてる、」

アゲハは思わず口にした。失礼だとは思ったが正直な意見だった。セイは着ているシャツ越しにでもわかるほどガリガリになっていた。ミオが言うとおり元気がない。いや元気がないというのはもう通り越して生きている人間に見えなかった。生気の失われた両目がようやく落ち着きを取り戻してアゲハを見ていた。夏の頃、一緒に暮らしていたセイとはまるで別人に思えた。

「あの、」

アゲハが再び口を開いた。

「以前、この部屋で暮らしていたセイって方とはお知り合いなんですか？」

その言われた意味を察して、セイが笑った。

「面白いこと言うね、君も」

そうしてセイは、あの頃と同じような顔をして笑った。ミオは後ろで少し泣いているようだった。セイがアゲハに手を差し出した。

「いつまでそこにいるつもりなんだい？」

セイの手をアゲハは握り返した。

「おかえり、アゲハ」

#21：生命を満たすもの

テーブルの上に置いたスープからは良い匂いがしていた。アゲハはしばらく使われた形跡すらない調理台を見た。そして恐る恐る冷蔵庫を開けてみる。中にはあの時の余りものが入れたままになっていた。よく見なくても腐っている。嫌な臭いがした。

「セイ、どうして腐る前に捨てなかったのさ」

「捨てたくなかったんだよ。だって君との思い出が消えちゃうだろう」

呆れた顔のアゲハにセイは言った。どこか悲しそうな目をしている。

「……こんなもので僕を思い浮かべてくれなくたっていいよ」

アゲハはゴミ箱に腐った食材を捨てた。

「あーあ」

「生ゴミと僕を同列に見てるんだね君って奴は。失礼にも程があるよ」

「ゴメン」

「もうちょっとで冷蔵庫がダメになるところだったんだよ」

「ありがとう」

セイがアゲハをぎゅう、と抱きしめた。体に回された腕の細さにアゲハは悲しくなった。

「君と居ると自分がとんでもないデブに思えてくるよ」

「セイ、私あの子の所に行ってくるわ。邪魔しちゃ悪いもの」

「ミオ」

ミオはくすっと、と笑ってカガリの部屋へと向かった。

「もう……」

アゲハはセイの腕を振り解いた。それは簡単に出来た。セイの腕には殆ど力が入らないのだ。

「またどうせ、ロクに食事なんかしてなかったんだろう？」

セイは母親に叱られている子どものようにしゅんとしていた。
「座って」
アゲハがセイに席に着くように言う。大人しくセイは従った。その隣にアゲハが座る。セイの目の前にはミオが買ってきたスープとパンが置いてあった。セイが困ったような顔を向けた。
「アゲハ、」
セイが首を横に振った。アゲハはプラスチック製の容器の蓋を外した。
ふわ、とスープの匂いがより一層強くなった。まだ湯気が立ち昇っている。アゲハは添えつけられた白いスプーンでスープを混ぜ合わせた。数ある中でもトマトをベースにしたものをミオは選んできたのだろう。
「セイ、」
アゲハはスプーンで上澄みを掬うと、隣のセイに向けた。セイが目を伏せる。食欲が全くないのだと言った。アゲハと別れたあの時から、セイは全く何も口に出来ていなかった。少し意地悪くアゲハは言った。
「僕が食べさせてくれるんだったら何でも食べるって言ったよね？」
セイが苦笑いを浮かべた。口を開く。セイの体はがくがく震えていた。凍えているようにも見えた。ほんの少しだけ掬ったスープをセイは飲み込んだ。アゲハは続け様にもう一匙スープを掬った。今度のは固形物を含んでいた。細かく切られたハムの一片だった。
それを見たセイが少しだけ顔をしかめた。アゲハは無言でセイにスプーンを突き出している。セイは今回はなかなか口を開くことが出来なかった。体がはっきりと拒絶を示しているのだ。セイの体が、セイ自身のいうことをきいてくれなかった。喉の奥にあるスープの匂いに吐き気すら催していた。セイの胃の中にあるもの、そんなものは今は胃液しかなかったのだが。それが喉の奥の方まで込み上げてきていた。セイの顔色は見る間に真っ白になった。
セイはアゲハを見た。その様子にセイは息を飲んだ。喉の奥にあ

る苦みが引いた。
「アゲハ、」
セイはそう呼びかけた。セイにスプーンを向けたままアゲハは泣いていたのだ。その両目からぽたぽたと滴がテーブルの上に落ちている。アゲハは声を上げずにただ涙を流していた。アゲハはマナのことを思い出していたのだ。もうマナにしてあげられないことだった。
セイはそっと差し出されていたスープを口に入れた。ハムを飲み込むことが出来ずに、何度となく咀嚼を繰り返した。そうして、どうにか飲み下した。アゲハがスプーンをスープの中に戻した。そうして、両手で顔を隠して声を上げて泣き始めた。
アゲハをそっと温かいものが包み込んだ。セイの腕だった。
「辛い思いをしてきたんだね」
セイの体の暖かさに包まれて、まるで癒されるような感覚をアゲハは感じていた。
セイにはマナのことを何も話していない。セイにはアゲハの心の中が読めるのか、それともただの思いつきでそう口に出したのか。またアゲハがそう受け取っただけでセイは違った意味でそう言ったのかもしれなかった。どうでもよかった。
しばらくして落ち着きを取り戻したアゲハはセイにありがとう、と呟いた。テーブルの上のスープはすっかり冷めてしまっていた。
「最近、蝶々の夢をよく見るんだ。そしたら正夢になった」
セイが嬉しそうに言う。カガリの世話を終えたミオが戻ってきた。
「アゲハが戻ってきただけで、セイは食事が出来るくらいまで元気になれるのね、もう。なんだか妬けちゃうわ」
ミオはそう言って笑った。
「次からはアゲハも一緒に連れてこようかしら？」
「うん、そうだね。それがいいよ」
「ちょっと、それ、僕の意思はどこにあるのさ。……まあいいけど」
「良かったわねセイ。少しは寿命が延びたでしょう」

ミオが嬉しそうに言った。
「うん、ありがとう。アゲハ、ミオ」
アゲハは冷蔵庫を見た。
「セイ、言っておくけど僕はそんなにしょっちゅうは来られないんだからね。ミオ、車出して。買い物に行こう。セイの冷蔵庫に食べ物いっぱいにするんだ。早く食べないと腐っちゃうものいっぱい入れとこうよ」
「そうね。そうしようかしら」
「2人とも、そんなにイジメないでくれよ」
セイが苦笑して言った。
「気が向いたらまた僕が何か作ってあげる。でも、ちょっとずつでもいいから何か食べててよ。僕を心配させないで。セイは僕のことを苛めるつもり？」
セイはアゲハの頭を撫でた。
「君が来てくれるって、約束だよ」
「僕の為にビール冷やしといてくれるんだったら毎日来たげてもいいよ」
「わかった」
そう言うと、セイは笑った。少しは元気を取り戻したように見えた。

#22：セイ

ミオが次の休日に、約束通りアゲハを連れてやってきた。出迎えたセイは相変わらず今にも死にそうに見えたが、それでも少しは元気を取り戻しつつあるようだった。セイを外に連れ出すのは無理そうだったので今回もテイクアウトの惣菜を持ってきた。あまり固形物が食べられないので、スープを2種類。食べられそうな方を選んでもらった。セイが選んだのは、これも前と同じでミネストローネだった。

「セイはほんっとにトマトが好きなんだね」

アゲハはハムと玉ねぎを除けてセイにスプーンを向けた。無理に食べさせなくてもスープの中にハムと玉ねぎの分の栄養も溶け出しているだろう。セイは大人しく口を開いた。アゲハが途中コンビニで買ってきたプリンもテーブルの上にあった。ホイップクリームが上に乗っかったものだ。

甘いものなら食べられるかと持ってきたのだが、セイはそのクリームを一口分しか食べられなかった。スープも数口、それきりだった。アゲハはため息を吐いた。セイが食事を終えた後もあまり食べ物が減っていないからだ。誰かがつまみ食いをした後のようだった。

アゲハは冷蔵庫から缶ビールを取り出し、セイが選ばなかった方のクリームスープの蓋を開けた。先にセイに食べさせていたのでもう冷えかかっている。アゲハはパンをスープに浸しながら食べた。ミオが贔屓にしているだけあってとても美味しかった。アゲハは戸棚に並べられているベビーフードを見上げた。結構な重量のあるものなので、最近は宅配サービスを利用しているらしい。

「セイもこれ食べたら？」

アゲハが瓶詰を手にそう言った。

「僕は赤ちゃんじゃないよ」

「大して変わんないよ。ご飯食べさせてもらってるくせに」
セイがはは、と笑った。中身はどろどろに煮込まれたおじやだった。
「お粥だったら食べられそう？」
セイはしばらく考え込んだ後、君が食べさせてくれるんなら、とやはりそう答えを返した。もちろん台所に米はなかったしまだ炊飯器もない。アゲハは自分の家にある１０キロ入りの米袋を連想したが、あんなものを買ってきたらセイは一生かかっても食べきることが出来なさそうだ。
アゲハがセイに食事をさせている間に、ミオがカガリの面倒をみていた。
「セイ、僕カガリの所に行ってくるね」
セイはうん、と頷いた。
カガリは丁度入浴を終えて髪を乾かしてもらっているところだった。アゲハのことをカガリは覚えているのか、見上げるとにこっと笑った。散髪したらしく、腰まであった髪は肩にかかるくらいの長さになっていた。カガリの体はふくふくしていて、肌の色つやもよかった。セイはカガリの世話はあの体でもちゃんとしているのだ。
「カガリ」
アゲハはしゃがみ込んで目を合わせた。
「ぷううううう」
カガリが何事か言っている。意味はわからないがアゲハに対してのあいさつなのだろう。
「ミオ、どうしてカガリは喋らないのかな」
ミオが困ったような顔を向けた。
「わからないわ。この子もそろそろ部屋から出られるようにならなきゃねとは思うんだけど」
ドライヤーを切り、ブラシで髪を梳かした。カガリの髪は色素が薄くさらさらしている。今日は白いふわふわしたワンピースを着ていた。部屋の中にあるぬいぐるみがまた増えたようにアゲハは思っ

た。よく見ると、大きなクマの下敷きになっている小さなクマのぬいぐるみがあった。白かピンクで統一された中、それだけが真っ黒な毛並みをしていた。普通の可愛いクマのぬいぐるみなのに、妙な違和感があった。アゲハがそのぬいぐるみを持ち上げると、ああ！とカガリが声を上げた。アゲハのシャツを掴んでいる。

「ウーウー」

「どうしたの、カガリ？」

カガリはぽろぽろと涙を零しはじめた。顔を真っ赤にしてアゲハを叩いた。おそらくそのクマのことでカガリは不機嫌になっているのだ。

「ゴメンね」

アゲハはカガリに黒いクマのぬいぐるみを返した。

「きゃあ！」

カガリは大慌てでぬいぐるみをカーペットの上に放り投げ、その上からピンクのウサギと白いクマのぬいぐるみを乗せて隠した。

「ぷううううう」

そうすると、カガリは両目を擦り、アゲハを見てにっこりと笑った。アゲハには訳がわからなかった。セイがカガリの部屋にやってきた。それを見たカガリが嬉しそうな声を上げる。

「カガリは本当にセイのことが大好きなんだね」

セイはしゃがむとカガリを抱きしめた。カガリが安心しきった顔をしていた。そのうちにうとうとし始めたカガリをセイはベッドに寝かせた。

「ねえアゲハ、今日は泊まっていかない？」

「えー」

アゲハはイヤそうな声を上げた。

「私は構わないわよ？アゲハ、また明日迎えに来てあげるから」

送り迎えをしているミオが言う。

「だって僕が泊まれるところなんてないだろ、ベッドはセイのしかないんだし」

「大丈夫だよ。2人で寝ても狭くないだろ？」
「そんなことの為に痩せたの？」
セイが面白そうにふっと笑った。
「でもまだダメだよ」
アゲハは口元に人差し指をあてた。
「セイがちゃんとご飯を食べられるようになったら、僕もなんでもセイの言うこと聞いてあげるよ。約束する」
「うん、わかった」
帰るころになると、セイは悲しそうな顔をした。
「また来るからさ、そんな顔しないの。セイそれまで生きてなよ」
「頑張るよ」
アゲハは笑って言った。
「今度はセイにお粥作りに来てあげる」
「うん、楽しみにしてる」
ばたん、とドアが閉まった。セイがはあ、とため息を吐いた。ふと携帯を開いてみると、一件のメールが届いていた。セイが僅かに眉を寄せた。その文面に目を通し、少し考えた後で短く返信した。カガリの部屋に戻り、眠っている傍に寄った。ぱち、とカガリが目を開いた。カガリはセイの様子がおかしいことがわかるのか、体を起こしてセイに触れようとその手を伸ばしている。セイはふっと笑うとカガリを抱き上げた。
「カガリ、僕は出掛けてこなきゃならないんだ。いい子でお留守番出来るよね？」
「ウウ、」
カガリはセイと指切りをした。またベッドに寝かせると、床に転がったウサギのぬいぐるみを拾ってカガリの傍に寝かせた。カガリがぬいぐるみにしがみついてセイを見上げた。
「キュウウウウ」
「うん、平気だよ。僕のことを心配してくれてるんだね、カガリ」
セイはカガリの髪を撫でると悲しそうな顔をした。

「ぷう」
「うん、じゃあ行ってくるよ」
セイはキッチンに置いてある薄茶色の液体をグラスに注いだ。一口だけ口に含む。飲み下すと緑色の表紙のハードカバーを手に取って開いた。中に挟み込んだ写真の、笑っている少女を見つめた。
「シーナ、」
セイの頭の中に、自分の名前を呼ぶ声が再生される。案外忘れないものだ。
こまごましたものをまとめて入れてある引き出しの中から、セイはネックレスを取り出した。細かな細工を施した金色の十字架が、チェーンの先で揺れている。セイはそれを身に着けると、黒いシャツの内側に入れた。
しばらくして、セイの部屋を再び訪れる者がいた。先程と同じように玄関でセイは出迎えた。その作り物のような顔から表情が消えていた。男が入ってきた。セイよりも更に長身の体格のいい男だった。黒いスーツを着込んで、短めの髪を後ろに撫で付けている。
「テツ、」
その男、テツロウはセイに微笑みかけた。
「じゃあ、行こうか」
セイはシャツの中、十字架をぐっと握りしめた。
テツロウは黒い車のドアを開いて、セイが乗り込むのを確認するとばたんとドアを閉めた。そうして運転席に自分も乗り込んで、車を発進させた。セイはその顔に表情を浮かべず、口を動かすこともしなかった。わずかに呼吸しているとみられるシャツの胸の動きだけが生きている人間であると示している。
「また、少し痩せたみたいだね」
セイは顔をテツロウの方に向けた。生気の感じられない両目で見つめている。
「そうしていると君はまるで人形だな」
車はゆっくりとセイのマンションを遠ざかって行った。辿りつい

た先は病院だった。休診日だ。テツロウは入口を開け、中にセイを呼び込んだ。スーツの上をフックに掛けて、白衣をその上から羽織った。セイは診察室のベッドの上に座らされた。セイの口をこじ開け、その中にテツロウが体温計を挿し込んだ。しばらくたって引き抜かれる。

「熱はないようだ」

テツロウが座ったままのセイのシャツに手を掛けた。ゆっくりと時間を掛けてボタンが全て外される。黒いシャツを脱がせると、そこには金色の十字架があった。それを見たテツロウが不愉快そうな顔になった。セイをベッドに寝かせると、テツロウはセイの着ているものを全て脱がせた。セイはあのネックレスだけをつけてそこに寝かされていた。ベッドの冷たい感触が直に肌に触れた。

セイは何の感情も浮かべない無表情のままだ。その裸の胸にテツロウの指が触れた。テツロウの右手がセイの体の上を弄るように動いた。僅かに高い熱を持った指の感触にセイの息が上がり始める。一見して嫌そうな表情を浮かべたセイを見て、テツロウは満足そうに笑った。

「どこか体に不具合はあるかい？」

セイは首を振った。テツロウの指がはっきりと浮き出たセイの肋骨をなぞった。

「痩せすぎだ」

セイの呼吸で薄い胸が上下していた。テツロウは何かを確かめるようにセイの体に触れた。指はそのまま下半身まで伸びた。

「私のあげた薬はちゃんと飲んでいるのか」

セイは頷いた。

「嘘はよくないな」

テツロウが咎める。セイから一旦離れると、注射器とアンプルを手に戻ってきた。慣れた手つきで薬液を注射器の中に吸い込ませる。セイの腕を消毒すると針を突き刺した。テツロウは思いつきでワザとヘタクソな突き刺し方をした。セイの顔が苦痛で歪むのが見たか

ったからだ。
「うう、」
セイがうめき声を上げた。針が抜けた後に小さな穴から血が一筋流れだした。セイの腕を取り、テツロウがその小さな穴を舐めた。赤い筋を辿るようにセイの腕に舌を這わせた。その生温かい感触にセイの背中がぞわぞわしていた。僅かな出血はしばらくの間続いた。テツロウが指先で何度も小さな穴を押し付けて弄り、その度にじわりとセイの腕が赤く滲んだ。
再びセイから離れると、テツロウが何やら器具を乗せてあるワゴンを押してきた。金属音が耳元で聞こえて、セイはぐっと目を閉じた。鼻をつく薬品のしみ付いた部屋の臭いがした。セイはその体にテツロウの重さと熱を感じた。全てが終わってからセイはぼんやりと両目を開いた。すぐ傍で、白衣を着崩したテツロウが居る。セイが目を覚ましたことを確認すると、テツロウは銀色のトレーに幾つか錠剤を乗せたものを持ってきた。セイの上半身を起こさせて、指で強引に口を開いた。舌の上に錠剤を乗せると、水を入れたコップをあてがう。セイは抵抗しなかった。そのままクスリを水と共に飲み下した。
テツロウの前では、セイはただの美しい人形だった。そうすることがかえってテツロウを煽ってしまうことをセイはまだ知らない。テツロウがセイに脱がせた衣服を再び身に付けさせると、抱き上げてベッドの上から降ろした。2人は診察室を後にした。
車はすっかり暗くなった街を走った。そうしてセイのマンションに辿りついた時には夜がもう更けていた。テツロウはセイに小さな紙袋を渡した。中にはさっきのと同じ白い錠剤が入っていた。
「私は君の主治医なんだ、指示にはちゃんと従って貰わないと困る。君は受け取りもしなかったんだろう」
セイがバツの悪そうな顔をした。テツロウがふっと笑った。
「娘にクリスマスプレゼントを渡したいのなら、そのクスリはきちんと飲むことだ。私のあげた人形は喜んでくれているかい？」

セイが虚ろな目をテツロウに向けた。テツロウはセイの顔を両手で固定した。何か温かいものがセイの口に触れた。

「金は振り込んである。また、連絡する」

テツロウはそう言って車に乗り込んだ。エントランスで車が完全に行ってしまうのをセイは見送っていた。

セイはテーブルの上に大きな瓶を取り出した。中には白い錠剤が入っていた。セイは袋の中身をバラして瓶の中に放り込んだ。もうすぐで一杯になる。セイは瓶の蓋を閉め、また元の場所に仕舞い込んだ。戸棚からグラスを取り出す。薄茶色をした液体を注ぎ込み、一息にそれを飲み干した。頭の奥がじわじわと、何かに侵されていくような痛みを感じた。セイはもう一度同じようにグラスの中に注いだ。

#２３：記録の中の記憶

セイは赤い表紙の手帳を取り出すと、ぱらぱらと中を捲った。時折、数行ほどの文字列が書き込まれたページがある。もう何年も前から使っている日記帳だった。未だに空白が多いのはセイがそもそも日記をまともにつける習慣を持っていないからだ。最後に書き込まれた文面を見た。

『２４日、シーナの誕生日。似合いそうなネックレスを見つけた。シーナは喜んでくれるだろうか。楽しみだけど、ちょっと不安』

セイはこれを書いていた時の自分を思い出してふっと微笑みを浮かべた。まだ何も書いていないページを開いた。

『ミオの今度の休みの予定、１０／９。アゲハに会えるのが楽しみ』

そう書きこんで、手帳を閉じた。

そういえば、マンションの近くにある植木が金木犀だと気付く頃になった。気候も良くなり、セイの体の具合も幾分か楽になった。晴れ渡った空の下、気持ちのいい風が吹いている。もうすぐミオがアゲハを連れてきてくれるのだ。それを思うだけでセイの心は軽くなった。

ただアゲハと交わした約束、「きちんとご飯が食べられるようになったら、僕もなんでもセイの言うことをきいてあげるよ」それを叶えてもらえるようになるのは、まだまだ先の話だとセイは思った。戸棚を開けて、カガリのベビーフードを取り出す。中身はどろどろに煮込まれたチーズグラタンだった。試しに食べてみようかと蓋を開けたが、匂いを嗅いだだけで断念した。カガリの部屋の、開け放した窓から匂ってくる金木犀の花の香りをセイは思い切り吸い込んだ。

悪い知らせを受けたのはその数日後だった。玄関先にやってきたのはミオ一人だった。

「……なんて顔をしてるのよ。ほら、アゲハと繋がってるわ」

ミオが携帯電話をセイに差し出した。セイの耳にアゲハの掠れた声が聞こえてきた。
「……ゴメン、セイ。僕風邪引いたみたいでさ、君の所へは行けなくなったんだ」
「酷いよアゲハ、僕が君に会えるのをどれだけ楽しみにしていたかわかるかい」
「だから悪かったって、ゴメン」
「……アゲハは悪くないよ、僕の方こそゴメン。アゲハは風邪で辛いのにさ、感情的になりすぎた」
セイはついかっとなった自分を恥じた。
「昨日までは熱も出てなかったんだよ、頭痛いなくらいだったんだけどさ。君に風邪をうつしたりしたら僕は人殺しになりかねない。だから今回は行けない」
「うん、アゲハ、お大事に。はやく良くなってね」
セイは通話を終えた携帯電話をミオに返した。
「ミオ、上がって」
カガリの部屋に入ると、ミオを見てカガリが嬉しそうに笑った。
「この子のご飯はまだなの？」
「うん、ちょうどこれから」
ミオはセイから瓶詰を受け取った。代わりに提げていたビニール袋を手渡す。
「ほら、アナタにはこっち」
中身はまだ温かいスープだった。今回は趣向を変えて、噛まなくても食べられるように固形物の含まれないどろどろしたクリームスープを持ってきていた。まるで歯の弱い老人に対する気配りのようだとミオは思った。
スープの入ったカップを手に、セイはしばらくの間固まっていた。そろそろとスプーンでかき混ぜて、まとわりついてきただけのものを口に入れた。嫌そうな顔をしているセイにミオがため息を吐く。
「アゲハと約束しているのよ。アナタがそれを残さず食べなきゃ次

から連れて行かないって」
セイは思い切り悲しそうな顔を上げた。
ミオはセイとの間に、アゲハを一人では会いに行かせないという約束を取り付けている。セイのマンションにアゲハが行く際にはミオが必ず送り迎えをする決まりになっていた。一応、元誘拐犯とその被害者ということを踏まえた上での取決めだった。
カガリはミオにご飯を食べさせて貰っている。ミオが相手だと、何故かカガリは途中で飽きることもなく食事を終えるようだ。セイは2人の様子を伺いながら、スプーンを浸けては口に入れる動作を時折繰り返していた。そのうちに冷めて、よりどろどろしてきたスープはセイの食欲を完全に消し去っていた。ミオがカガリの髪の毛をブラシで梳かし、高めの位置から2つにゆわえる。鏡でいつもと違う髪型の自分をカガリが嬉しそうに見つめていた。セイはまだ冷え切ったスープを持て余していた。ようやく1／3程はかさが減ったようである。
「アゲハに会いたくないのね」
「苛めないでくれよミオ」
ミオは悲しそうに笑った。
「キッチンへ行きましょう。あんまりだからそれ温め直してあげる」
プラスチック製のカップから皿へと移してもらったスープを掬って、セイは一口飲んだ。さっきまでよりも温かい分美味しく感じられた。ミオはコーヒーを2つテーブルの上に置いた。
「カガリはミオのことが大好きみたいだよ。どうなることかと思ってたけど、良かった」
ミオはコーヒーのカップを取り、一口飲んだ。
「……ねえ、セイ。あんまり言いたくないんだけど。あの子やっぱりテツロウ以外のお医者さんで診てもらったほうが良くない？」
「……うん、」
カガリは普通の子どもとは言い難い。それはセイにもよくわかっていた。ある時からカガリがどういうわけか部屋から出たがらず、

人間の言葉を喋ろうとはしなくなった。そのことがどうであれ、セイはカガリのそうしたくないという気持ちを優先的に考えたのだ。セイ自身が自分を真っ当な父親ではないと思っていたから、出来ることは娘のしたいようにさせてやることぐらいしかないと考えたのだ。そしてもうすぐ、セイはその権利を失うことも知っていた。

「ミオの意見の方がもっともだと僕も思う。……ミオはさ、本当にいいのかい？君にこれ以上迷惑を掛けるのは本当に忍びないんだけど」

「迷惑だなんて、」

ミオはそこで一旦言葉を切った。ふう、と息を吐き出す。

「私が引き取ることがあの子の為になるなんて言い切れないわ。ただ、私はカガリを身寄りのない子どもとして施設に入れたくないってだけなの」

「僕自身が人間として大切なものが色々と欠けてしまっているからね。多分僕の手を離れたら、どう転がったっていい方向に向かうに決まってるよ。ただ、あとほんの少しの間だけでも、僕はあの子の父親らしいことがしたいだけ。そうしたら君と交代するよ」

「そんな、近いうちとか馬鹿なことは考えないで」

ミオはほとんど泣きそうな顔をセイに向けた。

「うん、ごめんね……でも。僕はこんな体だし。それでも今みたいに生活してやっていけてるのは、やっぱりテツに援助してもらってるからだってことは否定出来ない。……何やってるんだろうね僕は。シーナだって今の僕を見たら呆れ返って一発張り倒してくるんだろうな。そうでもないと僕は目が覚めないか」

セイはシャツの首元から取り出した十字架を見つめた。それは何年か前のクリスマス、丁度誕生日でもあった日にセイがシーナにプレゼントとして渡したものだった。

「アナタはやっぱり、まだ忘れられないのね」

「当たり前だよ」

セイはその十字架を手の平に食い込むくらいにぎゅうと握りしめ

た。痛みがシーナとほんの少しにでも近く、分かり合えるならと思った。そんな訳は勿論ないが。セイは自分に娘を残してこの世を去った女性のことを思い浮かべた。形見となったネックレスが今セイの手の中にある。

それはシーナが一人で留守番をしていた時に起きた事件だった。その日から立て続けに起きることになる、連続強盗殺人事件の皮切りとなった。公園から戻ってきたセイとカガリを出迎えたシーナはもう、変わり果てた姿になっていた。

「思い出すのは辛くないのかしら？」

ミオはそっとセイに言った。

「そんなことはないよ。彼女は今でも僕を過剰に元気づけてくれる。あの頃みたいに力任せに肩を叩いてくれるんだ。実際やられたら今はうっかり死んじゃうくらいにさ」

セイがそう言って、はは、と笑った。

「カガリはどうだろうね。まだ小さいし。もしかすると僕のことなんかは忘れちゃうのかなあ」

「大丈夫よきっと。アナタだってカガリにいっぱい思い出になるものを残しておけばいいじゃない」

セイは暗い表情を浮かべた。

「君は、いつか僕のことを思い出した時、今の僕みたいに笑ってくれるかい？」

「……セイ。悪いんだけど、今はそんなことを考えたくないの。アナタだってそんなんじゃダメよ、気力までなくしてどうするの。もっと生きようって気持ちにならないと。……アゲハに、もう一回会いたいんでしょう？」

「うん、」

「カガリがアナタのことを忘れてしまわないように、ちゃんとした写真でも残しておけばいいんだわ」

セイはもう一度十字架を持ち上げて見ていた。細かな細工が手の平を傷つけて、うっすらと赤く滲んでいた。

「カガリも、ミオも。僕のことを思い出して笑っていてくれるんならそれでいいけど、泣くくらいなら忘れててほしい。その時には僕は君のことを慰めになんて行けないんだからね。だから正直どうしようか迷ってる」

金色の十字架が光を受けて輝いていた。

「セイ。それは、アゲハにも言える？」

セイはミオの方を向き直った。アゲハの顔をセイは思い浮かべる。記憶の中のアゲハはいつも、怒ったり、呆れたような顔だったり、時には涙を浮かべたりしていた。以外と泣き虫なのだ。この間もそうだった。彼は自分を思い出した時にはいったいどんな表情をするのだろうかとセイは思った。また泣かせてしまうのだろうか。それともイヤな奴のことを思い出したとばかりに歪んだ顔になるのだろうか。

「さあねえ」

セイはなんだかおかしくなってきて笑った。温め直してもらったスープがまたも冷えかかっているが、あともう少し。どうやら自分はアゲハに会える権利を認めてもらうことは出来そうだとセイは思った。

#２４：ほんの少し前へ

『２３日。今日はミオがアゲハを連れて来てくれた。ほとんど一ヶ月振り。アゲハは全然変わらないなあ』

前回、風邪を引いたせいで来られなかった事をアゲハは詫びた。セイはアゲハの顔を見られたことが本当に、何よりも嬉しかった。

「来てくれてありがとう」

セイがあまりにも幸せそうな顔をするので、アゲハは少し照れくさくなった。

「んで、ハイ。これ」

アゲハが提げていたビニール袋をセイに差し出す。中身はまだ温かいテイクアウトのスープだった。

「君がお粥作ってくれるんじゃなかったの？」

「セイは食べやすいものよりもさ、もっと栄養のあるもの食べなきゃダメだと思ったんだ。どうせちょっとしか食べられないんだし」

中身はチキンと茸のホワイトシチューだった。セイにしてみれば前回のクリームスープと比べて格段にレベルの高い一品である。

「この間ミオがスープ全部食べれたって教えてくれたよ。やれば出来るんじゃんかセイ」

セイはカップを手に取り、大きめに切られた具のごろごろ入ったシチューを一匙掬ってみた。

「食べさせてあげようか？」

アゲハがそう言ってみる。セイはうん、と頷いた。アゲハは受け取ったスプーンでチキンを小さく解し、ほんの小さな塊をセイの口元に持って行った。セイが恐る恐るそれを口に入れる。

「美味しいだろ？」

アゲハが訊いた。肉の味に微妙な表情を浮かべながらもセイが頷

く。淡白なチキンはまだセイの中では食べやすい部類の肉だった。
「ここのスープどれも美味しいんだよ。とりあえずこのお店のをコンプリートしよう。全部で１６種類あるんだ」
ミオがよく利用するその店はスープだけでもかなりの品ぞろえのよさだ。温かいものから冷たいもの、季節ごとに日替わりのものもあった。
「じゃあ今日から１６回はアゲハは絶対に会いに来てくれるんだよね？」
「そうだよ、嬉しいだろ」
「うん。ありがとう」
アゲハが少し顔を赤くした。それから意地の悪そうな顔つきになる。
「中にはセイの大嫌いなでっかい肉のごろごろ入ったスープカレーなんてのもあるからね」
「ハハ……」
セイは視線を宙に彷徨わせる。
「はい、じゃあ後は自分で食べて」
アゲハはセイにスプーンを返した。
「もう食べさせてくれないの？」
「カガリじゃないんだし、赤ちゃんじゃないでしょ君は。それに僕にはやっかいなことが起きているんだ」
アゲハはカバンから数枚のプリントを取り出した。無造作に突っ込まれた為かしわの寄ったそれはどうやらテストの解答用紙らしかった。右上のマスに点数が書き込まれている。５０点満点、というわけではないだろうが、そうだとしても褒められたものではない数字だった。セイは数学の解答用紙をみて驚愕のあまり声を上げた。数字は一桁だったのだ。
「これはひどい」
「……だろ」
アゲハはさすがに恥ずかしくなって、セイから解答用紙を返して

もらうと、カバンに押し込んだ。アゲハは予習も復習も面倒くさがってやらなかったので、高校に入ってから成績が目に見えて落ちた。中学まではそれでもギリギリなんとかなっていたのだが、今は授業についていくのも危ぶまれるレベルになってしまっている。
「先生が僕専用に課題のプリントを作ってくれるようになったんだよ。あんまりヒドイもんだから心配なんだってさ。素晴らしい学校だろう？」
アゲハはワザとらしい口調で言った。セイも苦笑いを浮かべてアゲハを見ている。
「悪いけど、さすがの僕にも弁護できないなあ。アゲハはいったいどんな学校生活を送って来たんだい？」
セイが呆れた声でそう言った。
「セイ、この面倒くさがりの僕が学業を最優先にするなんて思う？」
「いや、でもねアゲハ。きちんと教養を身につけるべき時期というものはあるんだよ。どんなものでも、役に立たない知識なんてないんだ。一応の年上としてこの僕からもそう言っておくよ」
アゲハはうーん、と唸るような声を上げた。それからシャープペンをテーブルの上に放り出した。
「ああもう何か全てがイヤだ。これだったらもっかいセイに監禁でもされてたいよ。冬は勿論暖かいんだろう？」
セイはふっと笑うと、そうだね、と呟いた。そして自分で大きなチキンの塊を掬って口に入れた。アゲハが珍しいものを見るような目でセイを見た。セイはゆっくりと時間をかけて咀嚼し、どうにかそれを飲み下した。セイはふう、と大きく息を吐いた。それからまたシチューを掬って一口飲んだ。アゲハはしばらくの間ぼんやりとそんなセイの様子を見ていた。テーブルの上に課題を広げると、アゲハは静かに問題を解き始めた。時折頭をガリガリ掻き毟っている。セイはそれを見て微笑んだ。セイが冷えかかったシチューをどうにか半分くらいを食べ終えた頃、アゲハが言った。
「それ食べてすんだら、この問題の解き方教えてくれない？」

セイは笑って言った。
「アゲハが食べさせてくれるんならいいよ」
アゲハはスプーンを受け取ると、シチューからマッシュルームを一つ掬った。セイの苦手な食べ物の一つだ。アゲハは掬ったものを自分の口に入れた。
「これで貸し借りはナシね」
そしてシチューを掬って今度はセイに食べさせた。
「セイ、アゲハ。これよかったら味見してみてくれないかしら？」
キッチンでなにやら作業をしていたミオが声を掛けてきた。その傍らにレシピ本が開かれている。カガリの為の食事を自分で作ろうとしているのだ。小さい鍋の中にはどろどろしたスープが入っていた。
「上手く出来てるかどうか自信がないの。ううん、大丈夫だとは思うの、本に書いてある通りにちゃんと計ったし」
小皿によそったスープをセイは飲んでみた。
「うん、美味しい。これならカガリもきっと喜んで食べてくれるよ」
「本当？」
アゲハも味を見てみた。
「ミオ、料理上手いじゃない」
ミオは照れくさそうに笑った。カガリはいつもの瓶詰ではなく、スープ皿を持ってきたミオに顔をしかめた。
「カガリ、」
セイがカガリを抱き上げて自分の膝の上に座らせる。カガリが振り返ってセイを見た。
「カガリ、ミオがね、カガリのことを思って作ってくれたんだよ」
「キュウウウウウ、」
カガリはセイの言っている言葉の意味はわかるようだった。しばらくむっとしているようだったが、ミオの差し出したスプーンを咥えた。カガリはミオを見て、にっこりと笑った。もっと食べたい、と言う風にミオに催促している。
「ありがとう」

ミオは少し泣きそうになりながら、カガリにまた一口食べさせた。

#25：より一層高い場所から

『最近ずっと熱っぽくて怠い。あのクスリは嫌だ。アゲハにはどうしようか。やっぱり黙っていよう』

「どうしたの？」
アゲハが声を掛けてきた。セイがスープを掬ったスプーンを手にじっと固まっていたからだ。カップの中身はクラムチャウダーだった。店にある2種類のクラムチャウダーの内、トマトをベースに使った方を選んでである。
「ううん、なんでもない」
「もうお腹いっぱい？」
アゲハが心配そうに訊いた。スープはまだ殆ど手付かずのままだった。
「食べさせてあげようか」
「ううん。君の邪魔をしたくないから」
セイはスプーンを口に入れた。アゲハの前には広げた課題が置いてある。
「僕は邪魔されたかったんだけど」
アゲハはそう言って悪戯っぽく笑った。
「でも、セイのおかげだよ。僕この間の小テストで数学４５点だったんだよ」
「へえ、すごいじゃない。よく頑張ったねアゲハ」
アゲハは得意げな顔をした。
「５０点満点ならもっと素直に褒めてあげられるんだけど」
「何だよ、ちょっと前まで１０点満点でもヒドかったんだから大した進歩だろ？」
セイはごめんね、と呟いた。

「セイ教えるの上手いからさ。まだわかんないとこいっぱいあるんだ、お願い」
「うん、わかった」
しばらく静かに、セイは時折スプーンを口に運んでいる。アゲハが合間で顔を上げた。
「……どしたの？セイ、顔色悪いよ」
セイは口元を押さえて立ち上がった。よろよろと流しの前に立つ。喉の奥に苦いものが込み上げてくるのがわかった。セイはさっきまで食べていたものを吐き出した。体の調子が悪くて胃が食べ物を受け付けないのだ。
「セイ、大丈夫？」
アゲハも慌ててセイに駆け寄り、その骨の浮き上がった背中をさすった。アゲハは洗面所からタオルを取ってきた。流し台に身をもたれ掛けてぐったりしているセイの汚れた顔をそっと拭った。
「あんまり無理しないで。余計体の具合が悪くなったら意味ないだろ」
「……ごめんね、アゲハ」
「君が謝ることじゃないだろ。……ん？」
アゲハはセイの体に触れて、異変に気付いた。どうも熱が高いように感じる。
「セイ、君やっぱり熱があるんじゃないの？どうした、風邪でも引いたの？」
「何でもないんだ」
セイは元の席についたが、もうスープを食べる気にはなれなかった。スプーンを持つ手が震えている。アゲハが後ろからセイの体を抱くようにして、スプーンをスープのカップの中に戻させた。
「いいんだよ、もう。無理しないの」
「だって、アゲハ」
アゲハが腕に力を込めた。
「あのさ、セイ。今度ミオがね、２２日に休みとってくれたんだ」

「２２日って火曜日だよね？」
ミオがセイに食事をさせに訪れるのは第２と第４の日曜日だ。偶に例外もあるが。
「だからね、それまでにセイの体の具合がよくなってないと今度は僕が行けなくなるんだ。それは困るだろ」
「うん。でもいったいどうしたんだい？」
「誕生日なんだ、僕。１１月２２日はね」
「そうだったんだ」
セイはアゲハを振り向いて見た。アゲハは顔を赤くして目を逸らしている。ミオはいいとしてもアゲハは平日で学校だろう。セイはそう思ったが言わないでおいた。
「わかった。その日までには元気になるって約束する」
アゲハはいい子、とでもいうようにセイの頭を撫でた。
「２２日っていい夫婦の日だよね」
「それは言わないで欲しかった……」
「ねえ、アゲハ。何か欲しいものってあるかい？」
アゲハは首を振った。
「何にもないよ」
セイが困った顔をする。
「せっかくの誕生日なのに」
「だからさ、欲しいものなんて何にもないよ。ただ、その日は一人になりたくないって思ったんだ。僕には友達なんかいないから」
「じゃあ、アゲハには内緒にするよ」
セイはそう言って笑った。
「僕がそうしたいんだ」
「うん。じゃあ、楽しみにしてる」

いつものようにアゲハたちを見送った後、玄関でセイは膝をついた。崩れるようにその体を壁にもたれ掛ける。セイは震える指で携帯電話を操作した。それからしばらくたって、テツロウが血相を変

えて部屋に入ってきた。テツロウの顔を確認すると、セイはそのまま気を失った。
「……気が付いたか？」
再び目を覚ました時にはセイは自分のベッドに寝かされていた。左腕のシャツが捲り上げられ、そこには注射を打たれた跡があった。
「心配ない、風邪を引いただけだよ。ゆっくりしていればすぐによくなる」
セイはふう、と息を吐いた。
「ありがとう」
「私を頼りにしてくれるのが何より」
テツロウがふっと微笑む。
「君は本当に我儘な患者だね。頑なに入院は拒むし、クスリだってまともに服用しない。それがいったいどうしたんだい？急にやっぱり生きていたいと思うようにでもなったのか？」
セイは何も答えなかった。虚ろな両目がぼんやりと天井を見つめている。
「いいよ。ゆっくりお休み」
テツロウはテーブルの上にスープの入ったカップを置いた。偶然なのか、いつもミオが差し入れてくれる店のものだった。
「君の場合はね、あんまり物を食べなさすぎるんだ。少しでもいいから何か口にした方がいいよ、ミネストローネは好きだったろう？」
テツロウはセイの頭を撫でた。先程までよりもだいぶ顔色が良くなっている。セイは頭を動かしてテツロウを見上げた。見つめ返したその目はとても優しい色をしていた。
「君の娘はどうしているんだ？君の風邪がうつったかもしれないから、診てきてあげるよ。君は寝てていい」
テツロウはそう言い残して部屋を出て行った。セイはぼんやりしていた。後9日。それだけがセイの今の心の支えになっていた。
テツロウはカガリの部屋のドアを開いた。びく、とカガリが体を強張らせる。

「ク、クウウ、クウ」
「何をそんなに怯えている？私は君を診察に来ただけだよ、お嬢ちゃん」
カガリは目に涙をいっぱい溜めこんでテツロウを見上げた。声を上げないように口を必死で噤んでいる。テツロウはふっと笑ってカガリの傍にしゃがみ込んだ。
「痛いことは何もしないよ」
テツロウはカガリの体の具合を調べてみた。さいわい風邪などは引いておらず、どこも悪い所はなかった。テツロウはカガリの頭をそうっと撫でた。
「はい、おしまい。よく頑張ったね、いい子だなあ」
カガリは体をがくがくと震わせている。テツロウは部屋の中を見廻し、黒いクマのぬいぐるみが他のクマやウサギによって下敷きにされているのを見て笑った。引っ張り出してきて、カガリに抱かせた。カガリの顔が引きつっている。
「君はいい子だね。パパを心配させまいとしてそうやって必死に黙っている。まだ小さいのにたいした子どもだ」
カガリはキュウ、と小さく呟いた。腕に抱いた黒いクマをぎゅうと力任せに締め付けている。抱くというよりは絞め殺したいといった風な様子だった。テツロウはそれに気付いて笑みを浮かべた。
「パパを大事にね、お嬢ちゃん」
テツロウはそう、意味ありげに呟いた。

#26：11月22日

『アゲハ、誕生日おめでとう』

昼前にセイのマンションに着いたアゲハは、なにやら大きなファーストフード店の紙袋とセイの為の食事を持って来ていた。
「アゲハ、誕生日だね。おめでとう」
「ありがと」
アゲハは照れくさそうに笑った。ミオが白いケーキの箱を冷蔵庫に仕舞い込んだ。
「私、やっぱり用事で出なきゃならないの。アゲハ、帰る頃にはまた迎えに来るからね」
ミオはくすくす、と笑いながら出掛けて行った。どうやらセイに気を使っているらしかった。テーブルに着き、セイはいつものようにスープの蓋を開けた。アゲハが紙袋からチーズバーガーを取り出した。
「誕生日なのに、もっといいものを食べたら？」
「いーんだよ。今食べたいものを食べれた方が幸せだろ？誕生日だからって普段とそんな変わんないし」
「アゲハは今日で幾つになったんだい？」
「17だよ」
「へえ、」
アゲハは食べ終わった後の包装紙をくしゃくしゃに丸めると、ポテトフライを一つ摘まんだ。そうしてまた別のハンバーガーの包装を開いた。
「よく食べるね」
「これ位が普通なの。僕はハンバーガーが好きなんだ。だから今日は食べられるだけ食べてやろうと思ってさ」
アゲハが見せた紙袋の中にはまだ3個ハンバーガーが入っていた。

どれも違う種類のものだ。セイはそれを見ただけで胸が焼けそうになった。目の前に置いた中華風の野菜スープを一口飲んだ。
「セイもポテト食べる？」
アゲハが指で摘まんだポテトフライを揺らしている。セイは頷いた。
「指まで食べないでよ」
セイがくすくす、と笑った。ポテトフライはまだ温かくて、しばらく馴染みのないファーストフードの塩っ辛い味がした。
「でも、セイが元気そうでよかった。前来た時は死んじゃうんじゃないかって思ったから」
「心配してくれてたんだ？」
「心配で夜も眠れなかったよ。本当だよ？」
「ごめんね、ありがとうアゲハ」
あれから、アゲハが来るまでの間にセイは少しだけ、自分で食事を摂ることが出来た。テツロウに注射を打って貰ったのが良く効いたのかもしれない。熱は不思議なくらいにすんなりと下がった。体もずいぶんと楽になったような気がした。
アゲハが2つ目のハンバーガーを齧った。パンの間からはみ出すほどの、大きな白身魚のフライが挟み込まれたものだ。思いついてアゲハは言ってみた。
「セイ、ハンバーガー食べる？」
セイは今度はうーんと考え込んだ様子だった。
「僕は肉が好きじゃないんだ」
アゲハがにや、と悪戯っぽく笑う。
「じゃあこれだったら食べられるかい？中身はフィッシュフライだよ」
アゲハはセイに手に持ったハンバーガーを向けた。
「懐かしいな。昔はそれ好きでさ、よく食べてたっけなあ」
「セイ、これ全部食べられたら、僕は君の言うことなんだって聞いてあげるよ」

アゲハが少し欠けたハンバーガーを半ば無理やりセイに押し付けて渡した。その何故だか得意げな顔をセイが見つめる。
「約束する？」
「うん。なーんでも」
セイは受け取ったパンを少し齧った。本当に、体の調子が良くなっているようだ。セイはパンの味を受け入れることが出来た。ハンバーガーをセイは少しづつ口に運んだ。アゲハはその様子を伺いながら別のハンバーガーの包装を開いた。中の肉が二段重ねになったチーズバーガーだ。こっちにしてやればよかったと意地悪なことを考えた。
セイが小さくちぎったパンを口に運んでは野菜スープで流し込んでいる間に、３つ目のハンバーガーを平らげたアゲハはさすがに胸焼けがして、コーラを一口飲んだ。いい加減に腹がいっぱいになった。しばらくはハンバーガーを見たくなくなるかもしれない。冷蔵庫にあるケーキの存在を思い出したが、アゲハに入る腹はなさそうだった。そこでふとセイを見た。セイは後残り半分くらいになったハンバーガーを手に固まっていた。
「あんまり無理しないでいいよ。前みたいに気分悪くなっちゃうだろ」
「いや、大丈夫なんだ」
セイはスープを一口飲んだ。
「今日は本当に具合がいいんだね」
アゲハはもう一口コーラを飲んだ。紙袋の中には後一つ、手付かずのハンバーガーの包装と、まだポテトフライが残っている。が、もう食べられる気がしなかった。よりによって一番重い、濃厚な照り焼きの挟み込まれたものだ。セイはいつでもこんな気分なのだろうかとアゲハは思った。セイは意を決したように、残りのハンバーガーを齧った。それから長い時間をかけて、ようやくセイはハンバーガーを一つ食べきった。
「……すごい」

アゲハは思わずそう口に出した。あのセイが、まさか全部食べられるなんて思いもしなかったからだ。よく考えればたったそれだけのことなのだが、アゲハはなんだかとんでもない奇跡を目の当たりにしたような気分だった。当の本人もそう思っているのか、もしくは珍しく人並みの食事を終えて腹が一杯になりすぎたのか、どこか放心しているように見えた。

アゲハは手元の紙ナプキンでセイの口を拭ってやった。ソースでべたべたになっていたのだ。

「よく頑張ったねセイ」

「……アゲハ」

セイは目の前に居るアゲハの顔を両手で固定すると、唇を合わせた。ぺろ、と舌でアゲハの口を一舐めしてから離した。アゲハの口からは別のソースの味がした。

「……セイ、」

突然のことにアゲハがびっくりして固まっていた。

「アゲハ、なんでも言うこと聞いてくれるっていったよね？」

「する前に言えよ、びっくりするだろ！」

「ゴメン」

「いいよ、別に謝んなくたって」

アゲハはセイと目を合わせた。

「さっきのはナシね。だってまだ聞く前だったからさ。特別にもう一回聞いてあげる」

アゲハがそう言って微笑んだ。妙に艶っぽかった。

「キスしてもいい？」

「それはもうさっきしただろ？」

セイはアゲハの髪に留まった赤い蝶々を外した。ぱさっと散った髪の毛を掻き上げる。隠されていた傷痕に触れてみた。

「まだ、日は高いけど。君のことを抱きたい。いいかい、アゲハ？」

アゲハはうーん、と考えるふりをした。

「いいよ」

そう言って笑った。
セイの部屋は遮光カーテンが引かれているので昼でも薄暗かった。アゲハはベッドの上に座った。なんだか懐かしい感じがした。部屋の中はエアコンで今度は暖められているという違いはあるが。隣にやってきたセイがアゲハのシャツのボタンを外した。アゲハはただされるがままに身を任せていた。心のどこか片隅で、僕の誕生日のはずなのになとは思っていた。
アゲハはいつもの癖で髪の毛に触った。そこに髪留めがないのが不安で仕方がなかった。それに気付いたセイがふっと笑った。灯りが全く点いていないので、それほど恥ずかしい気はしなかった。ズボンがサイドテーブルに掛けられた。アゲハは下着だけの姿になった。
「セイ、ちょっと待って」
アゲハはさすがにその一線を越えるのに躊躇していた。
「いいよ」
大人しく手を止めたセイ自身は服を着たままだった。アゲハの体をセイはぎゅうと抱きしめた。
「セイは、脱がないの？」
「だって、僕は恥ずかしがり屋だから」
「何だよソレ」
アゲハは心を落ち着かせるために深く吸い込んだ息を吐き出した。
「セイ、いいよもう」
アゲハが自分で着ていたものを全部脱ぎ捨ててベッドの下に放り出した。ベッドに押し倒されて、セイの顔がアゲハのすぐ近くにあった。セイからはなんだか甘い香水の匂いがした。まだセイは服を脱ごうとはしなかった。
「セイは、本当にどうしようもないヘンタイなんだね」
「愛してるよアゲハ」
「ああそう」
アゲハはくすっと笑った。

肌に直接シーツが触れる妙な感覚があった。セイは目を合わせてから、もう一度、キスしてもいい？と訊いた。アゲハが頷くとセイは再びアゲハの口に触れ合わせた。さっきよりも長い時間そうしていた。多分きっとエアコンの設定温度が高すぎるのだ。アゲハは体が熱くて仕方がなかった。覆い被さるようにしたセイの体温を直に感じる。

「なんだって僕は童貞の前に処女を捨てなきゃならないのかな」

アゲハがそう呟く。セイがそれを聞いて笑った。

「僕はこれ以上はなにもしないよ」

「変なの」

「期待外れだった？」

「ばーか」

セイはアゲハの髪に指を絡ませている。間近でセイのその人形のような顔で見つめられると、同性だというのにアゲハは胸が苦しくなった。

「君のことを抱きしめたいってだけなんだ。嘘じゃないだろ？」

「何かよくわかんない人だね、君って」

セイはアゲハの指と自分の指を絡めるようにして握ると、もう一回キスをした。それからポケットをごそごそと探り、アゲハの指に銀色の指輪を嵌めた。サイズはぴったりだった。アゲハは自分の目の前に指輪を翳して見た。よりによって薬指に嵌められたその指輪には、一羽の蝶々の姿が彫り込まれていた。

「僕からのプレゼントだよ。どう、気に入ってくれた？」

「……最悪。なんでサイズぴったりなんだよ。それも左の薬指って」

セイは幸せそうに笑っている。

「ねえ、アゲハ。僕たち結婚しよう」

「……それ本気で言ってる？」

「うん、すっごく本気だよ」

アゲハは声をあげて笑った。

「あはは、ほんっとに残念な人だね、セイは」

セイが少しだけ悲しそうな顔になった。
「ありがとう。結婚はしないけどさ。キレイな指輪だね」
「気に入ってもらえたなら何より」
セイはよかった、と言ってまた少し微笑んだ。
アゲハがセイのシャツのボタンに手を掛けた。そうして、ボタンを一つ一つ外した。セイは特に抵抗しなかった。シャツをはだけさせると、アゲハはセイからシャツを剥ぎ取ってベッドの下に放り出した。暗くてよくは見えないが、セイの痩せ細った上半身が露わになった。
「セイ、恥ずかしくないよ。あんまよく見えないから」
そうしてアゲハはセイの着ているものを自分と同じように脱がしてやった。セイの背中に、腕を回してぎゅうと抱きしめた。肌が直に触れ合う奇妙な感触が伝わる。
「僕も、……ううん、なんでもないや」
「アゲハ？」
セイを引き寄せるようにして、アゲハはベッドの上に身を投げ出した。自分からセイに覆いかぶせられるような体勢を取りながら、アゲハはセイの足を絡め取った。その棒切れみたいな足はアゲハよりも体温が高かった。アゲハは何故だか、もうどうなったっていいと無責任なことを考えていた。
多分気のせいで、アゲハの気の迷いだった。セイの手が、そうっとアゲハに触れてきた。

「あのさ、考えてたんだけど」
「何？」
「僕は酒も煙草も止めることにしたんだ」
セイはそうなの、と感心したような声を上げた。まだ上気したようなアゲハの頬にそっと手を触れさせる。
「それはいいことだね」

「だって後3年したらさ、堂々と出来るんだし。ねえ、そしたらどっか連れてってよ。僕が２０歳になったら一緒にお酒飲もう」
セイの手をぎゅっと握り返したアゲハの指で、銀の指輪が光っているのをセイは見た。
「うん、そうだね」
セイは少し考えた後、そう言ってにっこり微笑んだ。

#27：赤いバラの花言葉を

セイは何も書き込まずに手帳を閉じた。ミオの仕事の関係で休みが取り辛くなったことと、アゲハがテスト期間に入ったことが重なって、あれ以来ずっとセイはアゲハとは会えずに過ごしていた。

セイはレトルトパウチのスープを常備しておくようになった。アゲハ達のおかげで少しは物を食べる習慣が身につき始めている。温め直したスープをカップに注ぎ、2、3回かき混ぜてから口に含んだ。それなりに美味しかった。

ある時、ミオが電話を掛けてきた。

「私の都合で行けなくなってるんだもの。アゲハ一人でもアナタの家に行ってもいいって例外を作らない？」

セイはそれを断った。

「約束だし、我慢するよ。アゲハは今真面目に勉強してるんだから、邪魔しちゃ悪いしね」

セイは今、そんなことを言った自分を軽く恨んだ。会えない時間が長い分、会えた時の感動が大きいなどというありふれた言葉で自分を誤魔化すのにも限界を感じる。セイは以前にミオが撮ってくれた写真を取り出した。カガリを胸に抱き、仏頂面をしたアゲハが写っていた。彼は写真を撮られるのが苦手なのだ。その顔を見て、反対にセイは笑顔を浮かべた。スープをどうにか飲み干した。

立ち上がろうとして、セイは眩暈を感じた。酷い頭痛がする。セイは自分の体にはっきりとした不具合を感じ始めていた。落ち着くまでの間じっと耐えていた。テツロウに貰ったクスリを飲もうかと思ったが止めた。目を閉じる。そうして気のせいだと自分に言い聞かせた。ポケットから取り出したミントのタブレットをまとめて口に入れた。

セイの携帯から着信音がした。見てみると、知らない番号が表示されている。セイは通話ボタンを押してみた。

「あ、あのさあ、この番号、セイだよね？」
「アゲハ？」
セイは驚いた声を上げた。
「ミオが教えてくれたんだ。そういや、声聞くのも久し振りだね。元気でやってる？」
「うん、元気だよ。アゲハの方こそ調子はどうなんだい？」
セイの耳元でアゲハがため息を吐くのが聞こえてきた。
「どうもこうもないよ。産まれてこの方こんなに勉強したことってないし、ずっと煙草も吸ってないしでさ、禁断症状が出てる」
セイがそれを聞いて笑った。
「ねえセイ、僕友達が出来たんだよ。一人で勉強なんか耐えられなかったからさ、初めてクラスの子に話し掛けたんだ。頭のいい子でさ、僕は教えてもらってばっかなんだけど」
「へえ、良かったねアゲハ。で、その子は男の子？それとも女の子なの？」
「女の子だよ」
セイはそう、と呟いた。その声に表れていたのだろう。慌てた様子でアゲハが言った。
「言っとくけど、ただの友達だからね。なんか僕をずっと怖い人だって思ってたみたいでさ、話したら全然イメージと違うねだって。僕そんなに第一印象悪い？」
「そんなことはないよ。君は美人だからそう思われるってだけだよ」
「……なんでセイってそういうこと平気で言うかなー」
セイはアゲハと初めて会った時のことを思い出していた。アゲハはトレードマークの赤い蝶々と同様に、凛として美しかった。ひらひらと捉えどころのない性格も蝶々に似ていた。
「だって本当のことだもん。アゲハはとっても美人だよ」
「セイ、だから男はそんなの言われたって嬉しくないの」
「……アゲハ。会いたいんだ。すごく」
セイの声はどこか悲しい響きをしていた。

「僕も、そうだよ。セイ、あのさあ。僕ばあちゃんと約束してるんだ。今度のテストで赤点取らなかったら冬休みの間自由にしていいんだって。まあ勿論そうじゃなかったら補習で遊べないんだけど。だからセイ、冬休みの間家に泊まりに行ってもいい？」
「うん、勿論だよアゲハ」
セイは打って変って嬉しそうな声を出した。
「うん、だから頑張るんだ。セイも頑張ってね。ちゃんと一人でもご飯食べるんだよ」
「わかった。楽しみにしてるよ」
「それじゃあ」
携帯電話からアゲハの声が聞こえなくなった。セイは忘れていた頭の痛みを思い出した。部屋の中は十分に暖まっているはずなのに寒気がした。体ががくがく震えだして止まらない。セイは堪らずにベッドに倒れ込んだ。シーツを頭から被った。目を閉じて、体に纏わりついたシーツにアゲハに抱かれているという妄想をした。もう一度あの温かい体に触れたい。アゲハに会いたかった。セイはただそれだけを思って、眠りについた。
あれから月日は流れて、１２月になっていた。
携帯電話の着信音が聞こえて、セイは目を覚ました。メールが届いている。テツロウからだ。セイは毎回同じような言葉で短く返信した。そうしてもう一度目を閉じた。うとうとしていたセイは、玄関のインターホンで起こされた。ゆっくりと起き上がり、玄関のドアを開いた。
「久し振りだね、体の具合はどうだい」
テツロウはそう言って、セイに真っ赤なバラの花束を差し出した。
「君の好きな色だろう、部屋に飾るといい」
目が覚める程の赤い花からはとてもいい匂いがした。その色と対照的にセイの青白い顔はより一層病的に見えた。
「顔色がよくないな」
テツロウはセイの額に手をやった。それからセイの体を軽々と抱

き上げる。ベッドまで運ぶと、その上にそっと降ろした。テツロウはセイをベッドの上で仰向けに押し倒し、その上に覆い被さるようにしてその唇を塞いだ。
「愛しているよ」
そう言ってぎゅうと抱きしめた。テツロウがあとほんの少し力を加えただけで、セイの体は簡単にへし折れてしまいそうだった。
「君は、私を置いて行ってしまうつもりなのかい」
セイが間近にあるテツロウの顔を見つめた。その両目は少し潤んでいるようだった。
「テツ、僕は、あとどれくらい生きられる？」
セイは小さな声で呟いた。テツロウが悲しげな表情を浮かべる。
「何とも言えない。今でさえ予想していたよりも長く生きられているような状態なんだ」
「そう」
セイはふう、と息を吐いた。学校が冬休みに入るまで、あと何日あるのだろう。その日が来れば、毎日アゲハと向き合って暮らせるのだ。待ち遠しくて仕方なかった。
「何か食べるかい」
テツロウがセイに訊いた。セイは首を振った。
「君は少しでも長く生きていたいんだろう、なら受け入れるべきだ」
起き上がったテツロウはキッチンへと向かった。セイもベッドの上で体を起こした。セイには食欲がまるでなかった。アゲハが食べさせてくれるのでなければ、なにも食べられる気がしなかった。
「……アゲハ、」
セイははっとした。
――セイ、僕友達が出来たんだよ。女の子なんだ。
アゲハはそう言った。女の子だ。アゲハはまだ、17歳の男の子だ。セイは息を吐いた。顔も知らないが、その女の子と仲よく勉強をしているアゲハをセイは思い浮かべた。女の子、そうだ。当たり前のことだ。アゲハはこんな一回りも近く年上の病人の相手なんか

をするよりも、同年代の異性と過ごした方が良いに決まっている。
もしかしたら、このまま会えずに過ごす時間はアゲハの中から自分のことを忘れ去らせる方向に向かうのかもしれないとセイは思った。セイはそう考えることでさえ、耐えられそうになかった。自分で自分の首を絞めている。
――アゲハが、自分のことを忘れる？自分はアゲハに捨てられて、置き去りにされてしまう？
セイの体を何か真っ黒な物体が蝕むような感じがしていた。真っ暗で空虚な穴がいくつも開いて、そこから全てが流れ落ちて行った。
テツロウが温め直したスープをセイに差し出した。セイは大人しくそれを受け取った。トマトを使った赤いスープだ。その赤い色にセイはアゲハの蝶の髪留めを連想した。陶器の割れる音がしてテツロウが振り返った。セイの手元を離れたカップが割れて、床に中身をまき散らしていた。
「セイ、」
テツロウがセイに近づく。
「無理をさせて済まなかった」
そう呟いた。セイは屈みこんで割れた破片を拾おうとした。鋭利な欠片がセイの指を傷つけ、赤い血が滲んだ。
「いいんだ。私がやろう。君は休んでていい」
セイは椅子に座らされ、片づけをしているテツロウをぼんやりと見つめた。しばらくたって、また別のスープが用意された。セイはスプーンで掬って、口に運んだ。戻しそうになったが、無理やり飲み下した。半ば自棄になっていた。セイはどうしてもまだ死にたくないという気持ちに支配されていた。テツロウが言った。
「君は、どうしてそんなに寂しがっているんだ？」
セイが顔を上げた。その目から涙が一筋、勝手に溢れ出して流れた。セイは飢えた子どものようにスープを口に運んだ。テツロウが不思議なものを見るかのような目でセイを見つめた。

#28：白とピンクの鳥かご

セイはあれからまた具合が悪くなってベッドに倒れ込んだ。テツロウが持ってきた赤いバラが仰向けの視界に入った。そこだけ生命を象徴するように赤く、濃厚な花の匂いがする。テツロウがベッドに座ってセイの顔色を窺った。

「テツ、もう戻る時間じゃないのかい？」

「いいんだ」

テツロウは優しい目をしていた。愛しいものを愛でるような顔をしてセイの髪を梳くように撫でた。

「でも」

「君のことが心配なんだ、君が気にする事じゃないよ」

セイは自分とは関わりのないテツロウの世界では、どんな暗黙の了解でなりたっているものなのか知らなかった。割とどうでもよかった。

「僕を抱きたい？」

セイは疲れた顔をしていたが、笑って言った。テツロウがいいや、と首を振った。セイはそっと目を閉じた。テツロウはその青白い頬に手を当てていた。セイはそのまま眠ってしまったようで、軽い寝息が聞こえてきた。テツロウはその、病的にも見えるセイの整った作りもののような寝顔をじっと見つめていた。

次にセイが目を覚ました時には、そこにテツロウの姿はなかった。テーブルの上にメモが置いてある。

『一旦戻る。今晩また、君の様子を見に行くよ』

そう書き込まれていた。

セイの頭痛はまだ治まっていないが、眠ったことで少しだけ楽になっていた。カガリに食事をさせようと、セイはキッチンに向かった。昼間テツロウが来た時に、スープを温め直した鍋の中には、まだ幾らかスープが残っていた。よく見るとそれはテイクアウトした

ものではなかった。食べた時は必死で気付かなかったが、それはテツロウ自身が調理したものらしかった。セイには人の込めた愛情の深さがその残り物のスープを見た時に十分に理解できた。テツロウがセイに口癖のように呟く言葉は、嘘ではないのだろう。

セイは戸棚から瓶詰を取り出し、どれにしようかと考えた。最近体の調子が悪いせいで満足にカガリを構ってやれていなかった。セイは一番のお気に入りのチキンライスを選んだ。カガリの部屋に向かう途中で、玄関の鍵が開く音がした。テツロウが戻ってきたようだ。もうそんな時間なのかとセイは玄関のドアを開けた。冬の陽は暮れるのが早く、もう外は真っ暗になっていた。

「起きていたのか、もっとゆっくり寝ていないとダメだよ。治るものも治らなくなる」

「ううん、カガリがお腹を空かせているから」

セイはそう言って、カガリの部屋のドアを開いた。カガリが床から頭を持ち上げる。セイの顔を見て嬉しそうに笑った。続けてテツロウも部屋に入ってきた。カガリがセイの後ろに立つ背の高い男を見上げた。

「ギュウウ、」

カガリがセイに飛びついてきた。どうしたわけか、酷く怯えている。思い当たる所があってセイはテツロウに言った。

「カガリは医者とか、クスリとかが苦手みたいなんだ」

「私はそんなに怖い人じゃないよ」

テツロウが笑う。カガリはセイにしがみ付いたまま離れようとはしなかった。セイはカガリをぎゅうと抱きしめた。

「カガリ、ご飯食べよう？」

カガリがセイの胸元に顔を埋めたまま首を振った。セイにしがみ付いた小さな腕に力が更に込められた。

「今は食べたくないんだね。でもカガリ、お腹が空いたら言ってね」

セイは胸に抱いたカガリをあやすようにその背中をさすった。傍に立って見ていたテツロウが不思議そうな顔を向けた。

「私には、君がなんだか寂しそうに見えるんだ。いったいどうしたんだい？」
セイはふう、と息を吐いた。セイの心の中はテツロウには見透かされているかのようだった。職業柄、得意なのかもしれない。
「君には娘が居るじゃあないか。その子は、あの女とは違う。君を置いてどこにも行かないだろう？君は一人ぼっちじゃない筈だ」
セイは腕の中のカガリを見つめた。カガリの大きな両目が見つめ返してくる。どこかセイに訴えかけるような目をしていた。キュウ、とカガリが鳴いた。
相変わらず、カガリはまともに言葉を喋らない。今にして思えば、数年前の事件でシーナが居なくなってから、カガリは徐々におかしくなっていった。セイと同じで、酷いショックを受けていた。未だ立ち直ることが出来ないでいるのだ。それ以前のカガリのことをセイは思い出そうとしてみた。あの頃、まだたどたどしい言葉で何の話をしていただろうかと。セイはもう夜が更けているのに気が付いた。
「カガリをお風呂に入れようと思うんだけど。手伝ってくれる？」
テツロウは頷いた。
セイはバスルームでお湯を溜めていた。またぼんやりとしている。テツロウの言葉が意味ありげにセイの中で再生された。
――君は、寂しそうだね。いったいどうしてだい？娘はどこにも行かないだろう、君は一人ぼっちじゃないんだよ。
途端に、ああ、とセイは声を上げた。気が付いた。記憶の中でテツロウが嫌な笑顔を浮かべている。思い出した。カガリはあの時セイにこう言ったのだった。
――カガリ、テツおじちゃんきらい。パパ、パパはどこにもいかないよね？カガリはどこにもいかないよ。
セイはバスタブの中の水嵩が増していくのを見ていた。どうして今まで気付かなかったのだろう。セイは今頃になって、カガリがおかしくなってしまった理由がわかった。カガリはセイと離れたくな

い一心で、ずっとあの部屋の中に閉じこもっていたのだ。

#29：空飛ぶクスリ

2人きりになった白とピンクの部屋の中で、テツロウとカガリが向き合っていた。カガリは怯えて、かたかたと体を震わせていた。テツロウがまた黒いクマのぬいぐるみを引っ張り出してきた。押し付けられたカガリはその首元に括りつけられた赤いリボンを思い切り引っ張って、ぬいぐるみの首をしめた。

「ギュウウウウ、」

カガリがテツロウを見上げている。テツロウは冷たい顔でふん、と笑った。カガリのピンクのワンピースを着た小さな体がカーペットの上に押し付けられた。テツロウはカガリの喉元を抑え込んで、顔を近づけた。そして、低い声で言った。

「もう何も喋るな、」

カガリは身動ぎひとつしなかった。その腕に黒いクマをぎゅうと抱きしめている。ただじっとして息苦しそうに顔をしかめた。その表情を見てテツロウは微笑んだ。今度は小さな子どもに向ける類の優しげなものだ。

「カガリ、君はこの部屋から出てはいけないよ。一歩でもね。パパの事が大好きだろう？一緒にいたいと思うんならずっとこの中にいるんだ。君はパパを一人にしちゃあいけないんだよ、わかったね？」

「ウウウウウウ」

カガリが機械が立てるような奇妙な音を出して答えた。テツロウが満足そうな顔をしていた。

セイは急に頭痛が酷くなり、バスルームで蹲った。

「頭が痛いよ、アゲハ」

思わず声に出した。セイはフラつく足取りでバスルームを出た。テーブルの上に置いた、写真のアゲハをセイは見つめた。少しだけ

頭痛が治まった気がした。
　セイはあの、大きな瓶をテーブルの上に置いた。まだ鍋の中にはスープが残っている。セイは温め直すこともしないまま、冷たいスープを皿によそった。大きな瓶の中から取り出した白い錠剤を手の平の上に置いた。まだ足りない。その内に白い錠剤はセイの手の平の上で山になった。
――これだけあれば、この頭痛は治まるだろうか？
　セイは震える指で一つ口の中に入れた。嫌な味がした。残りをざらっとスープの中に放り込んで混ぜ合わせた。スプーンで掬うと、セイは口に運んだ。苦い味の溶け出したスープを、皿を持ち上げセイは掻き込むように口に入れた。

　セイが風呂の支度をすると言ってからもう何十分も過ぎている。幾らなんでも遅すぎる、とテツロウは気付いた。セイがバスルームで倒れているのではないかと思って、様子を見に行った。そこには誰も居なかった。出しっぱなしの水道を止めた。
　その時、キッチンでどさ、と何かが落ちたような物音がして、テツロウは見に行った。セイが床に倒れていた。テツロウが慌てて駆け寄る。その傍らで、スープ皿が転がっていた。テーブルの上に、なにやらクスリを溜めこんだ瓶が置いてあるのを見つけた。よく見ると、床に飛び散ったスープの中にはその白い錠剤が混じり込んでいる。
「……なんてバカなことを、」
　テツロウはセイの体を抱き起した。セイには意識がまだあった。焦点の定まらない目をしている。テツロウの腕の中でぐったりしていた。
「セイ、いったいどうしたんだ、なんでこんなことを」
　テツロウはセイの口の中に指を入れ、胃の中にあるものを吐き出させた。スープに混じって白い錠剤がざあっと喉の奥から溢れ出た。

セイにさらに塩水を飲ませて、もう一度吐き出させる。セイは何度か咳き込んだ。苦しそうな息の合間で、うわ言のように呟いた。
「……アゲハ、」
「何？」
セイが寂しそうにふっと笑った。
「アゲハに、会いたいんだ」
セイはそう言って意識を失った。テツロウは汚れたシャツを脱がせて、セイをベッドに寝かせた。テーブルの上に、一枚の写真があるのに気が付いた。その中にはテツロウの知らない少年がカガリを抱いているのが写っていた。この少年が、セイの言うアゲハ、なのだろうか。
テツロウはそう思った。そうして理解した。セイが寂しがっているのはこの少年に会いたがっているからなのだ。テツロウは、アゲハが居れば、そうすればもうセイが苦しむことは無くなるはずだと考えた。多少歪んではいるのだが、それでもテツロウはセイを心の底から愛していた。彼がそう望むのであれば、自分に出来ることは一つだ。

もうほとんどの生徒が帰った後の放課後の教室で、アゲハはユウヒと机をくっつけ合わせてテスト勉強をしていた。アゲハがわからない所を説明しているユウヒは、だいたい一度でアゲハが理解できるようなのを見て言った。
「アゲハ、勉強やれば出来るんじゃん」
「無理無理。だってやりたくないんだもん」
ユウヒはカバンからこっそりドーナツの入った袋を取り出した。
「怒られない？」
「ヒミツだよ」
アゲハはユウヒからドーナツを一つ受け取った。
「ね、アゲハには好きな子っている？」

ユウヒがドーナツを齧りながら訊いてきた。アゲハは好きな子、というのには少し響きが違うかなあ、と思って首を振った。シャツの中ではセイに貰った指輪を、細い鎖に通したものが揺れていた。
「えー、12月だよ？クリスマスに一人ってさみしーじゃん。私も人のこと言えないけどさ」
「うーん。好き、っていうのとは違う気がするんだ。よくわかんないけど」
そう答えたアゲハに、ユウヒは興味津々といった様子だ。もはや勉強はそっちのけでお喋りに夢中になった。
「アゲハ、やっぱり相手いるんでしょ？」
「うん、まあ……いるよ」
「いーなあ」
「ユウヒだって、その気になってるって先輩とはどーなのさ」
「うん、そーゆうの詳しい友達に調べて貰ったらさ、今付き合ってるって子は居ないんだって。だからチャンスでしょ。アゲハ、色々教えてよ」
「うーん、やっぱ女の子ってこわい。そーゆーとこついていけない」
アゲハは、まさか「好きなら捕まえて、首から鎖で繋いで閉じ込めとけばいいんだよ」とアドバイスするわけにもいかないなと思った。
「参考にならないと思うよ、人それぞれだし」
そうとだけ返した。
「アゲハ、なんか大人っぽい」
ユウヒはそう言いながら、2つ目のドーナツを取り出して齧った。アゲハはいらないと言って断った。見回りをしている教師が、教室の中を覗き込んできた。まだ居残っているのはアゲハとユウヒの2人だけだった。
「君たち、勉強している所悪いが、もうそろそろ帰りなさい。後は、家でやっておいで」
「はーい」

アゲハは大慌てで口の中に残りのドーナツを押し込んで隠したユウヒの分も大きめに返事を返した。その様子が可笑しくて思わず笑ってしまった。
「あっぶなかったあー」
「ユウヒ、だからバレたら怒られるって」
アゲハ達は教室を出て、購買の自動販売機の前まで来た。
「喉渇いてない？なんかおごるよ」
「いいの？うーん、私オレンジジュースがいい」
ユウヒはオレンジジュースを受け取ると、一息に半分近くまで飲んだ。アゲハはあったかいお茶を買った。ドーナツで口の中が甘ったるくなっていた。ドーナツを食べた後に甘いジュースが飲めるユウヒが特別なのか、女の子というのはそういうものなのか、アゲハにはわからなかった。飲み物を持って、近くの石段に2人並んで座った。
「うーん、でもなんだか自信がないや。だって先輩カッコいいし、背高いし優しいしさ。私なんかと付き合ってくれるのかなー」
「そんなのやってみなきゃわからないよ。もしかしたらユウヒみたいな子が好きかもしれないじゃん」
「アゲハ、やっぱ優しーよ。ほんとなんで今までコワイって思ってたんだろ」
「僕があんまりバカだから愛嬌があるように見えるだけだよ」
ユウヒはにこっと笑った。オレンジジュースを飲み干して、アゲハに言った。
「うん、よし決めた。私このテストが終わったら先輩に思い切って告白してみる」
「おー」
アゲハが手をぱちぱちと叩いた。
「ねえアゲハ、私がフラれたら慰めてよ。ドーナツやけ食いすんだ、付き合ってくれる？」
「また太るよ」

「もー、そういうこといいっこなしー」
ユウヒは笑って、立ち上がった。スカートに付いた土埃を払う。
「じゃあ、アゲハ、また明日ね！」
「うん。ばいばい」
ユウヒは校門まで走って行った。
彼女はドーナツが大好きで、そのせいでかややぽっちゃりした女の子だ。とても愛嬌があって、可愛らしい性格をしていた。今までぼっちだったアゲハが声を掛けることが出来たのは、そんな彼女になんだか自分を受け入れてくれそうな雰囲気を感じたからだった。始めこそユウヒも警戒した様子だったのだが案外すぐに打ち解けることが出来た。それはアゲハが自覚している通り、見た目に反してアゲハがあまりにもバカだったということもある。
ユウヒはアゲハを思ってたのと違って優しい、と言うが、アゲハの方もユウヒがこんなはっちゃけた女の子だとは思ってもみなかった。２人は妙に気が合った。アゲハが怖々と声を掛けてからまだ数日だというのに、まるで昔からの友達のように好きな子の事まで、とにかくなんでも話した。それにユウヒは頭のいい女の子で、教えるのも上手なこともあり、今度の試験ではアゲハは彼女が頼りだった。
もう辺りは薄暗くなっていた。アゲハも帰ろうかと立ち上がった。校門を出てすぐの所に、見掛けない黒い車が停まっているのが見えた。妙に気になって、アゲハはその車を見ていた。その内に中から一人の男が降りてくるのが見えた。背の高い男だった。男は何故かまっすぐにアゲハに向かって歩いてきた。
「君が、アゲハ君かな？」
知らない男に声を掛けられて、アゲハはその顔を見上げた。男はアゲハを見て意味ありげに笑っていた。

セイが再び目を覚ましたのは白い病室のベッドの上だった。自分

がバカな事をしてしまったのだということに、セイはしばらく経って気が付いた。セイの細い腕には点滴の管が繋がれていた。頭痛がしてきて、目を覚ましてからは再び眠ることが出来そうになかった。
セイははっと気が付いて部屋の中を見廻し、今日の日付を確認した。あれから、もう一週間以上が過ぎていた。セイは背筋が寒くなった。その間、カガリはいったいどうしているのだろう。思わず起き上がった。頭を半分にかち割られたような痛みが走った。看護師が気付いて、慌てて駆け寄ってきた。セイはまたベッドに仰向けに寝かされた。点滴の管が刺し直された。
「カガリ、」
セイが呟く。しばらくして病室にテツロウが入ってきた。白衣を着ている。
「気が付いたんだね、良かった」
「テツ、僕は……、カガリ、カガリはどうしてるの」
「落ち着きなさい。君は自分のしたことがよくわかっていないようだ。危ない所だったんだよ。あのままだったらそのいう君の娘を心配することだって出来やしなかっただろう？」
セイはぐ、と口を噤んだ。テツロウが厳しい表情をふっと緩める。
「大丈夫だよ。君の娘なら私が代わりに面倒をみていたから。元気でいるよ。安心していい」
「テツ、」
セイは安堵してふう、と息を吐いた。
「体は大丈夫かい？私としては、君をこのままここで入院させておきたい所なんだけど」
セイは首を振った。
「僕は、もうどうせ長くはないんだろう？だったらここじゃなくて自分の部屋で過ごしたいんだ。カガリと一緒に居たい。わかってくれるよね？」
テツロウは悲しげな顔をした。
「きっと君はそう言うだろうとはわかっていたんだがね。明日にで

も退院の手続きをとろう。だから今だけは、ここでゆっくりお休み」
テツロウはそう言って病室を後にした。
１２月も、もう半ばを過ぎていた。セイはアゲハのことを思った。試験の結果はどうだったのだろう。もしかしたら、電話で連絡でもあったかもしれない。アゲハには元より病気のことも話してはいなかったので、入院を知られるわけにはいかなかった。そのこともあって、セイはどうしても早く家に帰りたかった。アゲハと居られるのなら、この頭痛も耐えられそうな気がした。
翌日、セイはテツロウの車で送ってもらい帰宅した。直ぐにカガリの様子を見に行った。テツロウの言った通り、カガリはきちんと世話をされているようだった。眠っているベッドに近寄ると、ぱち、とその目が開いて、セイを見た。見る間に涙がじわりと滲み出し、カガリはぽろぽろと泣き始めた。セイはカガリを抱き上げた。カガリがセイの胸に顔を押し付けてきた。
「ごめんね、カガリ。もうひとりぼっちにはしないよ」
「うあああああああん」
カガリは声を上げて泣いた。泣き疲れて眠るまで、セイは離れていた時間を取り戻すようにカガリを抱いてあやしていた。
セイはキッチンでコップに汲んだ水を飲んだ。自業自得だが、出された錠剤を飲むのは少しためらわれた。部屋の中は綺麗に片付いていた。片隅に、赤いバラが生けられていた。玄関で物音がした。テツロウが再びセイの部屋を訪れたようだ。セイはキッチンを出て玄関へ向かった。テツロウはその腕に、毛布に包んだ何かを抱えていた。かなり大きなものだ。
「何？」
ふっと笑ったテツロウは、毛布を少し捲った。それを見て、セイは息を飲んだ。テツロウが抱えていたものは、アゲハだった。
「アゲハ？」
アゲハは目を閉じている。近づくと、寝息が僅かに聞こえてきた。どうやら眠っているようだ。

「君のだよ」
そう言って、テツロウが毛布に包んだアゲハをセイに抱かせた。セイの腕の中に、アゲハの重さと熱が加わった。セイはアゲハの顔を見た瞬間に、今まで感じていた頭痛も忘れるほど幸せな気分になった。その顔色がどこか青白いのにも気付かなかった。
ふと、どうしてテツロウがアゲハのことを知っているのかが気になった。セイは毛布を開いてみて、言葉を失った。後ろによろめいて、壁に背中を打ち付けた。そのままずるずるとアゲハを抱えたまま床に座り込んだ。
セイの体はがくがくと震えていた。その腕の中でアゲハが目を閉じている。裸だった。セイはアゲハの腕を取った、アゲハには、両方の手首と足首が無かった。

#30：飛べないアゲハ

街は色鮮やかなクリスマスのイルミネーションで飾りつけられていた。街路樹も様々な色に点滅する小さな電球を身に纏っている。アルバイトらしき青年が、赤いサンタクロースの衣装でチラシを配っていた。セイが受け取ったものはスーパーの日替わり奉仕品のチラシだった。その内容も、年の瀬を彷彿とさせるラインナップがずらりと並んでいる。

まだ夕方の時間帯だが、辺りはすでに薄暗かった。見上げた空が曇っているせいもあるのだろう。セイは通りすがりの花屋で、一際目を引く赤い色をしたバラを買った。１０本ほどまとめて花束にして貰った。ふわっと良い匂いがした。赤く色付いたポインセチアの鉢植えが並べられていた。店頭にある、小振りなモミの木もオーナメントを吊り下げて、頂上には金色の星を模したものが飾り付けられていた。

どこかからクリスマスソングが聴こえてきた。開けた場所で、やたらと大きなクリスマスツリーが設置されているのが見えた。音楽はそこから聴こえてきているようだ。行き交う人々は皆どこか楽しそうで、忙しそうで、また幸せそうに見えた。いつものスーパーの帰り道、セイはやけに上機嫌だった。ちらちらとセイの周りを白いものが舞っている。見上げると、曇っていた空から雪が降り始めていた。

自分の部屋まで帰り着き、セイは玄関の鍵を開けた。がちゃん、とドアの開く音に反応して、アゲハが顔をその方向に向けた。ベッドサイドのぼんやりしたオレンジ色の灯りだけが室内を照らしていた。セイは部屋の灯りのスイッチを入れた。アゲハが眩しそうに目を細める。

「アゲハ、起きてたのかい？」

アゲハはセイを見上げた。

アゲハは肩に付く位までに伸ばしたこげ茶色の髪を、顔の左側面にある古い傷痕を隠すようにして赤い蝶の髪留めで纏めていた。少年というよりは、美しい少女のような顔立ちをしている。じっとセイを見つめている、その顔色はどこか青白く頬が痩けていた。

セイがベッドの傍に来て屈み込み、アゲハの髪留めを外した。赤い蝶を自分のシャツに留まらせる。セイはそっと手を伸ばし、アゲハの顔に触れた。髪の毛を掻き上げる。引き攣ったような傷跡が露わになった。

「きれいだ」

セイはそう呟いた。アゲハの顔を両手で固定して、うっとりとしたような両目で見つめながら。アゲハは虚ろな表情を浮かべたまま押し黙ってされるがままになっていた。セイの方を見てはいるが、何も見ていないようだった。セイはアゲハの髪を指で梳いて、再び赤い蝶をそこに留まらせた。

「ただいま、アゲハ」

アゲハは体を起こしたままセイを見つめていた。

「やだなあ。ちゃんとおかえりって言ってよ」

おどけた口調でセイが言う。アゲハが聞き取れない位のか細い声でおかえり、と言うのが聞こえた。セイはアゲハをぎゅうと抱きしめた。アゲハの背中はぐっしょりと汗で濡れていた。風邪を引かせてはいけないと思ったのだが、少々エアコンの設定温度が高すぎたのだろうか。アゲハが体を震わせていた。しゃくり上げる声がセイのすぐ近く、耳元で聞こえてきた。体を離すと、セイはアゲハの顔を見つめた。顔を真っ赤にしてアゲハが泣いている。

「……どうしたんだい？」

アゲハが恥ずかしそうにセイから顔を背けた。どうしたのかと思ってよくよく見ると、シーツの足元がずぶ濡れになっていた。セイはアゲハをベッドから抱き上げた。

「ゴメンね、気持ち悪かっただろう。お風呂に入ろうか」

セイはアゲハを抱えて、バスルームに向かった。

バスルームで座らせたアゲハに、セイはさあさあと温かいシャワーを当てた。不快な感覚が薄らいだのか、アゲハの表情が幾分か穏やかなものになった。セイはバスタブに溜めたお湯の中に、思いつきで泡の立つタイプの入浴剤を入れてみた。ピンク色の泡がバスタブの中一杯になった。ふんわりと花の匂いがした。シャボン玉が幾つか浮かんではぱちんと弾けて消えた。セイはアゲハを抱き抱え、そっとバスタブの泡の中に降ろした。

「大丈夫？」

アゲハが頷く。セイはアゲハの髪の毛を泡だらけにして洗った。セイは幸せそうな顔をしていた。表面の泡に向かってアゲハが息を吹きつけた。泡がバスタブの縁に吹き寄せられた。アゲハの髪を洗い終えると、セイはタオルで髪を拭って、頭に巻いた。

「着替えとか用意してくるから、ちょっと待っててね。逆上せそうになったら声掛けて。でもすぐ戻ってくるよ」

セイはそう言い残してバスルームを出て行った。

セイはああ言っていたが、少し温い位のお湯だったのでその心配はなさそうだった。アゲハは人工的な花の香りで少し心が落ち着いてきたように思った。そうすると、急に恥ずかしさが込み上げてきた。仕方なかったとはいえ、セイに後始末をさせてしまっているのだ。今。アゲハは恥ずかしくて仕方がなかった。ぱしゃ、とお湯を掻き回して、泡をバスタブの中から押し流した。泡は尽きることなく生まれてきては、ふわふわとアゲハの体をピンク色に包み込んだ。アゲハは泡で遊んでいた。セイを待つ間、することがなくて退屈だったからだ。

「お待たせ」

そう言いながらセイがバスルームに戻ってきた。アゲハをバスタブから抱え上げようとして、セイは足を滑らせた。泡で足元が滑りやすくなっているのだ。それに、セイの腕にはアゲハを抱き抱えるのが大仕事だった。セイは服を着たままバスタブの中に頭から突っ込んだ。

すぐにざば、と顔を上げた。セイが泡だらけになっているのを見て、アゲハが吹き出した。
「まぬけ」
けらけらとアゲハが笑っている。髪の毛から水を滴らせながら、セイも笑いだした。狭いバスタブの中では、セイはアゲハとほぼ密着するようになっていた。セイがアゲハの背中に腕を回して、自分の方へと引き寄せた。ふわ、といい匂いがした。
「逆上せてない？」
「うん、平気。セイは大変だね、お気の毒に」
「いいんだ。君と一緒に入れるなんてラッキーだろ？」
セイはそう言いながら水浸しになったシャツを脱いだ。濡れた服というのはこうも脱ぎにくいものかと思った。
「まさか、ここでするつもり？」
アゲハが言った。
「これは事故だし」
セイは着ていた服をバスタブの縁に引っ掛けた。
「泡だらけだから恥ずかしくないよ。ねえ、アゲハ」
セイはそう言って、アゲハにそっと口付けた。
大きめのバスタオルで包んだアゲハを抱き抱えて、セイは寝室に戻った。シーツが新しいものに取り換えられていた。部屋の片隅には赤いバラが生けてあり、花の香りが室内を満たしていた。
セイはアゲハに替えの下着を身に付けさせた。アゲハはトイレに自力では行けないのだが、オムツを穿かされるのはどうしても嫌だと拒んでいた。セイはアゲハの体のサイズよりもやや大きいサイズのパジャマに着替えさせた。袖口の長いものを選んで、自然とそうなった。シンプルな青と白のストライプ柄だ。
「アゲハ、ご飯食べよう？」
アゲハは首を振った。
「いらない。それより眠いんだ」
「そう、」

セイはちょっとどうしようかと悩んだが、キッチンへ行って水を汲んだコップとクスリを持って戻ってきた。痛み止めだ。食後のものだったが、セイは袋から取り出すとアゲハの口に入れた。コップをあてがってやっても、どうにかクスリを飲み込める程度にしかアゲハは水も飲もうとしなかった。

セイは毛布でアゲハの体を包み込んだ。そうして、ベッドに座ってアゲハの体を抱き抱えた。毛布に包まったアゲハは、本当に蝶々のさなぎのように見えた。セイはあやすように背中を撫でた。アゲハの顔を見つめると、なんだか不安そうな目をしていた。セイはふっと微笑んだ。

「大丈夫だよアゲハ。僕はここに居るからね」

アゲハがベッドサイドの小さなテーブルに顔を向けた。何かをセイに訴えかけている様子だ。セイがその方向を見ると、風呂に入る前に外した蝶の髪留めが置いてあった。セイは手に取り、アゲハの髪にぱちん、と留めた。まだ何かあるようだ。そこにはセイがアゲハに贈った、指輪を通したネックレスがあった。セイはそれをアゲハの首に掛けた。アゲハがようやく安堵したように息を吐いた。

「アゲハ、トイレに行きたくなったら言ってね。お腹が空いたらご飯を食べよう。僕が食べさせてあげる。お風呂にだって毎日入れてあげるよ。アゲハは面倒くさがりだからね、でも大丈夫だよ。僕が全部やってあげる。もう何も、面倒くさいことしなくたっていいんだよ」

セイはワザとらしい口調でそう言った。

「じゃあさ、何で、何の為に僕は生きてるの？」

アゲハがセイを見て言った。アゲハは自分の身に降り懸ったことがあまりにも酷く、ショックが大きすぎて逆に冷静になっていた。そういうよりはもう全てを諦めてしまって、無気力になっていた。

「君は僕の熱帯魚なんだ」

セイが答えた。

「また僕の呼び名が変わってない？」

セイが笑っている。
「君が居てくれるってだけで、僕はどうしてこんなにも幸せな気持ちになれるんだろうね。自分でもわからないんだ」
「……僕にはわかるよ。セイがとんでもないヘンタイだってことがね」
「相変わらず酷いことを言うなあ。うん、蝶々も素敵だけど」
セイはそこで一旦言葉を区切った。
「水槽の中の熱帯魚はね、どんなにツンと澄ましたところで、一生その狭い水の中からは出られないんだよ。絶対にね」
アゲハはそれが暗に自分を指していることに気付いた。
「外に出たら、どうなるのさ」
セイは笑った。
「外に出る方法なんて一つしかないんだ。君にはわかるだろう？」
アゲハはセイの腕の中で、そのにやけたような笑みを浮かべた顔を見つめていた。
「僕はいつか熱帯魚を飼ってみたくて、偶に見に行ってたりしてたんだ。僕は水槽の中で浮かんでいる魚を見つけるのが好きでさ。終いには飼いたいんじゃなくて、それを見たくてペットショップに行くようになったんだ」
「……相変わらずセイはヘンな人だね。魚の死体が見たいんだったらスーパーに行けばいいじゃないか。パックに入ってそれこそいっぱい並んでるだろ」
「そうなんだよ。でも、そうじゃなかった」
「何それ」
「君もそういう目的で行ってみればわかるよ」
セイの言っている言葉の意味をアゲハはわかりたいとは思わなかった。エアコンで暖められているので、毛布の温もりは過剰に思えた。アゲハに気を使って、セイはわざとアゲハの体を包み込んで抱いているのだ。その上に、ネックレスに通された指輪が光っていた。もう嵌めることの出来ないそれを見て、アゲハは少し寂しそうに目

を伏せた。

#31：ミネストローネ

アゲハが眠りから覚めると、すぐ隣でセイが嬉しそうに笑っていた。

「アゲハ、おはよう」

セイがうっとりしたような目をして言った。アゲハはまだ眠気が残る頭で2、3回まばたきした後、ようやくそのことに気が付いた。

「おはよう……セイ、もしかして僕が寝てる間中ずっと見てたわけ？」

セイはにっこりと笑っている。アゲハはため息を吐いた。セイならやりかねない。

「アゲハがちゃんと目を覚ますかどうかが気になって仕方がないんだ」

セイはアゲハの体の下に腕を差し入れて、抱き抱えるようにして上半身を起こした。

「アゲハ、トイレ行きたくない？」

アゲハは首を振った。

「恥ずかしがらなくってもいいんだよ？」

「……うん、大丈夫」

「そう。ねえ、顔洗ったげよう。ちょっと待っててね」

セイはそう言い残すと部屋を出て行った。そうして、洗面器に水を溜めたものを持って戻ってきた。アゲハを椅子に移動させると、髪の毛をヘアバンドを使って持ち上げた。

「目瞑っててね」

セイは本当にそういった職業に向いているんじゃないかとアゲハは思った。泡立てた石鹸でアゲハの顔を洗う、その手付きはとても丁寧だった。その後で歯ブラシを持ち出して、セイはアゲハの歯を磨いた。普段は自分でしていることをこうして他人の手でしてもらうのは妙な感覚だった。申し訳ないと思う気持ちもあるが、セイが

そうすることで、何故かたまらなく楽しそうで幸せそうな顔をするので、アゲハは何とも言い難い気持ちになった。
「アゲハに化粧してみたいって言ったら怒る？」
セイがまた下らないことを言った。
「訊くまでもないよね？」
アゲハがそう答えた。
「うん、そんなのしなくたってアゲハは十分キレイだよ。でもだから逆に化粧したらどうなるかなって興味が湧いちゃってさ」
「僕にはそーいう趣味はないよ」
「うん、僕はアゲハにこれ以上惚れちゃったらどうしようか困るから止めとくよ。きっとあんまりにもステキすぎて死んじゃいかねない」
「そりゃあ、そうしてくれるとありがたいよ。もう……」
セイはアゲハの日常生活を、以前と変わらない様に何不自由なくサポートしてくれていた。カガリのこともあり、セイはいったいいつ休んでいるのだろうかとアゲハは思った。自分のことをしている時間なんか取れていないのではないだろうか。その割にはセイがとても元気そうに見えたので、アゲハはかえって心配になった。
アゲハがテツロウによってここに連れてこられてから、早8日が過ぎていた。
――あの日、学校帰りに黒い車に乗った男を見た。アゲハの記憶はそこで途切れている。次に目が覚めた時には、どこかの病室のような場所で、アゲハは今の状態にされた後だった。アゲハは自分の目で見ているものが信じられなかった。とんでもない痛みとで、アゲハは狂ったように泣き叫んだ。それがあまりにも煩いのでテツロウはクスリを与えて強制的に眠らせていた。アゲハはクスリが切れて、目を覚ますのが嫌で仕方がなかった。痛いのは嫌だった。もうこのままずっと真っ暗な中で目を閉じていたいとアゲハは思っていた。
毎回、目が覚めた時にはテツロウが、アゲハに薬品を与えながらじっと目を見てこういうのだ。君はセイのものだ、と。セイが寂し

くないようにずっと傍に居なければいけないんだと。アゲハには意味がわからなかった。ただ、アゲハはもう逃げることは勿論、自分一人では生きていくことは出来ないし、死ぬこともまた出来そうになかった。

ある日、目が覚めた時にはそこにセイが居た。セイはとても悲しそうな目をしていた。アゲハはセイの顔を見た時、心の底から安心しきったように声を上げて泣いた。セイはそれから、アゲハが辛くならないように、出来る限り傷に目がいかないように気を使っていた。以前となにも変わらないかのように。アゲハに対しての、珍妙な物言いもそのままだった。そのおかげか、数日ほどでアゲハの心はまた前と同じように、セイと下らない言い合いが出来るまで回復することが出来た。

ただどうしたって、下の世話まで頼らなければならないことには慣れることが出来そうになかった。アゲハはトイレに行くのが嫌でたまらなかった。単純に恥ずかしかった。セイは全く気にしない風でいてくれるのだが。

「アゲハ、朝ごはんにしよう。ねえ何が食べたいかな？」

アゲハは例によって首を横に振った。セイは困った顔をしている。

「ねえ、アゲハ。そろそろまた痛み出すと思うよ。これは食後のクスリなんだ。少しでもいいから食べなきゃ胃を悪くするよ」

アゲハは下を向いたままだ。セイは苦笑した。

「あの頃と逆だね」

セイは温めたスープをアゲハに差し出した。アゲハは無言のまま泣いてそれを嫌がった。セイは仕方がないなあ、と呟いて、アゲハに痛み止めだけを飲ませた。そうして再びベッドに移動させた。

スープはそのままセイの朝食になった。セイも食べる気にはなれなかった。スプーンを持つ手ががたがたと震えた。セイ自身もまだ極度の食欲不振から立ち直ったわけではないのだ。アゲハはセイがどうにかこうにか食事をするのをベッドの上から見つめていた。もう、セイに食べさせてあげられないことが悲しかった。

「セイ、」
アゲハはセイに声を掛けた。セイが顔を上げる。アゲハはベッドまで来てほしいといった仕草をしてみせた。セイはスプーンを置いて、アゲハの隣に座った。アゲハはセイの体を後ろから手を回して、ぎゅうと抱きしめた。
「……ゴメンね。セイは、ちゃんと食べなきゃダメだよ。僕の世話までやいて、ほんとは疲れてるだろうに」
アゲハは、静かに泣いていた。セイはアゲハの腕を取り、体の向きを変えて向かい合うようにしてアゲハに口付けた。
「僕の心配をしてくれてありがとう」
セイはそのまま、アゲハをベッドの上に押し倒した。セイはアゲハのシャツのボタンを全て外して、露わになったアゲハのお腹を舐めた。柔らかくてぬめった生温かい感触にアゲハの体がぞくぞくした。
「セイ、僕はスープじゃないんだけど」
セイがにや、と笑った。アゲハの胸元で指輪が光っている。それを持ち上げ、セイはアゲハに見えるようにした。
「君は僕のものだよ」
「……そうゆうこと言わないでよ。恥ずかしい」
アゲハはテツロウの言葉を思い出した。暗くて、不安な気持ちにさせる声だ。今はセイの行為に全ての意識を持っていかれている。アゲハはセイに、自分のものだと言われても嫌な気分はしなかった。セイはアゲハの、ここ数日ですっかり肉の削げ落ちた腹や胸を舐めた。首筋に息が掛かり、アゲハがくすぐったそうに声を上げる。セイは満足そうに笑った。合間に軽く歯を立てたり、吸い付いたりしてアゲハの体を弄った。アゲハはだんだん妙な気分になってきた。パジャマのズボンにまで手が掛けられたのをアゲハは慌てて制した。
止められて、セイの濡れたような目がアゲハをじっと見つめてくる。苦しくてたまらないといった様子だった。アゲハは自分からセイに食いつくようなキスをした。それは合意の意味合いを持ってい

た。セイがアゲハのズボンをベッドの下に投げ捨てた。直に触れたセイの体温はアゲハよりも高く、心地よかった。
「セイ、気持ちいい？」
アゲハが息も絶え絶えにそう呟いた。セイはふっと微笑んで頷いた。

「ねえ、アゲハ。また一緒にお風呂に入らない？」
「嫌だよ、狭いもん」
「でもこのままじゃ気持ち悪いじゃない」
「……うん、いいよ。一緒でも」
アゲハは顔を真っ赤にしてセイから顔を背けていた。
「今更何を恥ずかしがってんのさ？」
セイは泡立ったお風呂が気に入ったのか、今回も泡でいっぱいになったバスタブにアゲハと一緒に入った。
「痛くない？」
「大丈夫だよ」
セイは濡れて艶めいたアゲハの髪に指を差し入れた。
「アゲハの髪はとってもキレイだね」
セイがお湯を泡立たせるのはアゲハに自分の体を意識させないためにも役立った。この時ばかりは裸にならなければいけないから、それ以外では丈の長いシャツを着させていた。
「お腹すいたよね？」
アゲハはまた首を振った。
「嘘ばっかり。もう何日もまともに食べてないじゃない」
「……セイに言われたくないよ」
セイはキッチンを探り、レトルトパウチのスープをうっかり切らしてしまっているのに気が付いた。
「アゲハ、大変だ。食べるものがないから買い物に行って来なきゃ。何が食べたい？」

「……気分が悪いんだ。何も欲しくない」
勿論それは嘘だ。セイはアゲハの額に手を当てた。
「熱はなさそうだね」
セイがアゲハを後ろから抱きしめた。セイの手がアゲハのシャツを捲り、腹を弄っている。
「もしかして妊娠させちゃった？」
「……バカ！セイのバカ！」
アゲハがセイの腕を振り解いた。はは、とセイが笑う。
「カガリもお姉ちゃんかあ」
「もう、わかったよ。セイ、僕もおなかすいた！だから僕の好きそうなものなんでもいいから買ってきてよ」
「はいはい」
セイが出掛けて行った後で、アゲハははあ、とため息をついてベッドに倒れ込んだ。
しばらくして、セイが帰って来た。またやけに大荷物だ。テーブルの上に置いたビニール袋の中身は、ツナマヨネーズのお握り、出来合いの焼きそば、シーフードのカップラーメンが一つ。ツナと卵とハムのミックスサンドイッチ、コロッケの挟まった総菜パン、から揚げ弁当。チーズバーガーにポテトフライ、アイスクリーム、コーラ、コンソメ味のポテトチップスなど。アゲハが好きだと言ったもの、好んで食べていたものばかりが入っていた。全部そうだった。セイは皆覚えていたのだ。
「こんなに買ってきていったいどうするのさ」
「君が今食べたいものが何なのかわからなかったんだ」
セイがお握りの包装を剥がしてアゲハの口元まで持って行った。アゲハが首を振った。ぽと、と涙がセイの手に落ちた。セイはお握りをテーブルの上に置いた。
「そうだアゲハ、またカレー作ろうか。きっと前よりは上手く作れると思うんだ。それとも他に……」
「セイ、」

アゲハがセイを呼んだ。セイがベッドに近づく。アゲハは泣きながらセイにしがみ付いた。セイはよしよし、というようにアゲハの背中をさすった。泣き止むまでの長い時間ずっとそうしていた。泣きながら、アゲハは思った、たくさん買った食べ物はきっと食べきれずに腐ってしまうんだろう。そしてそれらは捨てられることはなく、台所の片隅に置かれたままになるのだ。それは、アゲハとの思い出だから。バカバカしいけれど、セイはそういう人だ。

「セイ、僕サンドイッチが食べたい」

セイが嬉しそうな顔をしてサンドイッチのフィルムを剥がした。ツナのサンドイッチが口元にあてがわれ、アゲハは無理やり口の中に押し込んだ。セイはその後でレトルトのスープを飲んでいるようだった。食後のクスリを飲み終えると、また眠気が襲ってきた。アゲハがセイにそう伝えると、セイはアゲハをベッドに寝かせて、上からシーツを掛けてくれた。

「寒くない？」

アゲハは頷いた。

「トイレは平気？」

アゲハは少し意識を集中してみる。

「うん、今は大丈夫」

「そう。もし行きたくなったらいつでも呼んでね」

セイはそう言うと、部屋の灯りを消した。オレンジ色のぼうっとした明かりだけが室内を照らしている。今が何時なのかはわからなかったが、アゲハは安らいだ気持ちで眠りについた。

セイはキッチンのテーブルで頬杖をついて考え事をしていた。なんだか、アゲハは本当にシーチキンが好きなんだなあと思った。カレンダーを見る。明日はクリスマスイヴだ。

セイは料理が出来ないので、何かそれなりの御馳走やなんやでも買ってこようと思うのだが、果たしてアゲハは食べられるだろうか

？いくらクリスマスだとか言ってみても、アゲハがその時に食べたいものがもしやカップラーメンだったとしたら、その方がアゲハは幸せだというだろうか？いやでもしかしあんまり侘しくはないか？考えは堂々巡りをしていた。とても幸せな悩みだった。

セイは薄い茶色をした液体をグラスに注いで一口飲んだ。少しだけ疲労を感じていた。セイは携帯電話の着信音で我に返った。それはテツロウからだった。セイの中に言いようもない感情が沸き起こるのを感じた。しばらくして、玄関にテツロウが現れた。

テツロウはセイを見て驚いたような声を上げた。

「どうしたんだい？ついこの間までの君とはまるで別人に見えるよ」

「テツ、」

「今にも死んでしまいそうだったのに、ずいぶん元気そうだね。あの子のおかげなのかな」

テツロウはふっと笑った。

「とはいえ、まだまだ栄養が足りてなさそうには見える」

テツロウはアゲハの為の痛み止めを持って来ていた。セイは大事そうに紙袋に入ったものを受け取った。

「セイ、君はクスリを飲まないし、飲んだとしてもとんでもない使い道をしそうだから、しばらく出すのは止めにしたよ」

セイが気まずそうな顔になった。

「代わりに何か食べて元気をつけた方がいいと思ってね」

テツロウはセイに、小振りの蓋つき鍋を差し出した。中身はミネストローネだった。

「この間はよく食べていたじゃないか。自分で言うのもなんだが、今回のもよく出来ているんだ。君は、きっともっと元気になれるだろう」

テツロウが意味ありげに笑った。

「……ありがとう」

「明日はクリスマスイヴだね。君の邪魔なんて野暮なことはしないよ。それじゃあ、メリークリスマス」

テツロウはそう言い残して帰って行った。テツロウが帰った後で、セイは鍋を火に掛けた。辺りに美味しそうな匂いが漂い始めた。セイはスープを皿によそった。ごろ、となにやら大きな塊が皿の中で転がった。セイは嫌な予感がした。反射的に口元を手で覆った。

隣の寝室で、アゲハがぐっすりと眠りについていた。

セイはたまらなく吐き気を催して、流しに駆け寄って胃の中身を吐き出した。苦い味がした。吐き出せるものなどほとんどないはずなのに気分が悪くて仕方がなかった。ようやく吐き気が収まって、セイは口元を拭った。もう一度、テーブルの上のスープを見た。中には、明らかに人間の体の一部が入っていた。スープの中で、ぐずぐずに煮込まれていた。聞かなくたってわかる。これは、アゲハの切断された手足だ。他にテツロウがそうする理由がない。セイはがたがたと震えていた。テーブルの上の、酒を一気に飲み干した。まだ震えが収まらなかった。スプーンで、恐る恐るその、肉を解して口に入れた。トマトを使ったスープのいい味がした。しかしセイはその肉を受け付けることが出来ずにテーブルの上に吐きだした。吐き気は長いこと収まらなかった。セイは吐き出した中にある肉片を、指で摘まんで選りだして再び口に入れた。今度は吐き出さない様に口元を押さえて咀嚼を繰り返し、どうにか飲み下した。

セイはコップになみなみと酒を注いで、ほとんど一気に飲み干した。立て続けにもう一回口に含んだ。喉の奥が焼けるように熱くなった。セイになにか厄介なスイッチが入ったようで、鍋から直接、皿に移すこともせずにスプーンを突っ込み、スープを貪った。

口いっぱいに、アゲハの肉を頬張った。かち、と歯に当たるものがあった。骨の感触がした。セイはまた食べたものを嘔吐した。テーブルの上を嘔吐物が溢れて、床に伝って流れ落ちた。嫌な臭いがした。吐き出したものの中にある肉片を探してセイは口に戻した。嫌な味がした。また吐きそうになるのをどうにか堪えた。セイにはどうしたって捨てられるはずがなかったのだ。どんなに気持ちが悪かろうと、アゲハの体から滲み出した体液の混ざりこんだスープの

一滴も、鍋の中から残さず飲み干した。肉は柔らかく、味がよくしみていて骨離れもよかった。

小さな鍋は空っぽになった。

セイは涙と嘔吐物に塗れてどろどろになって床に倒れていた。セイはその手の中にアゲハの骨のかけらを握りしめていた。小さな鍋の中には骨だけが残っていた。セイはぐったりと目を閉じていた。そのままでしばらく動くことも出来ないままでいた。まるでアゲハと手を繋ぐように、セイはぎゅうと握りしめていた。

#32：黒い花に赤い蝶々

『ミオ、迷惑ばっかりかけてごめんね。君が日本に帰ってくる日まで、僕は生きられないかもしれない。本当は直接会って話したかったんだけど。カガリをよろしくお願いします。ちょっとだけどカガリの為の口座にお金が入っているから自由に使ってください。今は君がこの手帳を見つけてくれることだけが願いです。ミオが居なかったら、今の僕はなかったと思うんだ。本当に感謝してる。このネックレスを栞代わりに挟んでおきます。カガリが年頃の女の子になったら、僕からだって渡してあげてください。それじゃあ。
ミオ、アゲハ、カガリ、シーナ、それにテツも。皆ありがとう。愛してるよ。』

セイはキッチンの汚れた床の上で目を覚ました。悪い夢を見たと思った。目が覚めた後もしばらくの間、動くことも出来なかった。これは悪い夢の続きだ。セイはのろのろと起き上がると、足を引きずるようにしてバスルームへ向かった。シャワーで汚れた体を洗い流した。

セイはそうっとアゲハの居る部屋に入った。枕元に立って、アゲハを見つめた。アゲハは目を閉じて安らかそうに眠っていた。セイはアゲハを見ている内に、あの肉の味を思い出した。セイの体ががくがくと勝手に震え始めた。両手で体を押さえつけても収まることがなかった。

「うーん、」

アゲハが寝返りをうった。そうして、うっすらとその目を開いた。何かの気配を感じて目が覚めたようだ。アゲハは傍にセイがいることに気が付いた。そうして、枕元に立っているセイを見上げた。

また自分が起きるまで見ているつもりなのかとアゲハは思ったが、

どこかおかしい様子に気が付いた。真っ暗な部屋の中でセイが震えているのだ。部屋の中は暖かいのに、まるで凍えているかのようだった。

「……どうしたの？」

アゲハがセイに呼びかけた。セイはアゲハが起きたことに気付いたようだ。アゲハの頬に冷たい滴がぽと、と落ちてきた。セイの涙だ。アゲハは体を起こすと、セイに向けて両腕を広げた。

「セイ、おいで」

セイは一瞬、何が起きたのかわからない様子で動きを止めた。そうして、その後で力なく微笑んだ。アゲハの腕の中にセイは身を預けた。アゲハはセイの薄い体を抱きしめてやった。撫でさすってあげたかったが出来なかった。

「うう……」

セイは少しだけ声を上げて泣いた。初めて見せるセイの弱さだった。アゲハはその理由はあえて訊かずに、セイが落ち着くまでの間ずっとそうしていた。

セイは今度はアゲハの眠るベッドの中で目を覚ました。カーテンの隙間から朝の光が漏れていた。アゲハはセイの体に腕を回したままでまだ眠っていた。その寝顔を見ると、セイは心の底から安らいだ気持ちになれた。さらさらしたアゲハの髪を指で絡めて、弄んでいた。アゲハの体からはふわっとした花のいい香りがする。あの、ピンクの泡の立つ入浴剤のものだ。髪に触られる刺激でアゲハが目を覚ました。あの、茶色の大きな目がセイを見つめた。

「おはよう」

「……おはよう、セイ」

アゲハはセイが昨日と変わらず幸せそうに笑っていたので、夜の間のことは訊かずにおいた。今はそれよりもやっかいなことがアゲハの中で起きているのだ。それはもうどうしようもなくなっていた。アゲハは顔を真っ赤にしてセイに言った。

「……ねえ、セイ」

「どうしたんだい？」
アゲハの口が何かを言っているように動いた。
「聞こえないよ」
セイはアゲハに顔を近づけた。
「……トイレ行きたい」
アゲハの顔はいよいよ真っ赤になっていた。セイはにこっと笑うと、アゲハの頭をよしよし、と撫でた。
「気付かなくてごめんね。じゃあ行こうか」
アゲハがぐっと目を閉じた。セイはアゲハからズボンと下着を脱がせて、抱き抱えた。後始末をされている間も、アゲハは目を逸らして出来るだけ何も考えない様にしていた。恥ずかしさのあまり本当に死んでしまいそうになるのだ。
「アゲハ、これは恥ずかしいことじゃないんだよ、生きてるって証拠なんだから。それに僕なら全然嫌じゃないんだから気にしなくたっていいよ。君はもっと水を飲まなきゃダメだ。トイレの回数が少なすぎ。水分はちゃんと摂らないと体を壊しちゃうよ」
セイは何度も何度も項垂れているアゲハを慰めた。毎回トイレに行った後はアゲハが立ち直るまでにしばらくかかるのだった。アゲハはまだ顔を真っ赤にしたままでテーブルに頭を付けた状態で固まっていた。
「うん、でもまあ良かった。我慢したままは体に良くないしね」
セイは立ち上がると、流し台の前に立った。
「アゲハ、朝ごはんにしよう。何がいい？」
「……何でもいい」
アゲハは力なく答えを返した。
「ねえアゲハ。今日はクリスマスイヴだよ。晩ごはんにね、なにかそれらしい御馳走用意しようって思ってるんだけど、食べられそうかい？」
アゲハはうーん、と考えた。
「セイが一緒に食べるんだったら、僕もなんだって食べるよ」

「うん、わかった」
セイは何か自分で作っているようだった。包丁の刻む音が聞こえてくる。アゲハは何を作っているのだろうかと、イスに座ったままセイの様子を見つめていた。いつもの鍋の隣に見かけない小さな蓋付きの鍋があるのに気が付いた。何時の間に買い足したのだろうかとアゲハは首を傾げた。
セイはどうやらアゲハの為に、和食の朝ごはんを用意している様子だった。テーブルの上には調理済みの総菜の入ったパックが冷蔵庫の中から取り出して並べられていた。メニューのなかで、みそ汁だけをセイはどうやら自作しようとしているようだった。しばらくして、みそ汁の匂いが漂ってきた。セイは温め直したご飯をよそった。そして、珍しいことに自分の前にも同じ献立を並べていた。量は圧倒的に少なかったが。ご飯に味噌汁、切り分けた厚焼き玉子、お浸し、焼き鮭、漬物と梅干しと焼き海苔。それと熱いお茶が並べられた。
「旅館の朝ごはんみたいだね」
アゲハは感心した声を出した。
「ありがとう。じゃあアゲハ、先に食べさせてあげるね」
「うん、いただきます」
と、その前に。アゲハがセイに顔を近づけた。そうして軽く口付けた。
「アゲハ」
セイがびっくりしたのと、嬉しいのとで戸惑ったように微笑みを浮かべた。アゲハは自分からやっておいて、今更恥ずかしそうな顔をした。
「セイ、お腹すいたよ」
「はいはい。じゃあどれから食べる？」
「うーん、ご飯に梅干し乗っけて醤油つけた海苔で巻いたの」
細かいリクエストにセイは答えて、アゲハに差し出した。みそ汁は少々イメージにそぐわないがスプーンを使った。

「どうかな？」
セイはこれだけは自作なので不安そうな顔だ。
「ちょっとしょっぱい」
「そう、ううん、難しいなあ」
真剣な表情のセイにアゲハはくす、と笑った。
「うちのばあちゃんは薄味だったからさ。大丈夫だよ。美味しい」
「……ありがとう」
「セイも食べなよ。冷めちゃうだろ」
「うん、」
セイは自分の前の皿から、玉子焼きに箸を付けた。アゲハは何気にセイがまともな食事を摂るところを見るのは初めてだな、と思った。アゲハは焼鮭が苦手だったが言わないでおいた。自分よりも遥かに偏食の男がそれに耐えているのだから。
スーパーには何でもあるんだなとつくづくアゲハは思った。焼き魚もパック詰めになって売られていたものだ。セイは売り場で、パック詰めにされた魚たちを見てきたのだろうか。そしてやはり望むものとは違うと思ったのだろうか。
アゲハがぼんやりしている内に、セイの手によってアゲハの分の鮭が身の部分と骨と皮にきっちりと選り分けられ、分解され、一口大に切り分けられていた。セイがその一片を箸で摘まんだ。
「あーんして」
「僕は赤ちゃんじゃないやい」
ふふ、とセイが嬉しそうに笑った。どうしてセイは、こんなにも楽しそうなのだろうかとアゲハは思った。セイは病気なんだと思い込むことにした。言うなれば恋の病だ。余計嫌な響きになってしまった。
セイも自分のみそ汁を一口飲んだ。セイも何故かスプーンを使っていた。
「うん、しょっぱい」
そう自分でも言っていた。どうやら味見はしていなかったらしい。

食事を終えて、痛み止めの薬をアゲハは飲んだ。セイにどこがいいかを訊かれ、アゲハはベッドがいいと答えた。セイは食事をしていた場所からアゲハを抱え上げると、ベッドの上へ降ろした。そうして、頭を撫でた。

「カガリの所に行ってくるよ。何かあったら呼んでね」

そう言って、アゲハにシーツを掛けた。セイは部屋を出て行った。

アゲハはただぼんやりしていた。今はすることも出来ることも何もなかった。今日も、明日も、またその先も。アゲハは自分がずっとこんな生活を続けていくのだろうかと考えた。はっきりとそう自覚するのは恐ろしいことだった。自分のことが何もできないアゲハは怖くて仕方がなかった。アゲハにはセイだけが頼りだった。

――もし。セイに捨てられでもしたらどうなるのだろう。アゲハの背筋がすうっと寒くなった。

しばらくして戻ってきたセイは、アゲハが青白い顔をして震えているのに気付いた。

「どうしたの？アゲハ、傷が痛むのかい」

「……セイ、」

セイは頓服を持ち出してアゲハに飲ませようとした。アゲハは首を振った。アゲハはその代わり、セイに向かって両腕を広げて差し出した。セイはアゲハの言いたいことが理解出来た。アゲハの望むとおり、その体をぎゅうと抱きしめた。

「アゲハ。辛くなったらいつでも頼りにしてくれていいんだよ。僕はいつでも、ずっと君の近くに居るんだからね」

「セイ」

アゲハが言葉を詰まらせた。セイの腕の中でしゃくりあげるようにして泣いた。セイはアゲハの背中をぽんぽんと叩いた。

「ねえアゲハ。歌をうたってあげようか」

セイからの思ってもみない申し出にアゲハが目を丸くした。

「どうしたのさ、急に」

「ううん、君のことをこうしてあやしてるとね、昔カガリがぐずっ

てた時のことを思い出したんだ」
「……そう」
「カガリは僕の歌が大好きなんだよ」
アゲハは目元を擦り、セイにしがみ付いた。
「聴かせて」
セイはアゲハの耳元で、なにやらでたらめなメロディを口ずさんだ。本当に赤ん坊を寝かしつける時のような歌だった。アゲハは不思議と落ち着いた気持ちになった。セイの歌声がアゲハの心の奥底にまで響いて、寂しさや怖かったことを紛らわせていくようだった。
アゲハがはあ、と熱のこもった息を吐いた。ずっとセイに抱きしめられているうちに、妙に熱を持ってきてしまった。それはセイも同じのようだった。2人の目が合わさると、セイはアゲハをベッドに押し付けた。仰向けになったアゲハの上にセイが体を重ねる。
「セイは、最近がっつきすぎ。僕のこと見てるだけで幸せだったんじゃなかったっけ？」
「最近はそうでもないんだ」
「ああそう。ずいぶんセイもお若いね」
「誘ったのは最初から君の方だっただろう？」
セイはアゲハのシャツを脱がしにかかった。アゲハは特に抵抗することはなかった。心の中で真昼間から何をやっているんだとは思っていた。部屋の中は相変わらず薄暗くて、別に気にもならなかったが。
そうだった。今日はクリスマスイヴだ。何をどう勘違いしたのか、恋人たちがお互いの愛情を確かめ合う日なのだ。アゲハは可笑しくなってきてくす、と笑った。貧相な裸を見られるのが恥ずかしかった筈のセイはいったいどこへ行ってしまったのだろうか。今、自分から進んで服を脱ぎ捨て、アゲハの体を弄りまわしている。アゲハはセイのやりたいようにさせていた。
アゲハは今更のように、セイは案外セックスが好きなのかもしれないな、と思った。それも、とんでもなくアブノーマルなものだ。

人形みたいに澄ました顔をしているくせに、下半身は発情期を迎えた動物だ。こんな生活をしていたら案外本気で妊娠させられそうだなとアゲハは思った。
ふと、そんなセイの顔を見た。顔に掛る息がずいぶんと荒い。アゲハはセイの様子がいつもと違い、なにか切羽詰っているようなのが気にかかった。
「セイ、何か様子がおかしいよ。どうしたのさ、何かあったの？」
セイはアゲハの胸を舐める合間に、乱れた口調で呟いた。
「君が、女の子の友達が出来たって聞いてからさ、僕がどんな気持ちでいたかわかる？」
ああ、とアゲハは思った。やはりというか、セイはユウヒのことを誤解していたようだ。
「……ねえ、セイ。僕はちゃんと言ったよね？ただの友達だって。それとも何か？エロ親父の思考じゃあそんなのありえないってか。バカバカしいね。下らない嫉妬だよ」
「下らなくたっていいよ。本気で妬いてたんだから」
いじけたセイの物言いにアゲハは声を上げて笑った。セイが何がおかしいのかといった顔を向けた。
「その子はね、他にちゃんと好きな人が居るんだよ。僕に色々教えてくれって言うんだけどさ、セイとのことアドバイスなんか出来やしないよ。だって君は呆れるくらいヘンタイで変わり者なんだもん」
「アゲハは、僕がミオと仲良くしてても気にはならない？」
「そんなの。君にはカガリが居るじゃないか。それって昔に他の女の人とセックスやってましたってことだろ、バカバカしい。それに」
「何？」
アゲハは顔を赤くした。
「僕はセイのことそーゆう意味で好きなんじゃないんだ」
「嘘ばっかり」
セイは笑って、アゲハに口付けた。
「うん、僕は嘘つきだよ。そんなのわかってるくせに」

アゲハはにいっと笑った。セイに腕を伸ばして、その背中に回した。アゲハは顔をセイの裸の胸に押し当てた。
「セイ、大好き」
アゲハの声はくぐもって聞こえた。
「さっきの台詞の後で言わないでよ」
「……愛してるよ。これは本当だよ。だから、……僕を捨てないで。僕を置いてもうどこにも行かないで。セイが居なきゃ、生きていけない」
アゲハはまたぽろぽろと涙を零した。セイはアゲハと体を離し、その顔に伝って流れた滴をそっと拭った。アゲハの上半身を抱き起し、またしゃくりあげ始めたアゲハを抱きしめた。
「僕はどこへも行かないよ」
アゲハの目が、試すようにセイをじっと見つめている。
「約束するよ」
「……ありがとう」
アゲハはそう言うと、本当に幸せそうな顔をした。
「もう、そんな気分じゃなくなっちゃったんだね」
セイがアゲハの下半身をちらっと見て、がっかりしたように言った。
「……前言撤回、やっぱりセイはバカだ、サイテーのヘンタイだ！」
「ゴメンゴメン。じゃあアゲハ、お風呂に入ろう。また泡でいっぱいのにしてあげる。なんか外国の映画みたいで楽しいんだ」
「だったらもっと余裕のあるバスタブ用意してよ」
「狭いから楽しいんじゃないか」
２人で入るには少々無理があるサイズのバスタブの中に、今度は青い色をした泡が立った。ピンクのとはまた違った香りがした。海をイメージしたものだ。
「キレイだね」
アゲハがふうっと息を吹き付けると、さわさわと泡が縁に寄せられた。

「僕は、青い色にどちらかと言えば空を思い浮かべるよ。空をイメージした香りってどんなのかなあ」
アゲハは自分の遥か上方にある、どこまでも広い空を思い描いた。
「どうして、人は空を飛べないんだろうね。きっとどんなにか気分がいいだろうに」
「セイの中じゃあ飛行機とかは勿論論外なんだろうね」
セイは笑ってそれに答えた。
「アゲハは空を飛んでみたいって思うかい？」
アゲハはしばらく考えた。それから首を振った。
「一度挑戦して、身を以って知ってるからね。空はいいや。でも」
「何？」
アゲハは体を回して、自分を後ろから抱きしめているセイと正面から向かい合う形になった。
「蝶々になって、君の周りをひらひら飛んでみたいなっては思う」
蝶々がひらひらと舞う様は、空を飛ぶと言う言葉のイメージとは違うもののようにアゲハには思えた。
「そうだね。アゲハは本当にそういうのが似合うよ。花の周りをひらひら舞ってる、可愛い真っ赤なアゲハチョウだよ」
「……セイは自分がキレイな花のつもりなのかい？」
アゲハはくすっと笑った。
「勿論。君が引き寄せられる位、魅力的な花を咲かせてるつもりさ」
セイが大真面目な顔をして答える。アゲハはセイが大抵黒いシャツにパンツ姿なのを思い浮かべた。
「セイのイメージっていうかさ、なんか何考えてんのかわかんないし、いっつも黒い服ばっか着てるしさ。君が花だとしたら、それは多分真っ黒な花だね」
「ずいぶん毒々しい」
「いいじゃないか。そんな不気味な花なんかには、僕くらいしか羽を休める蝶々なんかいないだろ？」
「そうだね。アゲハだけで、僕はそれ以上のことは何も望まないよ。

黒い花に赤い蝶々かあ。案外ステキだね」
セイはうっとりしたような顔をしていた。
バスルームを出た後で、セイは真っ白なシーツに包んだアゲハを抱いて、ベッドに座っていた。アゲハからはあの、青い泡と同じ香りがしていた。アゲハはどこか虚ろな目をして大人しく抱かれていた。時折、自分を抱える腕の持ち主の顔を見上げて、確かめているようだった。目が合うと、セイは嬉しそうに笑った。
「アゲハ、今日くらいは一緒にお酒でも飲もうよ」
セイがそう持ちかける。
「後3年したらって約束してるのに」
「いいじゃない。ねえアゲハ、何が食べたい？」
アゲハはセイの顔をじっと見つめた。それからしばらくの間黙って真剣に考えた後で、悪戯っぽい笑顔を浮かべて言った。
「でっかい七面鳥の丸焼きがいい」
「あれ、見た目だけでそんなに美味しくないと思うよ？」
「あーゆうのがテーブルの上にあったらさ、すっごい豪勢なパーティーみたいじゃん。残念ながら僕んちには縁がなかったんだよね」
「うん、わかった。後はアゲハの好きなものを買ってくるよ」
「僕の食べられる量っていうのもちゃんと考えてよ。食べ物を無駄にしちゃ罰が当たるよ」
「肝に銘じとく。それじゃあ、買い物に行ってくるよ」
セイはアゲハをそっとベッドの上に横たえさせた。不安そうな目でアゲハがセイを見上げる。セイは身を屈めると、アゲハの顔を覗き込むようにした。
「大丈夫だよ。すぐ帰るからね」
セイはそう言ってアゲハに口付けた。
「この間は雪が降ってたんだ。今日もそうだといいね。……ねえアゲハ、雪が降ったら教えてあげる。カーテンを開ければ雪が見れるよ。きっとステキだろう」
セイはそう言って、今まで一度も開けたことのない遮光カーテン

を指した。
「うん。……セイ、いってらっしゃい」
セイはアゲハの居る部屋のドアを静かに閉めた。それから、カガリの様子を見に行った。
カガリは部屋の真ん中で、カーペットに座り込んでいた。腕の中に白い大きなクマのぬいぐるみを抱えている。耳に結んだピンクのリボンも、ピンクのワンピースもお揃いだった。セイはカガリをそっと抱き上げた。
「カガリ、今日はクリスマスイヴなんだよ」
「ぷうううううう」
腕の中のカガリが何事か訴えるように鳴き声を上げた。
「ねえカガリ。カガリは女の子なのにケーキもアイスも嫌いなのかい？」
「きゅううう」
セイはカガリの頭を撫でた。
「今夜はね、サンタさんがカガリにプレゼントを持ってきてくれるんだよ。今度はピンクのクマさんかもしれないね」
カガリが嬉しそうな顔をした。セイも目を細めてカガリを見つめる。
「いい子だね。じゃあ少しの間お留守番しててね」
セイの顔を見上げた、カガリの口元がもごもごと動いた。
「……ぱ、」
カガリがはっきりとそう言った。
「……ぱぱ！」
それは今までのような鳴き声ではなかった。
セイはにっこりと微笑みかけると、カガリを降ろした。そして、部屋を出て行った。カガリが立ち上がり、セイの後を追うように歩き出した。ドアの前に立った。すうっと大きく息を吸い込んだ。
閉じられたドアを開いて、白とピンクで守られた空間から、カガリは一歩足を外へと踏み出した。そうして、恐る恐る、部屋の外へ

と歩き出した。セイは玄関を出る所だった。セイの後ろ姿がドアの向こうに消えていくのを、カガリはじっとその場で見送っていた。

セイは薄暗くなってきた街の中を歩いていた。空は曇っているようだ。この分だと今夜あたりには雪になるだろう。セイはアゲハと離れてから、忘れていた体の不調を思い出した。頭が酷く痛みはじめる。それを振り払うように、セイは考え事をした。

――カガリの為に、ピンク色をしたクマを買ってこよう。キレイにラッピングもして、メッセージも付けてもらおう。アゲハには何がいいかな？びっくりさせたかったからあえて何も訊いてこなかったんだ。雪みたいに白い服がいいな。ウエディングドレス、着てほしいって言ったら怒るかな？うん、絶対に怒るだろうな。しばらく口もきいてもらえなくなりそうだ。それは嫌だなあ。今日は止めておこうか。

セイはスーパーまでの道程を歩いた。冷たい風が吹いている。足取りは重いが、心はそれに反してとても舞い上がっていた。クリスマスパーティーの支度がこんなに楽しいのは何年振りだろうかとセイは思った。その日は長いこと、セイにとっては辛い思い出でしかなかった。

通りすがりのショーウインドウで、キレイに着飾ったマネキン人形が、セイの思い描いたような白いドレスを身に纏っていた。ヘッドドレスに蝶々のモチーフがあしらわれているのが気に入った。セイはしばらくの間うっとりとそれを見つめていた。街中には、所々で警官の姿が目に入った。セイの見ているショーウインドウの向かいの店で、展示品のテレビがニュース番組を流していた。セイはその前を通り過ぎていった。行方がわからなくなっているという、少年の写真がその後で映し出された。

寒さのせいか、時間が経つにつれてセイの頭痛は酷くなる一方だった。頭がガンガンする。セイは両手で頭を抱えてその場に蹲った。

しばらく休んで、また再び歩き始めた。
――全く、煩いなあ。今日は耳鳴りまで酷いや。
セイの意識は朦朧とし始めていた。カンカンカンカン、と、セイの耳元で警報機が鳴り響いていた。

セイの目の前で、真っ白なドレスを着たアゲハが、こちらに向けて手を差し出していた。セイは迷わずその手を掴んだ。目の前に居るアゲハの姿が赤く歪んだ。白いヘッドドレスの蝶々が赤く染められている。
――ああ、そうだ。アゲハは赤いアゲハチョウだったよね。やっぱりアゲハには赤が似合うなあ。
くす、と微笑んで、セイは目を閉じた。

暖かなシーツに包まれて、まるで羽化を待つさなぎのような姿になっていたアゲハは、そのままうとうとし掛かっていた。なんだか自分は眠ってばかりいるな、と思った。アゲハは顔を上げる。ぞく、と何か寒気がした。テーブルの方を見た。そこにはいつものように、酒を飲んで寛ぐセイは居なかった。
アゲハは急に、何故だかもうセイがここには帰ってこないんじゃないかと思った。そんな気がした。
――雪が降ったら、教えるよ。
アゲハは口で咥えたカーテンを引いた。もう、外は暗くなりかかっていた。ちらちらと白い雪が舞っていた。アゲハは窓のカギを外した。どうにかこうにか、窓が開いた。ひゅう、と冷たい風が入ってきた。
アゲハは外に両腕を差し出した。白い雪に触れてみたいと思ったのだ。窓を開けたせいで騒がしい音がアゲハの耳に入ってきた。どこかからサイレンの音が聞こえてきた。アゲハはセイの姿を探そう

と、窓の外へと身を乗り出した。その時、一際強い風が吹き抜けた。
「あ、」
暗い空に、両腕をいっぱいに伸ばしたアゲハの体が落ちていった。
雪は静かに降り積もっている。アスファルトを、雪が白く染め上げた。そこに、赤い羽を広げた蝶々が1羽、何も言わずに横たわっていた。

#33：20210827

開け放した窓から吹き込んだ風がレースのカーテンを揺らした。窓際に飾られたフォトフレームをそうっと撫ぜる。写真の中では、幼い子どもを抱き抱えた少年と、顔色の悪い青年が微笑んでいた。

少女は鏡に映した自分に、白いふわふわしたワンピースとピンクのワンピースを交互に当てて、うーんと考え込んでいた。少し悩んで、白い方に袖を通した。ファスナーを上げると、お腹の辺りが窮屈に感じた。スカートを捲り上げてみる。白い下着の上に、少しばかり膨らんだお腹が乗っかっていた。

少女は両手をお腹に当てて、ふう、と息を吐いた。やはりそろそろ真剣に、ダイエットすることを考えた方がいいかもしれない。

「カガリ、準備出来た？もうそろそろ時間よ」

「はーい」

カガリはフォトフレームの前に置いた十字架のネックレスを手に取ると、大慌てで部屋を飛び出した。

キッチンに行くと、カガリの為に朝食が用意されていた。テーブルの上には、トーストが2枚。自家製のマーマレードにハムエッグとトマトのサラダ、オレンジジュースが置いてあった。カガリはパンを齧りながらミオに言った。

「ママ、私今日からダイエットしようと思うの」

「あら、どうしたの？カガリはそんなに肥ってるようには見えないわよ」

カガリはワンピースの上からむちむちしたお腹周りをさすった。

「これ以上肥ったらママの買ってくれたワンピースが張り裂けちゃう」

そうは言いながらも食べるペースはいつもと変わらず、ミオは可笑しくなって笑った。

「カガリは食べるのが大好きだから、食事を減らすのは難しそうね」
カガリはぷう、とふくれっ面になった。
「私が肥ったのはママのご飯が美味しすぎるからだもん」
「あら、嬉しいけど、私はそんなに料理上手じゃなかったのよ？昔手料理を差し入れしたら、殺人兵器だって言われたことあるもの」
「誰がそんなこと言ったの？」
ミオはくすくす、と笑った。
「アナタのお父さんよ」
ミオはその時のセイの様子を思い出していた。
「君は愛情で人が殺せそうだね」
ずいぶん失礼なことを、と当時は思っていたが、今思い返せばそう言われて当然の料理だったかもしれない。
カガリは水に浸けておいた赤いバラの花束を手に取った。顔を近づけると、とてもいい香りがした。花束を抱えて、カガリはミオの待つ車に乗り込んだ。
「ママ、どこ行くの？パパのお墓参り？」
ううん、とミオは首を振った。
「お墓よりも、もっとセイに会えそうな所」
2人を乗せた車は街を遠く離れて、小高い丘の上に着いた。カガリは車から降りると嬉しそうに駆けて行った。赤い花束を両腕に抱えて、一番端っこの木で出来た柵の辺りまで近づく。見下ろすと、そこには海が見えた。空とはまた違った青い色をしていた。
「うわあ……」
カガリが感嘆した声を上げた。
「ほらほら、危ないわよ」
カガリがミオを振り返った。
「ねえママ、ここにパパが居るの？」
「そうねえ」
ミオは辺りを見回した。開けた場所で、見渡す限り緑色の草原が広がっていた。所々にひとかたまりになって咲いている花があった。

夏の終わり、しかしまだ強い日差しの中を気持ちのいい風が吹いていた。
「ここなら、カガリのことがよく見えるでしょう？」
カガリは服の内側から十字架を取り出して、じっと見つめた。この間の誕生日にミオがくれたものだ。セイの写っている唯一の写真と共に、１５歳になったカガリに贈られた。
「ママとパパは、お友達だったんだよね？」
「そうよ」
カガリはうーん、と何か考え込んだ様子だった。しばらくしてから言った。
「私、シーナママのこと、全然覚えてないの。パパは写真があるけど……」
カガリは自分の中に残っている、セイの記憶を引き出そうとしてみた。優しい笑顔で自分に笑いかけるセイがどこかへ行ってしまったあの日。玄関で見送っていた後ろ姿が一番強く印象に残っていた。
「ねえ。これからもママって呼んでもいい？」
「……ありがとう」
ミオはカガリをそっと抱きしめた。カガリが顔を上げてミオを見た。
「ママ、あの写真。私を抱っこしてる人はいったい誰なの？」
「え、ええ……そうね、」
ミオはアゲハのことをなんと説明すればいいか迷った。
「とってもキレイな人だね」
「……アゲハのことは、覚えてないかしら？とってもアナタの事を可愛がってくれてたのよ」
「そうなんだ」
カガリは納得がいったのか、また柵のある所まで駆けて行った。そこで大きく両腕を広げて、空を見上げた。
「パパ、誕生日おめでとう！パパの大好きな真っ赤なお花持ってきたんだよ！」

白いふわふわしたワンピースを着たカガリは、本当に天使の様に愛らしかった。さあっと吹き抜けた風が、腰まで伸ばした髪を吹き上げた。ミオは少し離れた場所から見守っていた。

――セイ、シーナとは会えた？そっちは上手くやっているのかしら？アゲハも一緒だったら、きっと浮気者って言ってシーナに張り倒されてるわよね。……私たちは元気でやってるから心配いらないわ。アナタの方こそ、大変でしょうけど。私はケンカの仲裁になんて行けないんだからね。

――そんないじわる言わないで、助けてよミオ。

ミオの中で、情けない顔をしたセイの姿が思い出された。それが堪らなく可笑しくて、ミオは笑った。

「あ、」

カガリの声が聞こえて、ミオは我に返った。

「ちょうちょ！」

カガリが花の周りをひらひらと舞っている一羽の蝶々を見つけた。蝶々はカガリの抱えているバラの花の上に留まった。カガリがじっと見つめている。大きな羽を広げた蝶々が再び飛び立った。カガリはその姿を追って空を見上げて、太陽の眩しさに目を細めた。舞い戻ってきた蝶々がカガリの髪の左側面に留まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3289w/

どうせ人は空を飛べない

2011年9月30日09時56分発行